

布留の鼓動



講話集

布留の鼓動

第二十三回神道講演全国研修大会・奈良大会

目次

御挨拶

序

記念講演 「石上神宮と御神宝について」

サルから学ぶこと

神國でありたし

旧暦（太陰太陽暦）を見直そう

プロとして

日本の皆様 靖国神社を守って下さい（ブラジルの中高生からの手紙）

やっぱり日本酒が一番

美の神様

お参りする時の心構え

禊

新宅祭奉仕のあとに

神道と芸術

神社本庁総長 矢田部 正巳

石上神宮宮司 森 正光

石上神宮宮司 森 正光 1

熊谷 房重 15

高尾 宗嗣 20

中木屋 豊 24

村田 和弘 30

寺本 正徳 33

畠田 明彦 38

竹中 仁志 43

西臺 卓哉 47

前川 成文 51

佐々木 貞一 54

浦 隆一 59

昭和祭のあとで

亥年に思う事

言霊の幸ふ国

國造傳記解―私の子供時代の父親の話から―

春の夜の夢

例大祭のあとで

感謝の心

枚岡神社はどうして「元春日」と呼ばれるのか

てって

よみがえれ！ 日本の心

丹生川上神社について

境内発々心駆着

磨ぎな忘れそ

御遷宮への念い

石上神宮のにわとり

黒田明司 64

三木治夫 68

生寫經和 72

池田幸統 77

西村伴雄 82

山根俊彦 87

岩崎均 90

山根眞人 95

佐藤勇穂 99

渡邊知宣 103

中村徹 111

山元義清 116

村瀬佳子 120

木下久榮 124

湊久昌 130

日本の心

名馬壽号追悼祭

子育ては親育てから

万歳

神さまの音楽

神宮式年遷宮・・・何で俺たちが

みたまをいだきて

神慮の有難さ

身は いかになろうとも

祓について

五寸釘の寅吉

命

絆

日本人のしきたり

いのちのよみがえり―御遷宮は、世界の宝―

鈴木 明子

松吉 宣和 138

石塚 智康 142

原 茂子 150

山下 裕嗣 155

田代 壽興 160

佐々木 美津子 165

川崎 太久美 169

木下 鏖二 174

芦原 高穂 180

佐古 一冽 185

村田 和之 190

河本 文夫 196

西村 純子 205

大野 康孝 211

神道講演構成法

奈良大会の記録

神道講演全国協議会役員名簿

あとがき

奈良大会実行委員長

村田和之

228 227 223 219

御挨拶

神社本庁総長 矢田部正巳

第二十三回神道講演全国研修大会・奈良大会の講話集発刊にあたり一言御挨拶申し上げます。

貴会は長きに亙り神道講演を通じて斯道の興隆に御尽力戴いた石井寿夫先生・佐古幸嬰先生の御志を受け継ぎ、昭和四十六年より本研修大会を開催してられました。会員の皆様には、日々研鑽を重ねられた成果を、奉仕神社における社頭講話を始めとした神社活動の場で実践してをられることと存じます。これは、斯界にとりましても実に心強い限りであり、たゆみない研鑽に対し、深く敬意を表するものであります。

さて、現代社会においては青少年犯罪や、次々と発覚する不祥事など、公德心の欠片も見られない事件が頻発してをり、価値観を見直す気運が生じつつあります。このやうな時こそ、先人より受け継ぎ語り継いで参りました、自然への畏敬の念、神々と祖先への尊崇の心、神道の信仰と精神を分かり易い言葉で、氏子崇敬者をはじめ、広く一般に説く必要

がありませう。正しい志を伝へてゆく神道講演の大切さは、弥が上にも増すものと確信してをります。

また御承知の通り、平成二十五年には、第六十二回神宮式年遷宮が執り行はれることとなつてをり、奉賛活動や広報活動が順次進められてをりますが、我々日本人の祖神様をお祀りする神宮に対し、国民が挙つて奉賛の気持ちを持つことが重要であるのは改めて申すまでもありません。このことは多くの神社で祭典の際等に氏子・崇敬者に伝へてをられませうが、国民総奉賛に向けて貴会の活動は愈々重要になつてくるものと存じます。

どうか会員の皆様には、教化活動の第一線に立つとの自覚と気概を高く持たれ、国民精神の昂揚を以て、斯道の興隆をはかるために、尚一層の御尽力を賜りますやう切に願ひ申上げます。

結びにあたり、貴会の益々の御隆昌と、会員各位の御健勝と御活躍とをお祈り申し上げます。御挨拶と致します。

序

昨年の三月下旬、突然村田宮司さんからお電話があり、出来れば来年是非共石上神宮で神道講演の研修会をやりたいとお申し出があった。ご存知の通り、当神宮は斯界における神道行法の鍊成道場として毎年各種の行法研修会を開催している。村田宮司さんも先代宮司の頃から何回となく行法研修に参加され、小生もその後輩として格別のご高配を頂いていたこともあって、お引受けした次第である。毎年七月上旬に神社本庁研修所主催の行法研修会が開催されるので、梅雨時ではあるが六月中旬ということになった。次第に話が進むうちに、会場を受け持つ神社の宮司が大会会長の大役を受け、最初に記念講演を行わなければならないと知らされ、無知をさらけ出す結果となってしまった。

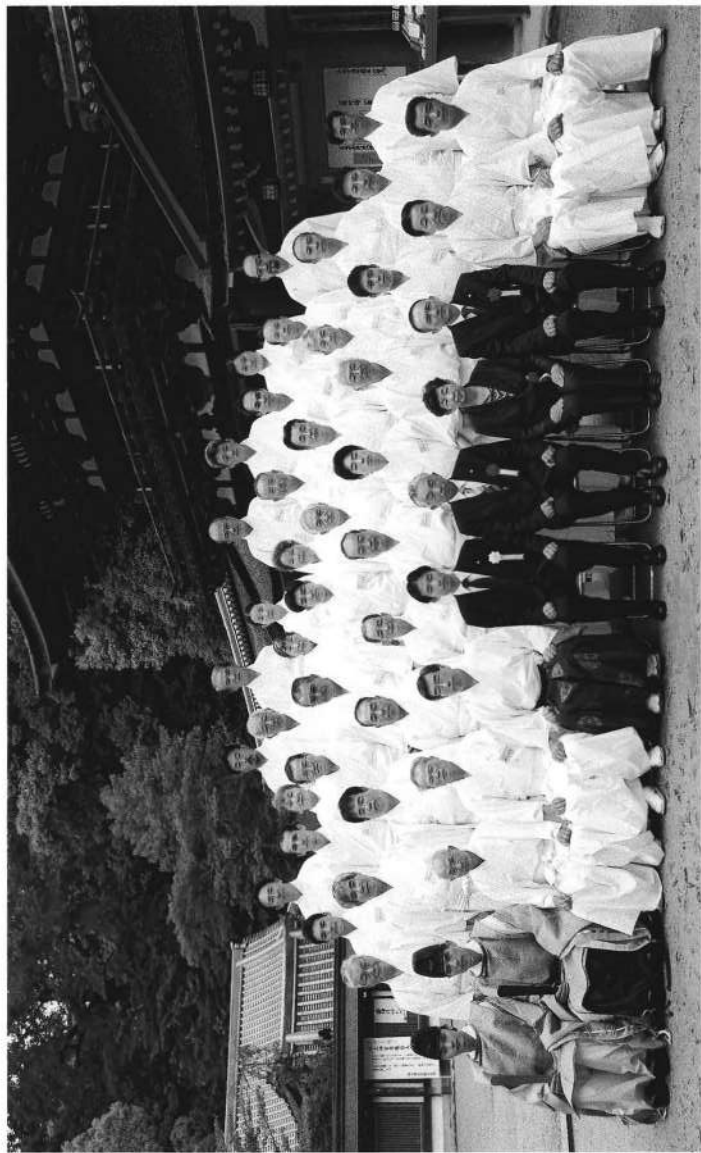
梅雨空の下、全国各地より約四十名の同志が参集された。先立って、有志が折角の機会とのことで禊場で心身を清めて臨まれた。私共の関わる研修とは全く異なった雰囲気、夜遅くまで机に向かって真剣に取り組んでおられる真摯な姿勢に感動を覚えた。

神職は社頭を始め様々な場所で真面な話ができるように、このような知的な修練をもつと積極的に積まねばならないし、更にはこの研修を通じて人の話の聞き上手になるということもまた重要であるということを改めて感じさせられた。

研修の受入れについて慣れてはいるが、行法研修とは違い何かと不便をお掛けしたことと思う。不自由を常と思えば不足なしとの気持ちで全員臨んで頂き、無事全日程を終了出来たことは、実行委員長始め事務局そして参加者のご協力の賜物と深く感謝しております。

世情が混迷し時局多難な折、私共神職が担う責務は非常に重大であり、この講演研修会の持つ意義は極めて大きく、今後の更なる発展と参加者各位の御健闘をお祈りしご挨拶と致します。

奈良大会会長・石上神宮宮司 森 正 光



第23回 神道講演全国研修大会 奈良大会

平成19年6月18日～20日

第二十三回

神道講演全国研修大会・奈良大会

とき 平成十九年六月十八日～二十日
ところ 奈良県 石上神宮

石上神宮と御神宝について

石上神宮宮司 森 正光

はじめに——くにのまほろば

倭建命が「やまとは、くにのまほろば、たたなづく、あをがきやま、こもれる、やまとしうるはし。」と故郷を偲んで詠まれた、肇国の大和国へよくお出で下さいました。生憎の梅雨空ですが、かえつて青垣なす山々の緑が一層美しく映えて見えます。

余談ですが、当神宮は地元の氏子から「布留のお宮さん」と呼ばれており、古くから「雨は降る降る布留の宮」と言われ、石上大神様が感動されると必ず雨が降るといいます。きつと皆様方のお越しを大層喜ばれて歓迎しておられるのではないかと思います。

神話によれば、神武天皇がどうして大和国に都を開こうとされたかについて、『日本書紀』には、神武天皇が物知りの鹽土老翁に聞かれた処、東方に青垣なす山々に囲まれた美しい所があります。その地は天磐船（あめのいわふね）に乗って天下られた饒速日命（にぎはやひのみこと）が既に治めておられる地ですと返答された。そんなに素晴らしく、国

の中心であるならば私も是非行つて都を作ろうとされて、東征が初まったと記されています。このことが最初にお話しました第十二代景行天皇の御代の倭建命の思国歌（くにしのびうた）にまで反映しているように思えます。

大和の原風景

まず最初に、大和の原風景、つまりは石上神宮周辺を取り巻く自然環境について少しお話をしておきたいと思っています。大和盆地の中で一番最初に開けた所はどこかといえば、奈良県北東部の南は大神神社の下、纏向遺跡から、北に向けて第十代崇神天皇陵を中心とした柳本古墳群の下、地域、続いて大神神社周辺地域、更には石上神宮下の布留遺跡周辺へと広がる地域、海拔七〇〇八メートル位の南北に細長い地域だろうと想像されます。大和盆地の中心部分は湿地帯で、水際の汀線が海拔五〇メートル前後で、その少し小高い周辺部に先程申しました集落が点在していたのではないのでしょうか。その集落を南から北へと結んでいた道が、日本最古の道と言われる「山の辺の道」だろうと思います。

布留遺跡

布留遺跡は、天理市の東南部にそびえ立つ標高五八〇メートル余りの龍王山から発した、一級河川の布留川が大和盆地に流れ出た所に形作られた肥沃な扇状地の中央部分にあり、旧石器時代から中世にまで続く複合遺跡であります。現在の天理教の主要建造物を中心とした東西約二キロメートル、南北約二キロメートルにも及ぶ広範な地域で、特に縄文時代から古墳時代にかけての住居の遺構や縄文土器・古式の土師器等が沢山出土しています。遺跡の南北は県下でも有数の古墳密集地帯として知られています。この布留遺跡に居住した人々の信仰の対象として、海拔一四〇メートル前後の高台、つまりは扇状地の要の部分に石上神宮が鎮座し、背後は標高二六六メートルの布留山を中心とした森に覆われています。

由緒

次に、石上神宮の由緒につきましても若干説明しておきたいと思います。『古事記』『日本書紀』、更には主に物部氏の伝承を記した『先代旧事本紀』に記されている通り、当神宮は我が国最古の神社の一つで、崇神天皇七年に現在地に鎮座になったと記されています。文献に初めて出てくるのは、『古事記』中巻冒頭の神武天皇東征の物語の中で、建御雷神

の身代りとして高天原から下された横刀（たち）の割り書きにした注に、

此の刀の名は、佐士布都神と云ひ、亦の名は甕布都神と云ひ、亦の名は布都御魂と云ふ。此の刀は石上神宮に坐す。

と記され、石上神宮に鎮座して布都御魂大神（ふつのみたまのおおかみ）として祀られたとあります。更に、最初にお話しました饒速日命が高天原から戴かれ、お子様の宇麻志麻治命に授けられた十種の御神宝である天璽十種瑞宝（あまつしるしとくさのみづのたから）とその起死回生の靈力を布留御魂大神としてお祀りしています。因に、饒速日命は物部氏の遠祖であり、宇麻志麻治命は当神宮の配祀神の一柱としてお祀りされています。また、素盞鳴尊が八岐大蛇を退治された天十握剣のお力を布都斯魂大神（ふつしみたまのおおかみ）と称え、総称して石上大神と仰ぎ、現在に至っています。健康長寿・病氣平癒・除災招福・百事成就の守護神として広く信仰されています。

ただ近頃少し困ったことに、参拝に来られる方々に、ここが「いしがみじんじゃ」かと言われることが度々あり、少々がっかりさせられます。中々正確に「いそのかみじんぐう」と読んでもらえず、一般の人々と私共神社側との認識の違いを痛感しています。当神宮発行の色々な印刷物等には必ず振り仮名を付けるように努めています。

更に、由緒などの社頭説明の折、参拝者が一番興味を持たれるのは、どうしてここにいるのかという様々な種類の鶏と青銅製の牛の像です。どちらも近年のものなのですが、鶏は石上大神様のお使いとして次第に神鶏化しつつあり、青銅製の牛は山の辺の道を行く方々が鼻筋を撫でられるので光輝き、すっかり境内に馴染んでいます。

御神宝の初見

前置きが長くなって申し訳ありませんが、この石上神宮を解き明かすキーワードとして、「神宮」「物部氏」「神剣」「ふる（振・布留）」「鎮魂」「御神宝」「神庫」「禁足地」等を挙げる事が出来ます。今回は「御神宝」、その中でも特に「七支刀（しちしとう）」を中心として当神宮の歩んできた歴史をお話し、私の大会会長としての役目を果たしたいと思います。

まず、当神宮の御神宝についての最初の記述は、『日本書紀』第十一代垂仁天皇三十九年冬十月の条で、皇子である五十瓊敷命が茅渟の菟砥の川上宮で剣一千口を作られて石上神宮に蔵められ、その後、命が石上神宮の御神宝を管理されたという記事です。古代皇族が神社に奉仕されるという例は極めて稀であり、当神宮が当時の朝廷から非常に重要視され

ていたことを窺わせます。その後、年老いた五十瓊敷命は御神宝の管理を妹の大神姫命に委ねられました。が、弱い女性の身で高く聳える天神庫（あめのほくら）には容易に登ることが出来ないとして、大神姫命が物部十千根大連に任せて譲られ、その結果物部氏が当神宮を司るようになったと伝えていきます。それ故、武門の棟梁である物部氏が当神宮を奉斎し、物部氏の総氏神として古代史上特異な地位を占めるようになったと考えられます。これは物部氏伝来の鎮魂（たまふり）からくる御神威と、莫大な量の御神宝の存在に因るもので、特に大和朝廷が征服した古代豪族の首長たちの権威を象徴する御神宝が神庫に数多く納められていたためであろうと思います。だからこそ、石上は「神社」ではなく「神宮」の称号が与えられたのです。

七支刀

この御神宝の中で、特に有名なのが「七支刀」です。明治六（一八七三）年五月に当神宮に大宮司として赴任した菅政友（かんまさとも）が最初に銘文を発見し釈読しました。刀身の左右に交互に三本ずつ枝の刀の出た特異な形をした茶色く錆びた刀剣です。中学校・高等学校時代に日本史の教科書や副読本で見かけられたことがあると思います。東アジア

の古代史、特に四世紀後半における中国・朝鮮・日本の関係が論じられる場合に誰もが注目する貴重な刀剣です。表裏面の刀に沿う縁と枝刀の中央に金線が施され、表面に三五字、裏面に二七字の計六二字の銘文が金象嵌の技法で記されています。象嵌の一部が剥落し、銘文の解説、解釈をめぐって現在まで様々な研究論文が発表されてきました。現在のところ朝鮮・百済で西暦三六九年に製作されたと考えられています。『日本書紀』神功皇后五二年秋九月の条に、百済王の使者が七枝刀一口、七子鏡一面他種々の宝物を献上したと記されており、この七枝刀が七支刀に相当し、神功皇后五二年を換算すると西暦三七二年になります。今から一六三〇年余り経過しています。何時頃当神宮に収蔵されたかは不明ですが、多分大和政権が安定確立した五〜六世紀頃には収蔵されたのではないかと考えられます。その後、神宮では七支刀を「六叉鉾（ろくさのほこ）」と呼び、神庫に大切に保管されてきました。この刀剣を七支刀と最初に呼び習わしたのは、銘文を発見した菅政友で、表面の銘文に因ります。

神宮から神社へ

次に、『日本書紀』天武天皇三（六七四）年八月三日の条に、忍壁皇子が当神宮に遣わ

されて神庫に収蔵する各氏族の御神宝を油で磨き、それぞれの子孫に返還したと記されています。この時点で当神宮の特異な政治的使命は終わったとみていいのではないのでしょうか。それ以後、正史の上でも石上は「神宮」から「神社」へと変わっていきます。また、七支刀だけは返還すべき国が滅亡していたため、そのまま当神宮の神庫に残ったのではないかと思っています。

時代は降って、『日本後紀』桓武天皇延暦二三（八〇四）年二月五日の条に、天皇がこの石上神宮が他の社と異なるのはどういう訳かとお尋ねになり、それは歴代の天皇の思召しにより御神宝類が次々と神宮に納められたことにより、膨大な武器類が収蔵されているということによると記されています。しかし、天皇が当神宮のことをご存知でないという当時の現実もよく表わしています。それだけ当神宮の重要性が薄れていたことの証でもあります。更に、この記事は造石上神宮使石川朝臣吉備人等を派遣して、当神宮の武器類を山城国葛野郡に遷したところ、天皇が病氣になられ、それが石上大神の崇りと判って翌二四年に返還されたという前後の事情も詳しく記されています。そのために要する人員が十五万七千余人と報告されており、神社の社殿や広大な神庫の造営の労力も計算されると考えられますが、御神宝としての武器類の膨大さをこれによってもうかがうことがで

きます。また、延長五（九二七）年に完成した『延喜式』卷三・臨時祭の規定には、石上社の門は普段閉められているが、祭りの時には開き、正殿並びに伴・佐伯の二殿の鍵も門の鍵と共に官庫に納められていて、容易に開けることができないと記されています。この伴・佐伯の二殿が御神宝を納めている神庫ではないかとも考えられています。

禁足地

このことと関連して少しふれておきたいのですが、当神宮は古来より本殿がなく、拝殿後方に剣先状の石の瑞垣で取り囲まれ、静寂とした「禁足地」と呼ばれる平地が広がっています。何人も立ち入ることが禁じられた最も神聖な霊域として畏敬されてきました。「御本地」或いは「高庭」「神籬」などと称され、神様の鎮まる所であり、この土中深くに御神体が埋められてお祀りされてきました。果たして何時頃埋められたかについては、諸説があり全くわかりませんし、私共奉仕する神職の関わり合うことではないと思います。尚、現在の三間社流造りの桧皮葺御本殿は明治四三（一九一〇）年に起工し、大正二（一九一三）年九月に完成しました。同時に拝殿の西側にありました神庫も、禁足地内の現在地に遷されました。

衰退の一途

鎌倉時代に入ると、大和の国は興福寺の莊園が増加し、更に武家の守護権力も次第に強大となり、石上神宮は衰退の一途を辿っていくことになりました。朝廷の祭祀から遠ざかり、正史上にもあらわれてこなくなり、一地域の氏神の神社として、布留川の水を生活の糧とする農村的な祭祀形態を備えるようになりました。この形態は、以後明治時代まで変わることなく一貫して続いていきます。

南北朝の争乱の後、当神宮を取り巻く氏子の人々は布留川を挟んで南と北からなる布留郷を形成します。お膝下の布留村を宮本郷と称し、各村々の代表である名主が当神宮の維持運営に積極的に参加するようになりますと共に、当神宮の鎮座地である布留山を中心にして一致団結するようになりました。文明十五（一四八三）年には、領主である興福寺の要請に従おうとしない布留郷の氏子四千人が布留山に立て籠もって争う布留郷一揆が起こり、その後も何回となく一揆を起こしています。更に、永禄十一（一五六八）年には織田信長軍勢一行の尾張勢が当神宮に乱入して、殿舎や神庫を打ち壊し、御神宝や文書などを手当たりしだいに取り散らかしたため、多くのものが散逸しましたが、その後若干の神宝類は返

却されました。江戸時代にも神庫は数回の盗難にあり、今日まで伝来した御神宝は随分少なくなっています。

但し、七支刀は御神体である御神剣が出御する祭典に際し、御神体は禁足地の土中に埋斎されていたために御神剣の代りとして出御していました。それ故、御神体同様の嚴重な取り扱いを受けて神庫に保管され現在にまで及んでいます。

こうした状況の中で、特にお話しておきたい一つの事件があります。それは、永禄六（一五六三）年八月、興福寺が自分の氏神である春日社の造替用の材木に布留山の神木を使うと要請してきた折、これに反対して訴状を提出して神木の伐採を毅然とした態度で拒否しました。その様子を先方が書き記した春日社文書に

氏人大明神ヲ御主トアカメ奉ル、申セハ却而事新候、武家主従ハ義理ニモ候カ、大明神ヲ頼タテマツル事ハ現世後世共ニ一身をナケウツ事ニ候 云々

と記されています。武家の主従関係を義理づくしと侮り、氏子の氏神に対する関係こそ命がけの永遠のものであるとしています。祖先以来培われてきた物部氏一族の目に見えない命のつながりを感じさせる出来事ではないでしょうか。私共神職の奉仕姿勢も常にこうありたいものです。

神庫

神庫も、時代と共にその規模が次第に小さくなり、現神庫は江戸末期の嘉永四（一八五二）年の再建で、瓦葺で建坪約三坪の本当に小さな建物です。江戸初期の延宝五（一六七七）年当時の各社殿の規模形式を記した記録には、五間掛ける五間半の瓦葺神庫と記されており、その変遷の一端を窺い知ることができます。現存する棟札類によれば、神庫も拝殿と同じように神の宿る所と考えられ、この建物の造営や修理の際には必ず遷座祭が行われました。現在も毎年大晦日に大祓式に先立ち、御神宝類の無事安泰を神庫の神様に感謝する神庫祭を斎行しています。

明治以後

明治になって、神祇の国家管理が行われるのに伴って、当神宮は明治四（一八七一）年に官幣大社になります。また、同十六（一八八三）年には神宮号を復称することが許されました。正確を期するために言っておきますが奈良時代以降この時点まで名称は正確には「石上神社」でした。そして、境内にあった仏堂等を撤去するなどして仏教色は一掃され、

今日の社頭の有様となります。

また、最も神聖な靈域として畏敬されてきました禁足地は、最初にお話しました初代の
大宮司菅政友により明治七（一八七四）年八月二〇日より二二日迄の三日間に亘り発掘さ
れ、御神体と共に勾玉・管玉・金製品等（後に、禁足地出土品として一括重要文化財）が
出土しました。この行為は菅政友が学者であり、官僚であったからこそなしたことであ
り、私達のような宗教者には思いも及ばないことです。だから、御神体同様の扱いを受け
て神庫に厳重に保管されていた七支刀の銘文も発見されたのです。

新たに、長年の懸案であった御神宝類の安全な保管について、昭和五五（一九八〇）年、
禁足地の西側外奥に鉄筋コンクリート造銅板葺の宝物収蔵庫が先代宮司の手により完成し
ました。もちろん防災・耐震に十分配慮した設計で、現在七支刀を始め総べての御神宝類
はここに保管され、一安心といったところです。

結び

お話してまいりましたように、当神宮は幾多の変遷を経、今日まで伝えられた御神宝類
は非常に少なくなっています。国宝七支刀や「日の御盾」と称せられる重要文化

財の鉄盾二面が伝世品としてあることは、驚くべき奇跡だと思います。やはり、それは古来より神の宿り給う神庫を畏敬し、毎年大晦日に神庫祭を行ってきた先人の心がそうしたものといえます。当神宮の御神宝は我が国の萌芽期の祖先の活躍の痕跡を今に伝えるものであり、明治以降加わった禁足地出土品と共に、後世に受け継がれていくべき貴重な文化遺産であります。後を受け継ぐ私共の使命は、今後単なる文化財としてではなく、あくまでも御神威の宿る「御神宝」として丁重に保管し、後世に伝えていくべき責務があります。そういう思いの一端をお話させていただき、今日の記念講演といたします。

どうも長時間に亘り、ご静聴ありがとうございました。

サルから学ぶこと

熊谷房重

三年前の平成十六年は、甲申年^{きのえさる}でした。その申年の年賀状に、私はこのように書きました。

新年のお喜びを申し上げます。日本人が良い方向に目覚める良い年でありますよう、祈ります。

高等なサルの社会では、人間が行うようなあいさつ行動のほとんどが存在しているそうです。挨拶を忘れた人間は、サルにも劣ると言えるようです。今年は一サル年、謙虚に神使であるサルに学ぶ年でありたいと思っております。

平成十六年 甲申年 元旦 住所 氏名

人間に一番近い高等なサルは、チンパンジーとボノボであります。ボノボは昔、ピグミーチンパンジーと言われ、チンパンジーの一種だと思われていましたが、最近、別種であることがわかりました。そのボノボやチンパンジーの社会には、人間の行うような挨拶の

ほとんどがなされているのであります。握手、抱擁、肩を叩く、おじぎをする、前にひれ伏す、キスをする、キスも額や脛に軽く唇を付けるといったしゃれたキスから、口付けのキスまでします。このように人間が行っている挨拶行動のほとんどを見せてくれます。相手の一番大切なところ、つまり性器にさわるという挨拶もありますが、これなんかは、皆さんは「何と下品な」と顔をしかめるでしょうが、しかし、未開の人間社会では最近まで珍しい挨拶ではなかったそうであります。

猿回しのサルが、親方の仕込んだあいさつをするのと異なつて、自然界のサルの群れ社会の中で挨拶がなされているのであります。人間の中にも挨拶のできない者が多くなりましたが、正にサルにも劣るのであります。

また、サルはたいそう子供を可愛がり大切に育てる動物であります。ニホンザルの赤んぼうが死ぬと、母親がその死体をいつまでも抱いて持ち運ぶ、この事が初めて観察された当初は、物珍しさもあつてテレビや新聞にも取り上げられ、母性愛が弱まっている人間社会と比べて、教訓的に扱われたものであります。アフリカ、タンガニーカ湖畔の野生チンパンジーの研究を二五年間も続けている西田利貞さんの観察によると、年とつた母親が、二歳半の息子のなきがらを三ヶ月以上も手につかんだり、首や肩にのせて運び、しまいに

はミイラ化してしまったといひます。また、息子を殺された母親チンパンジーが、すっかり元気をなくし、ぼんやりと何もせずにあぐら座っているばかりで痩せてしまった、という例もあります。

このように、子供を可愛がつて大切に育てる、死んだ子供を悼み、なげき悲しむ、これは正に親心であります。親ならば誰でもが持つてゐる自然なる心、母性愛であります。

ところが、この頃の人間世界では、子供を殺してビニール袋に入れてゴミとして捨てるなどという信じられない、心の凍るような事件が、次から次と起こつてゐるのであります。人間の自然破壊は外の世界の自然界ばかりでなく、心の奥深くに本来持つてゐる自然な気持ち、つまり、内なる自然をも破壊してゐるのであります。挨拶を失つた若者、子供を捨てる母性愛のかけらもない母親、老いたる親を養おうとしない子供、停年を迎えても地域社会に全く恩返しをしようとしなひ高齢者、など、内なる自然を破壊されてゐる人間の何と多い事か。

人間を含めたサル仲間を霊長類と言ひますが、その霊長類は、六五〇〇万年前に森林の中を生活の場として、この地球上に誕生したのであります。霊長類は、森の緑からさどの中での生活に適応しきつた動物であります。万物の霊長と言われる人間の故里は、緑あふれる森

の中なのであります。

人々が、鎮守の杜の緑の中で安心感に浸されるというのは、遠い祖先から受け継いで来た適応感覚、つまり本能によるものなのであります。鎮守の杜は人々の心の故里であるばかりでなく、人類の生まれ故郷であり、母なる森なのであります。

神様は杜を住家^{すみか}とし、杜に宿ります。神様の子供として、子孫として、私たちは森の中を生活の場として生まれて来たのであります。何百万年という時間をかけて、やがて人間は森を出て生活の場を広げて行つたのでありますが、それが、とうとう自分の故里である森林を破壊し、文明という両刃^{もうは}の剣^{つるぎ}によって、返す刃で内なる自然であります心までも、本来持つてあるべき自然なる心をも自らの手で、傷つけ、むしろ、破壊しようとしているのであります。

鎌倉時代の山王神道の書物『耀天記』の中に、「神という字は、申に示すと書くので、神は猿に姿を借りて示される」と書かれてあります。サルは、日枝神社^{ひえ}、日吉神社^{ひよし}の神様のお使いとされております。また、猿田彦神、猿女の君、庚申信仰^{こうしん}などの例もあります。

サルは私ども人間と、大自然の偉大なる力であります神様との間にあるものとして、最もふさわしい存在であります。神様のお使いとして、人間に反省をうながす存在として、

私たちはサルから学ばなければならない点がたくさんあると思うのであります。そういう謙虚な態度で、鎮守の杜を大切に守り、もつと広く、自然を大切にすることが、神様の御心になう生き方であり、惟神の道であると思います。

神様の住む鎮守の杜は、皆さんの躰からだと心の安らぐ故里なのであります。時々、故里に帰って来て、ありのまゝの人間らしさを取りもどしていただきたいと思ひます。

これで今日の私の話を終ります。ありがとうございました。

（福岡県 八幡古表神社 宮司）

神國でありたし

高尾 宗 嗣

明治天皇御製

我が國は神の末なり神まつる昔の手振り忘るなよゆめ

私が着目したいのは、平成十二年五月十五日、神道政治連盟國會議員懇談会結成三十周年記念祝賀会に於いて、当時小渕総理の後を受継がれた森総理が「『日本の國は、まさに天皇を中心としてゐる神の國であるぞ』といふことを國民の皆さんにしっかりと承知をしていただく」と述べられたことであつた。

五月十七日には、朝日、読売、毎日の各新聞社が「森総理の『神の國』発言は輕率だ」との反論社説を出し、翌日十八日にも重ねて記事を掲載してゐた。各紙共に「神の國と天皇を結びつけるのは、憲法における國民の權利を始め基本的人權の尊重の原理に反するものである」との主張であつた。

日本の神は、所謂多神教と呼ばれるものであり、善の神ばかりでなく、森羅万象に神々が存在してゐるといふことは、皆様がご承知の事である。森総理の発言が自國の歴史や伝

統文化に關して述べたことは明白なる事實である。それがどうしていけないのか。自國の傳統や文化、精神や道德に基づいた発言であり、指導者としての本筋である。そのやうな心意氣のない政治家、指導者では、國家も國民も存在し得ないのではないか。

「『日本は天皇を中心とする神の国』であるかないか」と、「森氏が首相としての資質があるかないか」とは別に論ずべきであると政治評論家達が述べてゐた。我々神職の意識では、生命を授かつたのも、日々戴く食物の数々も生きるためのすべてのものが、神々の与へ給ふたものと信じ、今日あるものと感謝し続けてゐる。

生活のすべてが合理化されたため、今日の生活形態は、昭和の前期とは比べものにならない。かつて、お米を洗ふにも、農家の人達の苦勞に申し訳がないと思ひ、一粒も無駄にならぬやうにと台所を預かる主婦達が「もったいない」と心を配る日々。畑歸りに祈る思ひで道具を納め家路に着く人々。主人を始め従業員達が揃つて夕餉の祈りを捧げる商店。生産工場であつても然りの生活があつた。

そのやうな生活が続くことによつて今日があり、「忍び難きを忍び、耐へ難きを耐へ」の御心を量り、連合軍の占領政策に従ひ、昭和二十六年獨立國の宣言を成し遂げたわが國である。

しかるに現在、我が國には未だに制空權が無いと聞こえてくるのは何故なのだろうか。自國の空を自國の法に従つて運行できないとすれば、獨立した國とはいへない現状である。今日の世界状況では日米安保条約は不可欠なものと云はれてゐる。アメリカに次ぐ世界第二位の經濟力を持ち、世界の国々に進出し、あらゆる活動を盛んに拡げている日本ですが、未だに獨立國とはとても言へない様に思へる。

昭和二十年以前には一時的に英語科目が薄くなつた時期があつた。今にして思へば、その時期こそ尚深く厳しく英語の探究を成し、欧米の思想なども知る必要があつたのではと自らの少年期を思ひ出す。

現在の日本では、政治、經濟、文化、教育各分野に亘つて欧米樣式の氾濫が目に見え、状態である。テレビニュースで映される捜査官の背中にPOLICEと大きく英文字で見え、その下に小さく警視庁と横書きされてゐる。街では店名、商品名の大方が横英文字であり、カタカナで呼ばれる品物が食物なのか雜貨なのか何者なのか、我々戰中戰後を生きてきた者にとっては判断に苦しむ状況である。

世界を相手にするには、今や英語でなくては通用しない、海外雄飛はとても覺束無いといふ考へもある。外国籍の人達の居ない國內の都市は数少ないであらう。しかし、多くの

顧客は日本人である。何故かくも多くのローマ字、英文字の看板があるのだらう。

数年前台湾を訪ねた折、胸を打たれたことを思ひ出す。道路標示も、店名もすべて自國文字で記されてゐたのだ。お國柄が成程と窺へさわやかな想ひだった。現代の日本は、アメリカの植民地に成つてゐるのでは？

日々の生活の中に、古来から培はれた心、米一粒も勿体無いと思ふ心、神様先祖様の御陰様といふ思ひ、お天道様への感謝の心を大切に、明日へ進み行く心根が今こそ必要なのではないかと思ふ。

昭和天皇御製

わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎを祈る朝々

昭和五十年宮中歌会始の御歌のお心は、日本の國は常に神々に祈りを朝々に為すことを続け、世界の平和を目指して進むことが大切だとお詠みになったと私は理解してゐる。

「日本は天皇を中心とする神の國」の森総理の發言を問題視する社説を何度読んでも、得心の出来ない私である。

（富山県 大木白山社 宮司）

旧暦（太陰太陽暦）を見直そう

中木屋 豊

今年の四月四日、孫の顔を見たいと四国の愛媛から高知に入った時のことでした。標高四百メートルほどの道の駅、「雲の上のレストラン」で昼食を食べるになりました。風がやや強く吹き、満開の桜が周りを取り囲んでいました。

やがて注文した料理が運ばれ、食事をすすめていると、窓の景色に何やら落ちてくるものがあるのに気が付きました。風に吹き飛ばされた桜が散り始めたのだらうと、最初は考えていました。違うのです、花が散るのではなく激しい雪が降ってきたのです。満開の桜の中で吹雪を見たのは、もちろん初めてのことでした。この日は東京渋谷でも雪が舞い、熊本阿蘇でも三十センチ近い積雪がありました。

暖冬だといわれ、秋田県では一月なのに積雪のない珍しい年だと、テレビは伝えていました。二月を過ぎ三月に入ってにわか雪の日が多くなったと報道されました。異常気象がなせる業でしょうか。南国鹿児島でも大きな雹が降っていました。

気象予報士は、ペルー沖の海水温で起きる、エルニーニョ現象とか、反対のラニーニャ現象とかを、最近の気象の説明に使っています。しかし、今年の夏が長く暑かったことは、地球の温暖化の影響もあるでしょうが、旧暦の暦を使った説明が、より現実的に思えるのです。それは昨年が閏月のある年回りで、しかも七月暑い月が二度あったから、長い暑い夏が続いたのです。その結果八月九月十月の旧暦は、秋の季節にあたりますが、遅くなっていました。冬の霜月十一月は、太陽暦の十二月下旬から始まり、元旦は明けて二月十八日のことでした。旧暦はおよそ一月遅れぐらいが普通なのですが、今年は太陽暦と四十八日遅れていました。全国的に秋の紅葉が、二・三週間遅れていた説明にもぴたり合うのです。ちなみに十二月十日の気温は、十月中旬から下旬の気温になると、天気予報は伝えていました。旧暦では十月二十日に当たっていましたから、まさにそのとおりでした。

さて鹿児島は、今焼酎ブームです。材料の甘藷の取り入れは、早くて九月になります。ところがお盆過ぎには、新焼酎の仕込が始まりますので、出来れば取り立ての芋を使いたい気持ちは当然です。そこで考えられたのが、早い時期に植えつければ、間に合うのではないかということでした。残念ながら大きな芋は、入っていませんでした。ただでさえ季節が二、三週間遅くなっているのに、大きく育つはずがありません。根の入っていない芋で

作られた焼酎が、評判を落とさないか心配です。

三年前の平成十六年は、閏二月を持つ年でした。ご承知のとおり二月は春立つ月です。しかし前の二月で春になると、後の二月の意味がありません。春の訪れが足踏みして待っていたので、三月十二日だというのに、南国鹿児島でも積雪がありました。こうしてみると閏月のあるなしは、気温・気候に大きな影響が、現れることが予想されます。そこで閏月があることで、作物の良不良に影響を与えるのではないかと、飢饉の歴史を調べてみようと考えました。

慶長以来明治に至るまでの約二百七十年間に、凶荒といわれたのが百三十回、大飢饉といわれたのが二十一回を数えます。すべてではありませんが、この間に百回の閏月がありました。閏月の影響を受けたと考えるのが、自然な気がします。

江戸の三大飢饉のひとつ享保の飢饉は、十七年（一七三二）におきましたが、閏五月がある年でした。「五月雨を集めてはやし最上川」と、歌われているように、梅雨の長雨が続いたことが想像出来ます。五、六月の長雨、八月のうんかの大発生が記録され、百万人近い犠牲者を出しています。

次の天明の飢饉といわれるのは、天明二年（一七八二）から天明六年までをいいます。

このときは、天明三年の浅間山の大爆発もあり、たくさん犠牲者を出しました。この間、天明元年が、閏五月のある年で、四年が閏一月、六年閏十月がある年でした。

最後の三大飢饉は、天保三年（一八三二）の凶作、四年の大凶作、さらに九年の凶作までの七年間続きました。三年は閏十一月、六年は閏七月、九年が閏四月のある年回りでした。

江戸時代以降明治になってももちろん、飢饉凶作はありました。明治維新は、華々しい戦いの連続のように語られますが、幕府軍が根拠地としていた東国は、凶作続きで兵糧に窮して、大した戦意がなかったと指摘する歴史家もいます。ちなみに明治元年（一八六八）は閏四月がありました。

少し歴史を近年に移して見ると、平成五年（一九九三）は、鹿児島県で八月六日大水害が起きた年です。いつ梅雨明けしたのか分からない年でありました。全国の稲の作況指数は七四でした。青森二八・岩手三十・宮城三七・秋田八三・山形七九でした。それらの県の一部六つの地区で、一桁の作況指数にとどまる、壊滅的打撃を受けた所もありました。

この結果細川内閣は、二百万トンの外国産米の緊急輸入を行いました。この年は閏三月があり、梅雨と夏の雨・秋雨が、区別つかない年になりました。

そのほか、明治百年にあたる昭和四十三年は、昨年と同じ七月を二回する年でした。明けて四十四年は、三月十二日本州太平洋沿岸は大雪に見舞われました。何かしら名残雪の降った今年に似ています。

さて、暦はどのような位置付けがあるのでしょうか。神宮大麻暦頒布式の祝詞に、「暦を受けては歳を伺い時を知りつつ時を尊び時を惜しみて……」、そうです、すべての労働の道しるべなのです。旧暦で潮の満ち干きが決まり、いつ種をまき収穫のときを、すべての人に教える役割があるのです。

歴代天皇様を始め、暦博士・陰陽の司の人々は、すべての人が幸福になるため、真剣に祈り暦の法則を知り、いや神に教えていただいて今に伝えているのだと思います。

言うまでもなく暦は、「か読み」つまり日を読むが語源といわれます。日本書紀に、月夜見尊が保食神を殺すとそこに、頂に牛馬ひたいのうえに粟、眉の上に蚕なり、目に稗なり、腹の中に稲なり、陰に麦および大豆・小豆が生まれたと、書いてあります。その上で天照大神は月夜見尊を、「これ悪しき神なり。会い見るべからず」と、一日一夜を隔てて住まれるようになったと記されています。蒼人草が生きる糧や種を、使わされた月夜見尊も、収穫に欠くべきもなき存在だと、記されているのではないのでしょうか。お怒りになら

ないように月を読み、お月見に様々お供えして、札を尽くせとお諭しになったくだりだとも、受け取ることが出来ます。

二宮尊徳は、夏にナスを食べ季節が秋になっているのを知り、芋や大根の植え付けを奨励し、小田原城下の人々を飢饉から救いました。万人の幸福を願う人には、改めて神慮の働きがあるのだと、感じざるを得ません。常に、自然と共に生かされている存在なのだと、旧暦に教えられたのです。今も沖縄県は旧暦を大切にしています。東アジアに受け継がれる太陽太陰暦、旧暦の持つ季節感を大事に受け継ぎ、積極的に活用したいものです。

稽古照今という言葉があります。古い世の中を見る、歴史を見るといふ、古・世・見が、これから来るであろう世の中、来・世・見になると、痛感していることをお伝えして、今日の夏越祭を終了いたします。

(鹿児島県 稲荷神社 宮司)

プロとして

村田 和弘

「プロ」という言葉は言い変えれば専門家とも言えるのでしょうか。

専門家は素人と違い、幅広く全体を知り得た立場で行動できる人といえるかもしれません。例えば野球で言えばプロのピッチャーは、バッターを打ち取るために、最終のボールを想定した上で、そこまでにいたる配球を組み立ます。やみくもに、最初から全力で目いっぱいボールを投げ続けるピッチャーはいないのであります。そうした投げ方をすれば、最後まで体力が続く訳がないからです。

ゴルフの世界でも、アマチュアは、ティーショットで力いっぱいクラブを振り、球を遠くに飛ばそうとしがちですが、プロはパッティングのやさしい場所にのせるには何処へ第一打の球を落とせばよいかを判断して打つそうです。

私事で恐縮なのですが、私も全国の神職の中でも珍しい資格を持っています。大型二種という免許証です。

今年に入つてその資格を有効に使うため宮司の知人の会社で、時々、アルバイトに励んでいます。朝五時過ぎ出社月曜から金曜日の朝、小・中・高校生を団地から公共の駅へ、或は学校のスクールバスの送迎、時には葬儀のお供のバスの運転などと多方面での貸し切りバスの運行です。

バスに乗務、社会勉強の一つにと勤める中で色々気付く点があります。三月初めのことですが、ある女子中学生を高校受験の開場の下見にと高校へ送迎した時の事です。生徒がバスの窓を開けて手や頭を外に出して遊んでいたりと、最後には窓から外を歩いている他の男子中学生に声を掛けて大騒ぎをするのです。担任の先生も一緒におられるのですが、注意もせず只座っているだけなのです。

私もプロの運転手の立場としてケガがあつてはならないため当然注意はするのですが、一回や二回の注意では聞く中学生ではありません。三回目の注意で広島弁を使い大声で注意しようやく静かになる有様です。今の教育現場はこんなものかと、胸が痛みます。

しかし、今の教育現場の有様は、教師や行政、又、時代の流れと責任のがれしてはは解決できるのでしょうか。

大人である私達、他人ごととして過す姿、正に自己責任の姿勢が今問題なのではないで

しょうか。今の小・中学校の七割を越える教師が「子どもの気持ちが変わらない」「自分の教育の効果に疑問・無力感を感じる」とアンケートにもあるそうです。

学校や職場社会などで「競争」「協力」という価値観が取り上げられます。この「競争」と「協力」を同時に両立させる事が人間にとって大変難しい事だと思っています。

お互いが相手を助けることによって、自分も助けられるということを学んでいく社会。共存共栄の姿勢それでいて、いつも友達感覚で肩をたたき合う仲よしグループのような社会。その両面を備えてこそ生きる力、生きる喜びが生まれてくるのではないのでしょうか。

昔から「親の背中を見て、子は育つ」とよく言われてきました。しかし、今の時代は大半の親が「勤め人」となり子どもは「カギっ子」親子が接する時間が少なく親は見本となれず、昔と違い親は子ども達に背を見せず生活しているのです。

私達はもう昔にもどる事が出来ません。そして今現在を拒否して生きる事も出来ません。一歩ずつ前に向いて歩いて行くしかないのです。奉仕の合い間に勤めるプロのドライバーの立場で気掛りな姿を見、教え導きたいと思う一人であります。

(広島県 長束神社 禰宜)

日本の皆様 靖国神社を守って下さい

(ブラジルの中高生からの手紙)

寺 本 正 徳

日本の皆様、靖国神社を守って下さい

日本の皆様、靖国神社を壊さないで下さい

ブラジルサンパウロ市の松伯学園、大志万学園の中高生からの手紙に出会ったとき、丁度日本の裏側にある人達でさえ、靖国神社を守って下さいと雄叫びをあげているのに、肝心な日本では、他国の大声に媚びるかの如き動きをする人達があるばかりか、靖国神社を壊そうとしている人達がいること、残念の極みです。

ブラジルの中高生からの手紙をまとめられた真倫子・川村先生は、ブラジルサンパウロ市に於いて松伯学園・大志万学園を経営し、子供達に教育に当っておられる方です。

この手紙をまとめられる動機になったのは、二〇〇二年六月、地元サンパウロ新聞、ニッケイ新聞が、日本では、靖国神社に代る、無宗教の追悼施設が検討されていると報じ

たことです。

先生は、新聞記事の重大さに驚き、早速に教室で取りあげられたのです。静かに聞き入っていた子達は一斉に「そんな発想は納得できない」と声を荒げて抗議をします。その筈です。この子供達は訪日使節団として何度も日本に来ており、靖国神社を始め遊就館、広島、長崎、江田島等々真摯に学習をしているのです。

彼等が口を揃えて言うには、「過去に日本が戦争をしたことはよくない。だが靖国神社を壊すと、そこに休んでいる魂はどうなるんだ。靖国神社を絶対守ろう」。この雄叫びがブラジルからの中高生の手紙になったのです。その経緯を真倫子・川村先生は以下のように説明されています。

訪日するたびに日本は変った。過去の苦い体験を語る人が余りにも少なすぎる。若者が靖国神社の英霊に無関心すぎる。他国の大声に媚びる日本人が多すぎる。日本は六十年にして世にも不思議な国になった。ブラジルは移民国家であるけれど、国民は国家に対する誇りと、忠誠心を忘れてはいない。

子供達と討論を重ねて行くうちに「神国日本」に対する多くの疑問が湧いてきた。

子供達はためらいもなく「日本の皆様、靖国神社を守って下さい。靖国神社を壊さな

いで下さい」と日本の皆様に手紙を書こうという事で意見が一致した。

子供達は、靖国神社や遊就館に行ったとき、自分達と同じ年頃の特攻隊員の写真に出会った。なんだか微笑んでいるように見えた。横の花嫁人形さんは淋しそうだった。見ている内に、みんな涙が止まらなかった。

次ぎに手紙の内容を記します。

自分達は訪日するたびに日本はいい国だと思った。靖国神社では感動した。日本人は自信をもって下さい。他国の言動に媚びないで下さい。自分達は討論を重ねて行くうちに、靖国神社の大切さが一番に分っていないのは、日本人、あなた達です。ということに気付きました。大切なものは自分達の手で守って下さい。世界中のどこに、国を守るために命を捧げて下さった英霊を粗末にする国がありますか。

私達は、靖国神社を壊そうとしている人達に質問をします。

一、国が壊されそうになったとき、家族が危険になったとき、命をかけて守れますか。

一、魂になった靖国神社の英霊に感謝し不戦の誓いを立てることができますか。

一、桜の花の咲く頃、靖国神社で会おうと誓って散って行った英霊に「アリガトウ」と

お礼の言葉が出せますか。

いま、自分達に命をかけて国を守れと命令がきたら考えます。．．．だが自分達は誇りある祖国ブラジルのために戦います。

自分達は、慣れない日本語で、日本の皆様に一生懸命に手紙を書きました。もう一度、大声でいいます。

日本の皆様、靖国神社を守って下さい。

日本の皆様、靖国神社を壊さないで下さい。

靖国神社で休んでいる英霊を静かに休ませてあげて下さい。

これがブラジル松伯学園・大志万学園の中高生の雄叫びです。

歌人、岡野弘彦先生の同僚の多くも、戦場に消えられたそうです。先生は『バクダッド燃ゆ』という歌集の中で、

○桜の花散るをあわれと果てゆきて少年の友おほよそは亡し

○帰りこぬ若き無念をたはやすく忘れて何の生くる甲斐ある

○日本人はもつと怒れと若者に説きてむなしく老いに至りぬ

先生は講演のたびごとに、「昭和の戦争はなんだったんだ。志し半ばにして永遠の旅路に立った多くの友を思うとき、涙の流れを止めることが出来ない。戦争をしてはいけな

い。戦争ほど馬鹿げた行為はない」と熱く話されました。

ブラジルの中高生の手紙を目にした時、戦勝国は東京裁判に於いて、靖国神社を焼き払おうとした。その時、ブルーノビユテル神父は「靖国神社を焼き払ってはいけない。もしそのような行為を戦勝国がした場合、歴史に残る不名誉な汚点として残る。国のために命を捧げた英霊は、靖国神社に静かに休んでいただくのが、自然の行為です」と諫められた。日本人が、日本人の手で不名誉なレッテルを貼らないように、靖国神社を守って行こう。ご静聴ありがとうございました。

(大阪府 稻荷神社 禰宜)

やっぱり日本酒が一番

畠田明彦

今日はお酒の話をしてみたいと思います。

皆さんご存知の通り、松尾大社はお酒の神様です。正確にはお酒だけではなく、醤油や味噌などの醸造品全ての守護神であります。

「神代の昔、八百万の神々が松尾山に集われ、神議りをされた際、松尾大神が山田（嵐山）の米を蒸し、山裾より湧き出る清らかな水を汲んで、一夜にして酒を醸され、大杉谷の杉で作った器で神々に振る舞われ、大いに喜ばれた」という故事が、醸造祖神の由来とされています。

お酒の神様は他にも、ご当地の大神神社、京都の梅宮大社などがありますが、海外にも酒の神があります。参考までに少し紹介させていただきます。

ギリシャ神話のオリンポスの十二神の中にディオニュソスという酒の神がいらつしやいます。英語名バックスと言えばお聞きになられた事があると思います。全知全能の神ゼウ

スト、浮気相手の人間セレメとの間に出来た子で、この神はゼウスの正妻ヘラの嫉妬による呪いにより、狂乱・放浪と苦渋の人生を送ります。やがて放浪の旅を終えたディオニュソスは、葡萄栽培と葡萄酒造りの技術をあみ出し各地に広めました。そしてゼウスがディオニュソスをオリンポスの十二神に加えようとしてヘラと対立。しかし竈の女神である優しいヘステアが「争いはもうたくさん」と十二神の座をディオニュソスに譲ったのであります。

さて次に、このディオニュソスが世に広めた葡萄酒、ワインについてお話をさせて頂きます。

お酒は製造法により醸造酒、蒸留酒、混成酒の三つに大別されます。その中で醸造酒の代表たるものが、日本酒とワインです。

ワインは製造方法により、我々がよく口にする通常のスティルワイン、炭酸ガスを含んだスパークリングワイン、ブランデーなどを添加し発酵を止めたフォートイファイドワイン、薬味成分で香味付けしたフレイバードワインの四つに分類されます。そしてスティルワインには醸造過程で葡萄を潰して出来た果汁を果皮や種子と一緒に発酵させた赤ワイン（ロゼも同じ過程）、潰した葡萄を更に圧搾機にかけ、出来たプレスジュースのみを発酵

させた白ワインがあります。

「ワインは美味しい葡萄から」とよく言われますが、まさにその通りです。葡萄の出来の良し悪しがその味を左右するのです。言い換えれば、葡萄が良ければ美味しいワインが造れるのです。

ここで本題の日本酒です。同じ醸造酒であるワインと比較して、日本酒は原料の米だけが良くても決して良いお酒にはなりません。ワインは原料の葡萄自体に糖分が含まれているので、酵母の働きにより発酵させるだけの単発酵酒ですが、日本酒の場合、米を糖化させる工程が必要なのです。発酵タンクの中で米のデンプンは麴の酵素により糖に、糖は酵母によりアルコールに変えられます。この二つの工程を同時に進行させるのが平行復発酵と呼ばれる醸造法で、これが日本酒独特の香りと味わいを生み出すのです。精米・洗米・蒸し米・酒母（もと）・麴づくり・平行復発酵・しほり・濾過・火入れ・貯蔵熟成と、その手間暇は葡萄を破碎し発酵させるだけのワインと比較になりません。更にその種類も吟醸酒・純米酒・本醸造酒・荒走り・生酒・原酒・濁り酒・酒粕等々豊富で、冷やしても、常温でも、燗をしても頂けます。又その香味は強からず、弱からず、甘すぎず、辛すぎず、素朴で奥深いものがあります。香味もさることながら、醸造酒の中で世界最高と言われる、

二〇%前後までアルコール分を高める事が出来る技術は、日本特有のものであります。アルコール度が比較的高い、世界三大貴腐ワイン、フランスのシャトー・ディケムでさえこのレベルには達していないのです。

次にお酒と神様の関わりについて、神道とキリスト教を比較してみたいと思います。

まずキリスト教の場合、ミサの次第の中に「感謝の典礼」というものがあります。「ホスチア」と呼ばれる小麦粉を薄く焼いた物と葡萄酒が祭壇に供えられ、それが「聖体変化」によりイエスの体と血に変わり、「聖体拝領」という儀式で、そのイエスの「肉」と「血」を頂くのです。お酒は神への御供ではなく、神の「血」であり、その「血」を頂くことで神と人が一体となるということです。これに比して神道の場合、「斎庭の稲穂の神勅」により神様より賜わった「米」を主食とし、その主食である米でお酒を造り、米が収穫された時には新嘗祭で感謝を捧げる。又お酒の場合、松尾大社では醸造祈願祭が十一月上旬の日に、醸造感謝祭が四月の中の酉の日に斎行されます。

ワインを醸造するに当たって、日本のように祭典・神事があると、私は聞いたことがあります。この辺が日本人と外国人のお酒に対する思い入れの違いではないでしょうか。

日本酒は酵母・黴(麹)・乳酸菌という目に見えぬ三つの微生物の「命」が織りなす

「業」と、良い米、良い水、そして優れた感性を要する杜氏の技術により誕生するのです。そこには、「命」を扱うが故に、神に祈り神に感謝する日本人の心が窺われます。

今日日本食が世界中で注目を浴びています。ヘルシーでもあるでしょうが、それは素材を活かす事に重点を置いた、繊細な味付けにあると思います。日本食と日本酒。この素晴らしい相性は、世界に誇れる日本文化の最たるものと言っても過言ではないでしょう。

世の中にはお酒を毛嫌いする人がいます。しかしこれは「お酒」に対してではなく、酒癖が悪い人に対して出てくる感情だと思います。もし皆さんの周りに酒癖の悪い人がいたら、この松尾大社の最近装いを新たにした「服酒守」を是非お勧め下さい。良く効きます。

(京都府 松尾大社 権禰宜)

美の神様

竹 中 仁 志

八坂神社の御本殿の回りには、たくさんのお社があります。明治元年前までは、祇園社と称した神仏習合のお寺でありました。みな様がよくご存知なのは祇園祭だと思いますが、今回はその話ではなく御本殿の周りにある美御前社というお社、特に美の神様の信仰についてお話しさせていただきたいと思います。

そもそもきっかけは、他の神社ではなかなかない珍しいお社で、しかも美の神様で女性には大変ありがたく、御利益のある神様だからです。

御祭神は、多紀理比売命、多岐都比売命、市杵島比売命の三柱になります。容姿端麗の神様等であり、美容の神様としての信仰を集めます。祇園という土地柄、舞妓さんのお参りが多く、若い女性のお参りも多いお社です。

特に人気急上昇いたしましたのは、平成十六年九月頃です。このお社の右手に美容水という非常にありがたい御神水を開設したからです。この水は、肌につけるだけで美肌にな

るという女性には化粧水よりもありがたいもので、美しくなるし御利益もいただける一石二鳥の水なのです。

ここで、みな様はそんなことをしていいのかと不思議に思われるかもしれませんが。勝手に水を引いて御神水なんて、と。いいのです。これには、ちゃんとした理由があるのです。実は、八坂神社の御本殿の下には昔から大きな池があります。この池には、古くから青龍様が住んでおられる信仰が伝わっております。そもそも京の都は、四支神が守っております聖地とされており、当社の位置する東は、青龍が守護する地とされております。その青龍様の御神水ですので何ら問題はありません。

しかし、問題が一つあります。有名になってよく広報に取り上げられます。雑誌には、美しくなる水とか、気になる所につけるだけで綺麗になるとか。これらはいいいのです。ですが、その成分はと聞かれると困ります。科学的に攻められても答えようがありません。これは、「御神水」であり信じるものなのです。

このお社に由来して、授与所には美守というありがたい御守もあります。この御守は、身につけているだけで美しくなれるといった女性にはかかせない御守です。授与所にいると、「これ身につけているだけでキレイになれるんだって」とか「これ持っていたら一生大

丈夫」とか「これ以上美しくなっても困るし」とか様々な声が聞こえます。私は、これらを聞かれる度にこう言います。「はい、そうです。ぜひお受け下さい」なんて言いません。「誤解されておりませんか。これは、内面から女性らしく美しくなる御守です」と。「なるほど、そうですよね」と納得されます。それはそうでしょう。だって、現にそういう御守があったとしたら誰でも受けますし、化粧品なんていらないのですから。

また、このお社は、婦人会のお参りの際には大変力を発揮致します。なぜかという、主は祇園祭の話をしますが、最後に美御前社の話をします。そこで、「この神様はお参りをしていただくだけで美しくなれるという御利益をいただけます。しかしながら、皆様はお参りをしていただく必要のない方ばかりですが」と。これを言えば、婦人会の方々は上機嫌なわけです。

女性には、誰しもずっと美しくありたいという願望を持っていると思います。しかし、完璧な人なんていません。中国の四大美人であります西施は大根足であったそうですし、王昭君はなで肩で、今でいう着物にパットを入れていたそうです。貂蟬は、耳が大きいから重い耳飾をし、楊貴妃は、独特の体臭があり皇帝にお目見えする時は温泉に入っていたとかいわれます。

ともあれ、そうありたい、そうなりたいという願いそのものが信仰の形だと思っています。「神様どうか願いを叶えて下さい」「はい、わかりました」と返答があれば、順調に事は進みますがそうはいきません。そもそも今の人達は、すぐに結果を求め、自分の主たる願いが叶わなければ、「あの神社はお参りしても効果が無い」とか容易な考えを持っていると思います。先に御守の話をしましたが、よくそういう例が往々にしてあります。「これ効くの」とか「持ってて意味あるんですか」とか。持っているから大丈夫、それもいいでしょう。ですが、一つ発想を変えて、御守には神様がいらっしゃるわけですから御守をお守りするという思考も欲しいものです。お社も当然そうで、適当に思っていれば、何も願いなんて叶いません。

先程から美の神様について話を進めてまいりましたが、私が言いたいののは、願いを叶えてもらいたい気持ちが強いのであれば、誠心誠意お参りをしてもらいたいと思います。美しくなりたいのであれば、その気持ちを心から神様にお願ひしてもらいたいと思います。それが信仰の一番大切なことであり、美の神様の御神徳もより増すわけであります。

美の神様と題してのお話、皆様ご清聴ありがとうございました。

お参りする時の心構え

西 臺 卓 哉

本日はようこそお参りを下さいました。皆様の参拝に先立ち、少し参拝する時の心構えについてお話ししたいと思います。

さて、皆様が神社へ来られる時、どのような心構えで参拝にお越しになるでしょうか。

昔から「苦しい時の神頼み」と申しますので、皆様それぞれに何らかのお願い事があつて、お参りに来られると思います。それは、間違っている訳では決してございません。神社はそういう皆様の心の支えとして存在しなければならないと思っておりますし、また、皆様が少しでも清々しくお参りできるよう毎日ご奉仕をしております。しかしながら、神社でのご奉仕をしておりますと、様々な方を目にします。観光で来られてお参りより何より御朱印をと走つてこられる方、お守りだけを受けてお参りせずに帰られる方、神主として何か違うのではないかと、疑問に思ってしまう事も残念ながら多々あります。私はそんな時、大学の剣道部時代の道場訓であつた「剣道は人間形成の道である」という教えを思い出し

ます。師範の先生は「剣道はスポーツであるから必ず勝敗はつきものである。しかし我々は清く正しい人間を作るため、竹刀を握り人間を高める為鍛練しなくてはならない」と我々を指導しておられました。日本古来の武道や文化には柔道や剣道また茶道という様に必ず「道」という単語がつきますが、これらにも全て先程の先生の教えが当てはまると思えます。よく考えると我々が携わっている神道にもこの「道」という単語がつくわけです。これは偶然なのでしょうか。私は必然であると思います。先程の剣道の教えをそのまま神道に置き換えると「神道は人間形成の道である」となりますが、これこそ神道の本質なのでは無いでしょうか。

よく、神道には、仏教やキリスト教という經典やバイブルが無いので難しいといった事を耳にしますが、お参りする事で自分自身の人間形成の鍛練になっているとお考えになられては如何ですか。そうお考えになれば、全てが納得できるのではないのでしょうか。經典が無いからこそ、自分自身を高める鍛練の場として神社を捉えられては如何でしょうか。今日はお参りに行くと決めて何かお願い事があつて参拝に来られる時は最初から目的がありますので、それを否定する事はできませんが、看板が出ていたからちよつと寄つてみたとか、旅行の行程に入っていたから参拝に来たとか、何となく参拝に来られた時にこそ、

今のような心構えでお参りをされては如何でしょうか。そうすれば、ちょっとした寄り道が素晴らしい寄り道に変わるのではないでしょうか。また、何か目的があつてお参りに来られた時も少し心の片隅に今の心構えを置いてお参りをしてみて下さい。今まで以上に清々しくまた今までとは少し違つた境地になるのではないのでしょうか。

私、まだまだ六年神主をしただけの若輩者でございます。そんな私が神道の本質について語るなど、あつかましく、また神様に怒られそうなものですが、一つの提案としてお聞きいただければと思います、今日はこのお話をさせていただきました。

この話を職場でしました所、そして参拝する時は、いつも袴をつけて意気込んで参らなあかなと言われました。しかしながら、いくら外見は正装でも、心の中が定まっていなければ何にもならないと思います。神主としてはやはり、神様の前では失礼の無い服装でお参りをしていただきたいと思いますが、たとえジーパンにポロシャツでもしっかりした心構えでお参りしていただければ構わないと思います。よく、神社に来ると身が引き締まつた気がするといった事を耳にします。皆様は何も思わずとも、神社へ来られていつもとは少し違う気持ちになられている訳です。それは、即ち日本人として心に神道が染みついているからだと思います。お参りをする事で、自然と清々しい気持ちになられ、来る前

よりも違った気持ちで自然と鍛錬を積み重ねられる訳です。何も思わず自然となっていることを意識してお参りされてみては如何でしょう。我々神主は皆様のその鍛錬の場を少しでも綺麗に掃除をして、清々しい場所にしてお待ちしております。皆様もお参りをするだけの場所ではなく、自分を鍛錬する場所として神社を活用いただければと思います。

最後に、「道」は自ら足を動かさなければ前にも後ろにも行けません。神道という神の道は決して神様が歩く道で無く、皆様が其々の思いを胸に抱いて歩く道だと思います。皆様が何を思われて歩かれるか、それはご自由ですが、皆様の心構えを神様は見ておられます。その心構えの一つとして今日の私の取り留めのない話をご参考にいただければ幸いです。ご清聴誠にありがとうございます。

(滋賀県 多賀大社 権禰宜)

禊

前川 成文

今回は、私が体験してきた禊のことについてお話したいと思います。

皆様も数々の禊を行っているとは思いますが、一年の中で最も寒いと言われる「大寒」に禊をなさったことは有りますでしょうか。

宮城県神道青年協議会では毎年「大寒」に、神職たらしめる精神の鍛錬、そして講義による知識の向上を図る目的で、教養研修会・禊研修会が行われており、数える事、今年で三十一回目を迎えました。

教養研修会では、その年毎に自分たちで研修内容を決めて、県内の宮司さまを講師として迎えて行っております。今迄にですと、祭式研修会。それも大祭式といった場合ではなく、一般的な一人奉仕での地鎮祭の祭式。また、神社会計についての基礎知識を身につけるための研修会といった青年神職に大切な研修会を行ってきました。

今年は、「大祓詞の解釈」と題して、私達が日々奏上している大祓詞について、その成

立過程や語彙の解釈を詳しく解説頂き、改めて深く知る事が出来ました。

みそぎ行事は二十日の早朝、塩竈から車で二十分程の七ヶ浜町の菖蒲田浜海岸で行われます。朝、五時に会場へと各々車で移動をして祭場の設営にあたります。冬場の五時は、真夜中と何ら変わり有りません。その真つ暗な状態の中で懐中電灯を手にしながらの作業となります。寒さで手がかじかんで思うように動けない事もあります。

浜辺の中央に御幣を立て、忌竹を差し立て注連縄を張り紙垂を付けて、全て準備は整えて後は時間を待つだけです。

海に入るタイミングはといいますと、ちょうど日の出に合わせた時間帯となります。

いよいよ、辺りがうっすらと明るくなつて来たところで、研修を受けている神道青年協議会の会員をはじめ県内の神職や神社関係者合わせて約五十名位が浜辺で、鳥船行事を行った後に日の出と共に皆海に入ります。大寒とはいえ暖かい朝で、波もなく穏やかな海ではありましたが、真冬の海は身を切るように冷たく、精神を集中して大祓詞を奏上して、みそぎ行事を行います。その年のにもよつて違うのですが、日の出のタイミングが合った時には、水平線から太陽が昇ってくる瞬間は、言葉では表せないぐらい素晴らしい光景でありますし、また、太陽の暖かさや有り難みが感じられる瞬間でもあります。

禊を終えた後は、地元の菖蒲田浜海岸の人々のご厚意で焚き火を準備して頂き、味噌汁と暖かい缶コーヒーが振る舞われ、参加者はその温かさに感謝しながら、かじかんだ手はもちろんのこと、冷え切った体の中を暖めます。

また、禊行事には地元のテレビ局や新聞社といったマスコミ関係者や、写真愛好家などが大勢来ており、神道教化活動の一環として、一般に向けて神道の情報を発信することが出来ます。

この大寒禊研修会が終わって、ようやく一年の始まり新たな歳を迎えたという気持ちになります。

(宮城県 志波彦神社 鹽竈神社 権禰宜)

新宅祭奉仕のあとに

佐々木 貞 一

本日は○○家におかれましては、長年の夢が適い、このように見事なお住まいが完成されました、新宅祭を斎行出来ました事を心よりお祝い申し上げます。

建築に当りましては、先に地鎮祭を執り行い、土地の守護神に工事の安全無事と、将来の御加護を御祈願し、その後順調に進みまして、上棟祭に因つてこの家が建築に誤り、過ちもなく完成し、行く末永く災禍を来すことなく、堅固でありますように、棟木に神々の御神徳を打ち鎮め、工事も計画通り進行致しまして、本日めでたく竣工を迎えられて、神々へのご報告と御加護を祈念致したところです。

この工事に当られた棟梁さんは、長くこの地域でお仕事されて来られました。我が国の気候風土が高温多湿である事を充分に理解され、住まいの絶対条件であります、「安全・安心・快適」を考慮し、地元の自然素材により建築されたと伺っております。正に我が国の長年の伝統工法に重きを置いた建築であります。

改めて我が国の「家づくり」が地球環境問題、温暖化対策そして家庭内暴力、若年者の事件発生に関係しているか考えて見たいと思います。

昭和二十年の終戦を機に、急激に変化して来た生活環境、人々の「心」のバランスが大きく変り、抑制されていた生活や気分といったものが一気に解放され、諸外国からの思想や価値観といったものを思慮なく受け入れる社会情勢の中で、それまで連綿と培ってきた我が国の伝統文化に対する心が薄れ、日本人としての自覚が希薄になりました。

その後エネルギー資源も石炭から石油へと急速に転換し、一般家庭においても薪や炭から電気、ガスへと変る中で、世界でも類をみない急速な高度経済成長の波は、物の価値観や、考え方、社会の仕組みさえも変えて人々を巻き込んで来しました。

エネルギー革命がもたらしたものの、それは大いなる進歩と退化でありました。進歩とは、現代の文明を形成してきたテクノロジー。退化とは、人間の知恵と身体的機能であります。コミュニケーションが希薄になりつつある生活環境が生んだ数々の精神的弊害、身体を使わない故の機能の衰え、それを年老いてから実感する現状、部屋を密閉した状態で起こる様々な不健康、個室化による利己主義の増長と、多くの問題が発生しています。

一度達成した生活水準を落すことは出来ないにしても、私達の祖先の培った知恵を再認

識して学ばなければなりません。

戦後の住宅不足から、大量生産がもたらした大量消費、大量破壊、大量廃棄という悪循環が招いた結果は重大であります。

最近の住宅建築資材の多くは化学工業製品であります。建材品に含まれている成分の中には、シックハウス症候群として健康被害を及ぼすものもあり、後に大きな社会問題となり、法律で規定されるまでに至りました。

また、地球温暖化の原因となる二酸化炭素排出量の削減が世界的に議論され、その結果森林による二酸化炭素吸収が対策の柱と位置づけられた今、早急な森林管理が求められています。

古来より鎮守の杜は、神と人との相互交流の場であるという思想を根底に継承されて来ました。杜を守り、育むことが「足るを知る」に通じ、人々に郷土愛、愛国心を芽生えさせ、情操教育として人間を育てて来ました。この我が国が誇る「知恵」を啓発し、世界に発信することが環境対策、環境保全にとって最善策である（『神社新報』六月十一日論説）と思います。

この様な観点から「家づくり」に関しては、二酸化炭素の吸収に適う地域の森林を育て、

その木を使えば必ず再生を心掛け、環境保全に務めなければなりません。

これを踏まえ、長年職人として生きてきた方々が、伝承された技術を發揮する場が多くなれば、地域経済に与える効果は大きくなります。

我が国では「家づくり」の際、周りの自然に対し、畏敬の心を抱きつつ取り組んで参りました。土地、山、水、草木に至るまで魂を感じ、殊に樹木には精霊が宿ると信じ、神の「依代」として、神秘性を持つものとして、儀式の中で敬つて来ました。

現代の住販メーカーのように、利益優先で「家」を商品として扱うやり方では「心」の涵養は望めません。木という素材の持つ優しさ、温かさが子供たちに与える影響は大きいのです。家の間取りについても自由に対応する事が可能で、家族構成の変化にも適応できる事から、将来に亘り長く住み続けられる利点があります。

今日若年者の暴力、家族の崩壊等の事件が多発し、大きな社会問題になっていますが、これらは住まいの環境が影響していると言われています。子供部屋の個室化は、利己主義を作り、暮らしの文化と知恵を教える場が失われているという事を強く訴えたいのです。

このように「家づくりは、人づくり、国づくり」の観点から、「住まい」が生きていく上でどれほど重要であるかを再認識し、日本人が自然と共に生きて来た歴史に学び、心の

豊かな人間社会の構築を願っております。

この事を可能にできるのは、地域の職人の方々であります。地域社会を形成するには、地域の様々な皆さんが安心して生活できる形態でなければなりません。急激に消え行く伝統文化を絶やさないためにも、「家づくり」を一つの例として、今後皆さんと共に考えて行きたいと思います。

（山形県 熊野神社 宮司）

神道と芸術

浦 隆 一

北海道から参りました浦です。

日本を代表する芸術家。日本画家の富岡鉄斎。東洋のセザンヌとも称されております鉄斎先生は、四十六歳まで大和の国石上神社の禰宜、和泉の国大鳥神社の宮司等を勤められておりました事は、あまりにも有名です。

私は絵を描くことが好きで高校卒業後、東京の美術学校へ行きました。上京し始めて国立近代美術館へ行き、富岡鉄斎作の屏風絵大作を見て非常に感動いたしました。私は神職としては初心者同然ですが、画歴は長く、北海道はもとより全国規模の美術公募展の審査員なども行わせて頂いております。

そこで今日は神道と芸術。特に神道と美術の関係について、お話させていただきます。

絵を描くというのは翁と童、老人と子供がそれに一番近く、その間の人たちは働いているので絵を描く時間はありません。実際に公募展に出品する人々は老人ではありませんが、

六十歳以上の方が殆どで、還暦の厄祓いを終えられた人が、若い頃は絵を描くことが好きで展覧会に出品してみたかったけれど、やっと様々な面で余裕ができ、夢を追うことができるようになれば、入選を目指しておられます。

二十世紀は科学の時代で社会が目的突進でした。近年、高等学校では美術、音楽それに世界史は必修科目ではありません。中学校では道德の授業は他の科目、あるいは学校行事などに流用されているようです。

人は山というものを山と見ずに、林業や登山やスキーなど何か有効なことに使おうとします。山を、ただ山として見るのは音楽家とか絵描きさんが多いと思います。川もダムにするか観光地に使うかなど目的意識で回っています。その路線で学校の先生達は受験に必要な科目を、誇りを持って教えなかつたのだらうと思います。そういうところから一番外れているのが美術、音楽、道德だらうという思いを持ちます。

美術公募団体は畑のようなものです。文化には「育てる文化」と「分ける文化」があると言われますが、「育てる文化」は最近見捨てられることが多いように思います。分けるということは平等に分けるということで、平等でない問題が起きるのだと思われます。

豊葦原瑞穂国。日本は農業の国でした。今は業の国になりました。業は産業の業です

から効率的にたくさん、お米を作る。業がどんどん肥大化して農というのが要らなくなつたように思われます。農というのはイナゴがいたり彼岸花が咲いていたり、あまり良く出来なかつた米を小鳥にあげたり、刈り取つた田んぼの風景などです。農の風景は殆ど役にはたないものですが、農の美しさがあります。しかし農が切り捨てられていと思ひます。情報も同じではないかと思ひられます。「情」の世界は切り捨てられ、分りやすく、短く、てっとり早くと「報」がどんどん肥大化しています。最も大切な「情」が見捨てられているように思ひます。大切なことが切り捨てられてしまう時代ではないでしょうか。

美術公募展は畑のようなものと申ししたのは、「育てる文化」と「分ける文化」の間の「蓄える文化」があるからです。先輩から絵画指導を頂き、切磋琢磨し、絵画技術向上だけではなく、人と人との融和から個々人の知徳に磨きをかけていきます。これが公募展の良いところです。

ところが、還暦を迎え、挙つて入選を目指し、出品されるのは良いのですが、「美術」ではなく「美」が捨てられ「術」が重要視されている人が増えていきます。私の自宅にも審査の数日前にビール券が手紙と供に送られて来たり、急にレストランに食事に誘われたり。まあ、私、ビールは大好きなものですから受け取り拒否はせずに、有り難く頂戴いたして

おりますが。

これは美術ではありません。処世術という術です。このような方々には「心を込めて絵を描くことが一番大切なことですよ」「欲を持つては良い作品は出来ませんよ」と指導いたしますが、なかなか、その人に備わった術というものは取れないようです。

少し話が脇道にそれましたが、二十世紀に入り、西欧では自然科学の方法で真実を追究することが怒涛のように広がり、宗教絵画は急激に衰退しました。

日本には能とか、書とか、茶、という独特の雅嗜好があります。自然科学の方法では追及できないことです。祭りとか儀式も、やはり自然科学では説明できないものですが、大變に大事なことで、一種のエネルギーではないかとも思います。

神社で毎年行われる祈年祭、例祭、新嘗祭、その他の祭事はまさに日本の雅な「芸術」だと思います。神社神道こそが「育てる文化」「蓄える文化」であり、今後益々、神道の時代が訪れるのではないのでしょうか。

北海道は、冬は雪深く、境内の清掃はできませんが、春夏秋冬は毎日境内清掃を行っております。

私は境内清掃を行うことは、芸術作品を手掛けていることと思っております。境内が綺

麗であれば当然、参拝の方が参られます。中には毎日、参拝に來られて、社殿の階段を竹箒で清掃してくださる方もおられます。芸術作品も綺麗で欲のない作品であれば人々が見ます。神社は鎮守の森に心を込めて綺麗にし自然を大切にすることが、たいへんに重要なことと痛感いたしております。

十九世紀フランスの画家ミレーの有名な作品「晩鐘」を見て、富岡鉄斎先生の山水水墨画を見て、心を打たれる人は数多くおられます。どちらの絵画も神様の恵に感謝し、祈り、拝んでおります。

神社の祭りに参列し身を正す方々も大勢おられます。

鎮守の森を中心に本来の農業、情報、美術、そして人間らしい生活圏が築けると思います。

自然科学の進歩のおかげで生活は便利になりましたが、現代の日本人が捨て去ろうとしている多くのことに気付き、改め、お伊勢さまを元に、美しい心で神様を拝む人々が満ち溢れる国。

何事のおはしますかはしらねどもかたじけなさになみだこぼるる

これからの日本ではないかと思ひます。

(北海道 芽生神社 禰宜)

昭和祭のあとで

黒田明司

只今、滞りなく昭和祭を斎行致しました。

本日は、連休中多用中にも拘わらず、ご参列いただきまして誠に有難うございます。

私達は四月二十九日といえば、天皇誕生日として親しんできました。子供のころ父親が、「日本で一番偉いのは天皇陛下だよ」と教えてくれ、用意してくれた国旗日の丸を玄関先に掲げてお祝いいたしました事を思い出します。

四山神社では昭和の御代から境内に御製を掲示致し、御聖徳を仰いできました。しかし、平成の御代になりまして「みどりの日」として祝日になりましたが、多くの国民から「昭和天皇の聖徳を仰ぐのに、より相応しい名称にすべき」との声が湧き起こり、今年から待ち望んだ祝日。「昭和の日」が実施されることになりました。その意義は『激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、国の将来に思いをいたす。』とあります。

六十四年に及ぶ昭和の時代ですが、昭和天皇といえば、昭和二十四年五月二十九日に福

岡県大牟田市の三井鉾山三川坑をご視察されています。私の街は大牟田市の隣で炭鉱で栄えてきた所です。仕事柄、四山坑や三川坑に安全祈願祭に行ったり、特別に最先端の、石炭を切り出す切羽の見学もさせて頂いたことがありますので私なりに関心があります。

昭和二十四年、当時の『くろだいや新聞』によりますと、「純白の作業衣にキャップラップ、巻脚絆もりりしく坑口においでになった天皇陛下、七千五百人の奉迎の波、日の丸の旗の波から期せずして起こった万歳、万歳の怒涛のごとき歓呼！何度もお上げになる陛下の白い手袋は紺碧の空から五月の陽光がさんさんと照り映えて、ああ、お待ち申ししていましたと、この一瞬胸もしびれて感激にすすり泣く人さえあった。」「石炭は基礎産業だから、しつかりやってね」坑内でも坑外でも陛下は幾度も幾度もこうおっしゃって鉾員をやさしくいたわられた。」と報じています。そのご巡幸のときに三池鉾業所三川鉾では陛下ご自身が坑道の奥深く地下三〇〇m入られて石炭採掘の現場「切羽」をご視察され人々を激励されました。作業着をつけて坑夫と同じ服装で薄暗い坑道をお歩きになって切羽までお巡りになったのは初めてのことでした。そのお姿は神々しい姿と申し上げる以外になかった、といわれています。炭鉱に寄せる深い思いが感じられます。常に国民と共にあられようとせられた大御心を拝することができます。当時、日本復興の要となるエネルギー

一は石炭でした。その励ましにより九二三万トだった石炭の生産が巡幸の昭和二十四年には一五〇〇万トに増加しました。後にその場所を「天皇切羽」「天皇堀」と呼んで長く大切に保存されました。後に「海の底のつらきにたへて炭ほるといそしむ人ぞたふとかりける」と御製に託されています。炭鉱で栄えてきた私たちの町は天皇陛下の励ましにより日本の戦後復興の大事な役割を果たしてきました。

昭和天皇の全国ご巡幸は昭和二十一年の神奈川県から二十九年の北海道まで、沖縄をのぞく、ご視察日数一六五日全コース三三〇〇〇キロに及び陛下が直接お言葉をかけられた人数は二万人にもものぼるといわれています。全国のご巡幸はどんなお気持ちで始められたのでしょうか。

「今度の戦争で国の領土を失い、国民の中に多数の死傷者を出し、大変な災厄を受けた。この際、わたしとしてはどうすればいいのかと考えたが、結局、広く地方を歩いて遺族や引揚者を慰め励まし、もとの姿に返すことが自分の任務であると思う。わたしの健康とかなんとかは全然考えなくてもいい。その志を達するよう全力を挙げてこれを行ってほしい」そうした思いを強く抱かれてのご巡幸だったのです。

戦ひのわぎはひうけし国民を おもふところにいでたちてきぬ

わざはひをわすれてわれを出むかふる 民の心をうれしとぞ思ふ

国おこすもとゐとみえてなりはひに いそしむ民の姿たのもし

当時の事を昭和天皇は戦後のご巡幸で、多くの国民に接し戦後の復興への礎を築かれました。常に国と国民の平安を祈り治められてきた大御心と国民の間に確かな絆が結ばれていたからではないでしょうか。この精神文化こそ日本のすばらしいところだともいえます。そして、歴代天皇の大御心を受け継がれた昭和天皇の御心を御心として、日々、ご公務に精励遊ばされている今上陛下の益々のお栄えをお祈り申し上げたいと思います。

炭鉱で栄えてきた私たちの町は、昭和天皇の励ましにより戦後復興の大事な役割を果たしてきた町です。炭鉱がなくなり一〇年になりその面影が少なくなりつつありますが、その歴史と誇りを忘れず、日々の生活に地域づくりに役立てていただきたいと思います。

今日は初めての昭和の日です。昭和天皇のご功績や御製を通してそのお人柄を仰ぎ、昭和の時代を顧みて私たちの将来を考える有意義な祝日でありたいと思います。本日はご多用の中ご参列を賜わりまして誠に有難うございます。今後とも皆様のご多幸、ご安全をお祈り申し上げます。

亥年に思う事

三 木 治 夫

今年のお正月、ご祈祷を受けられた方に、亥年にまつわる話をしようと思っております。中に、正月早々あまり縁起が良くないと言われそうで話さなかったことがあります。それはイノシシの年は大地震や歴史的な大災害が起こりやすい年だということです。

すでに今年の三月二十五日、北陸地方に最大震度六強の能登半島地震が起こりました。過去の亥年の災害を見てみますと、戦後最悪の震災である十二年前の阪神淡路大震災、死者一〇四名を出した二十四年前の日本海中部地震、四十八年前の伊勢湾台風、そして八十四年前の日本災害史上最大の死者十萬五千人以上を出した関東大震災です。もともと昔ですと一七〇七年東海大地震で富士山が大噴火したのも亥年です。

尤も日本は地震列島と呼ばれているくらい毎年地震が起こっております、亥年以外でも大地震が起こっておりますが、特に亥年は大都市圏に被害をもたらすような地震や災害が発生しています。

では、何故亥年に災害が多いのか、という疑問ですが、これには特に科学的な根拠があるわけでもなく、ただ十二年間隔で大地震が起こったのでそう言われているだけみたいなのです。が、他に理由が無いとすれば、それは十二支の字が示す意味にあると思われる。

十二支には十二種類の動物が割り振られています。これは中国の王充という人が民衆に十二支を浸透させるべく、抽象的な数詞を覚えやすく馴染みやすい動物に替えて文献を書いたことから始まり、動物の干支は後から便宜上当てはめられただけなのです。ですので、十二支の文字それぞれには、直接的に動物につながる意味はありませんでした。

また、十二支は元々、十二年で天を一周する木星の年ごとの位置を示すために十二分した天を表す、古代中国の「年」を数える数詞だったといわれておりまして、やがて「月」や「時」を数える数詞などにも用いられていきます。そして十二支の各文字には季節ごとに移り変わる植物の様子を表しているという、次の様な意味があるのです。

「子」は「孳」（し…「ふえる」の意味）で、植物がこれから子を増やし生長しようとするタネ（種子）の状態を表している。

「丑」は「紐」（ちゅう…「ひも」「からむ」の意味）で、芽が種子の中に生じてまだ伸びることができない状態を表している。

「寅」は「演」（いん…「動く」の意味）で、春が来て草木がすくすくと伸び始める段階を示している。

「卯」は「茂」（ほう…しげるの意味）で、植物の若葉が茂って上からかぶさるさまを呈する時期を示している。

「辰」は「振」（しん…「ふるう」「ととのう」の意味）で、植物が盛んに生長する段階を示している。

「巳」は「已」（い…「止む」の意味）で、草木の成長が極限に達した状態を表し種子をはらみ始める段階を示している。

「午」は「忤」（ご…「つきあたる」「さからう」の意味）で、草木の成長が極限を過ぎ、衰えの兆しを見せ始めた状態を表している。

「未」は「味」（み…「あじ」の意味）で、果実が熟して滋味が生じた状態を表している。

「申」は「呻」（しん…「うめく」の意味）で、果実が成熟して固まって行く状態を表している。

「酉」は「酋」（しゅう…「しほる」の意味）で、収穫した穀物で新酒を醸す時期を示し、果実が成熟の極限に達した状態を表している。

「戌」は「滅」（めつ…「ほろぶ」の意味）で、草木が枯れる状態を表している。

そして「亥」は「闕」（がい…「とぎす」の意味）で、草木の生命力が種の中に閉じ込められた状態、すなわち核を表し、エネルギーが蓄積されていく様を表している。

このように十二支には草木の生長における各相を象徴した意味がある事がわかります。従ってこの亥年という年は地中深くエネルギーが蓄積し、その蓄積が限界を超えると、地表に吹き出してきて、大地震や火山の噴火などの大災害を引き起こす年にあたると考えられる訳です。

天災は忘れた頃にやってくるとは使い古された言葉ですが、備えあれば憂いなしです。日頃より防災意識を高めて頂き、過去の教訓を無駄にしないよう、あと半年無事にお過ごしただきたいと思います。

ついでに申し上げますと、亥年は参議院選挙と統一地方選挙が同時に行われる年でもあります。亥年現象とも言われ、亥年の参議院選挙は自民党が苦戦を強いられる選挙になるといわれています。政界においても、亥年の参議院選挙は激震が走る年になりそうです。

（滋賀県 多賀大社 権禰宜）

言靈の幸ふ国

生 寫 經 和

「大和は国のまほろば」、「まほろば」とは周囲を山々で囲まれた実り豊かな土地で、美しい住みやすいところをいうそうであります。また、「山城」にかかる枕詞を「ツギネフ」といいます。この語源には諸説あるようですが、その一つとして、万葉集の中に「次嶺経山城道」とあり、「次の（隣の）嶺」を「経（フ）＝經由する」の意味で、山々の連なる様子を表していると思われます。「ヤマシロ」も、もともとは山を背にするという意味からきているといわれます。大和の国から山城の国へ、古の平城京から平安京への緑溢れる山並みが連続する姿が思い浮かべられ、日本語のもつ美しさ奥ゆかしさが、これらの言葉の表現からも感じることができます。

さて、最近、久しぶりに映画をみました。『バベル』というアメリカ映画ですが、各種の映画賞を受賞し、また映像の点滅で観客の気分が悪くなったとか、いろいろと話題になりましたので、ご覧になった方もおられるかもしれません。

題名のバベルとは『旧約聖書』の「創世記第十一章」にある町の名だそうであります。遙か遠い昔、人々は同じ一つの言葉を話していたといわれます。町の人々は神に近づこうとして、天まで届く「バベルの塔」を建てようとしたましたが、神はそれを快く思わず、罰として人々に別々の言葉を話させるようにしてしまいました。その結果、人々は混乱が生じ統制がとれなくなり、ばらばらになり全世界に散つていったといわれます。

映画ではこれを背景として、「言葉が通じない」、すなわち「心が通じない」世界における人間を、現代に置き換え、異なる地域の時系列におけるストーリーの行間から浮き上がらせていきます。映画の舞台は、モロッコ、アメリカ、メキシコ、そして東京と、遠くはなれた地域の登場人物たちのそれぞれの物語が、ひとつの事件をきっかけに、複雑に交差し展開していくというものです。

モロッコでの羊飼いの少年の撃った一発のライフルの銃弾が、旅行中のアメリカ夫婦の妻に重傷を負わせ、夫の懸命の救助要請も言葉の相違によりなかなか意志の疎通がはかれず、時間が経過してゆきます。

アメリカでは、その夫婦の留守中の子供たちを、不法就労のメキシコ人メイドが自分の息子の結婚式に参列するため、国境を越えメキシコに同行し、これも誤解や偏見により、

さまざまな事件が引き起こされていきます。

東京では、母を亡くし、父と二人暮らしの聾の女子高生を主人公として展開していきます。父親に心を開けず、街中でも耳が聞こえないことにより、意思の疎通がはかれず、疎外感を募らせ自暴自棄になっていく姿が描かれています。

最後には、回り回って、ライフル銃の持ち主が、聾の女子高生の父親であることが判明し、めまぐるしく錯綜し展開していた物語の輪が、ひとつに繋がっていきます。

主題とは少し離れるかもしれませんが、耳が聞こえず、言葉を発することができないもどかしさに苦悩する女子高生の姿からは、自らの歴史を否定し、国家としての意思を主張することのできないまま繁栄を謳歌する、現代日本の姿を皮肉に描いているようにも感じずにいられませんでした。

この映画の中では、神の罰として、言葉の相違による混乱や偏見、誤解が描かれています。逆に人類がすべて同じ言葉を喋ったらどうなるのか、言葉が共通であつたらこんな混乱や誤解は生じないのかと考えると、少し疑問を感じずにはいられません。例えば、世界の共通語は、やはり英語であると認めざるを得ないと思います。しかし、世界には、多くの人種が存在し、さまざまな国と民族、文明があります。それぞれが独自の言葉をもつ

ことによって独特の文化・芸術、また宗教を育んできたといえるのではないのでしょうか。そこに、われわれ日本人との宗教的世界観の相違を感じずにはいられません。

洋の東西を問わず、音や言葉には、禍々しき魂や霊を追い払い、場を清める働きがあるとされます。神事での太鼓、カーニバルでの笛や鐘・太鼓などはその例でありますし、言葉も祝詞や呪文としてその霊的な力が利用されます。ただし、その大本になる「こと」「事」が何であるかということでは大きく分かれるといえます。

振り返って日本の国をみると、われわれの「言葉」は単なる意味の媒体として存在するのではなく、もっと深い、神々の世界につながる、神秘的なものでありました。その神秘性をもつ言葉が「言霊」であります。「言葉」は「心」の表れであり、「魂」の表れであるといえます。

「万葉集」には、「そらみつ倭の国は、皇神のいつくしき国、言霊のさきはふ国と、かたりつぎ」と歌われ、また、「しき島の倭の国は、事霊のさきはふ国ぞ、まさきくありこそ」とも詠まれています。人々は、神々の「神威」と「言霊」の力によって守護されていると信じてまいりました。

そのような私達の信仰が神の言葉にも、人の言葉にもあらわれて、選ばれた言葉によつ

て、祭りが行われ、そこに神と人の合一、神と人、人と人との交流が実現されてきたといえるでしょう。

(京都府 松尾大社 権宮司)

國造傳記解—私の子供時代の父親の話から—

池田 幸 統

父親は春、秋、出張の祭りから帰って来た時など、風呂上がりの上に機嫌で家族を前にしてよく神道と仏教の話をして呉れたものです。例へば、杉の木と「かずら」の話です。「蔓が杉の太木に向つて、『今年は台風の當り年だから、私の体で巻き付けてまもつてあげませう』と、杉の木の横にはり付いた。蔓曰く、『今日はこんなに晴れた日であります、数日後に台風が来たら大変だから』と、巧く口車に乗せて巻き付き、一回二回は守つたものの、三回目からは杉の栄養分を吸い上げ、しまひには、とうとう杉木立を致命傷に追いやつた。まさに現在の日本の運命だ」と話しをして呉れました。

又、こんな話もしてゐました。それは或る大きな店先に一人風変りな坊主が来て、「旅の者ですが、少しガマ売りの口上を述べるために、此の所を少し貸してほしい」と店の主人に申し込み、始めはほんの少しの場所です話をしてゐたが、だん／＼客が増えて最初は一坪程度だったが、次第に店の半分を取り、主人が気が付いたら、三年もしない内に店を全

部取られていた。主人から文句が出たが後の祭りで、まんまと店を乗っ取られて終ったと言ふ話です。これは其の国の終りを表す一例のような気がします。国が亡くなり、一家離散の憂き目に会ふ、それは終戦そのものが良く物語つてゐます。父はそれを六年前に看破してゐたのでありますが、一人で叫んでもどうにもならなかったので、せめて子供達だけにでも真実を知つて貰いたい一心で、話してくれたのだと思ひます。だから私は神道を信じても他の宗教に心をゆだねることは出来ません。終戦後は自由と言ふ風に惑はされ、其の結果、子が親を殺し、親が子を殺すと言ふ前代未聞の世相になってしまひました。街を歩けば若い男はズボンをだらしなくさげ、女性は茶髪にうつつをぬかし、一方で教育は日教組に滅茶苦茶にされました。ある新任教師の話です。授業開始の日に迎へた校長が、「此れだけはぜひ守つていただきたいことがある」と言ふのでお聞きすると、「生徒を叱らないで下さい」と。聞かされて驚いていたら、もう一人の仲間が、「実は自分も最初に同じ注意をされた」といふことでした。私は小学校六年の運動会の時に、ちよつとよそ見したと言ふ事で、木刀で脳天を殴られました。ずしんと来ました。しかし今思ふと良い経験だつたと思ひます。

私は皇學館大学を卒業して、文学士の学位を戴きましたが、その様な器ではなく、ただ

の神主としか思つてゐません。しかしながら、先祖代々、御宝山の神に仕へ今に到ります
が、私の祖先が大事にして来た、「天つ祝詞の太祝詞事を宣れ」だけは守つて行きたいと考
へてをります。

さて、標題の「國造傳記解」についてですが、八代おられたのに何故この様になるかを
左記に掲げる、國造傳記と徐福の書いたものとを、付き合はせて考へて見ませう。

國造傳記解

第一神朝七代

徐福が残した物

天照統大日咩持大神

天峰火夫神・天峰火母神

天照玉足大日大神

天高火男神・天高火女神

天照大日晴比咩大神

天高地火神・天高千火女神

天照高礼比皇大神

天高木比古神・天高木美神

天照大宝比呂咩貴大神

天草男神・天草美神

天照大日皇大神

天高原男神・天高原美神

天照大日咩瓊垂皇大神

天御柱比古神・天御柱美神

天照海（原）波良須美大神

無し

此の八代目の天の大主は三毛入奴命の大奴と成玉ひ御代継の美齋玉を以て、大韓国の大主となり玉ひぬ。是の国造伝記は、高良下宮社の大宮司、前田家の霊床の神体とし秘納したる傳記にして、延宝年間、前田紀伊守の整調せしものにて、解らぬ処も見ゆる。されど秘藏のまゝに煙滅し遂に国史の連列に入らざるなり。

爾来、宮下文書は七代、孝靈天皇の七十四年（西暦二一七）来日し、帰化した秦の徐福の著はしたものが原本でありますが、此れに基づいて、山梨県人の三輪義熙氏が廿余年の調査、研究をされ大正十年（一九二一）、神皇紀と題して出版したものです。実に二千百三十年間世に埋もれていた日本古代史なのであった。そこで、祖先の事柄を少し述べてみたいと思ひます。

天孫降臨の砌「天兒根命」^①「太玉命」^②「天鈿女命」^③「石凝姥命」^④「玉祖命」^⑤ Ⅱ「筑前・筑後県令」五十一世Ⅱ「御銚倉魂命」御銚倉魂命の銚を外して外面を温和に見せたのだらうと思はれます。御倉魂命は県令となり筑前・筑後を治めるために、場所を現在の高良大社に駐在したと思はれます。実際には遠望が良く、守り易く、攻めにくい場所である事。遠くは高天原の所在地であつた事等。又三段円墳墓は、御倉魂命と思はれる事。父は私にこの所に黒曜石の「石のみ」温石、石の釜等見つかった所と教へて呉れました。それともう一つ、神

護石が墳墓の南を西へ並んでゐる。神護石については次回に述べたいと思ひます。

(兵庫県 上ヶ原八幡神社 権欄宜)

春の夜の夢

西村 伴雄

現在私は松尾大社で宣揚課に所属しております。

宣揚課と言いますのは世間で言えば広報の事で、普段の仕事はマスコミの人達の対応が中心であります。

先般も京都テレビの某番組が松尾大社を三十分の番組で紹介したいとの依頼が有り、レポーターとしてあおい輝彦さんがお越しになり、収録を致したわけですが、その際お寺と神社の違いを簡単に説明して下さいと言われてハタと困ったわけです。

言葉で言えば、「神社は神様をおまつりし、お寺は仏様をおまつりしている所です」といふ事になるのですが、今の若い人達は神様と仏様の違いが分からない。

赤い鳥居が建っていて案内板に松尾大社と書いてあるにもかかわらず、境内に入ってきて「ここ鈴虫寺ですか」と聞く若い人が本当に多いのです。

お歳をめした方でも「ご本堂は何処ですか」と聞いてこられる。

なぜそうなってしまったか、と云ふと戦後神話を教えなくなったからです。

神話では神々が生き生きとえがかれている。

だから、因幡の白兔と聞けば大国さん、それは出雲大社。

八岐大蛇と聞けばスサノウノ命で八坂さん。

と、昔の人はイメージ出来たのです。

ところが戦後は神話を荒唐無稽な話だとして教えなくなつた。

ですから、今の若い人達には基本となるべき知識が無いから、神仏の違いを説明しようとするとは歴史的な事からさかのぼって説明しなければならぬから莫大な時間を必要とする訳です。

話は変わりますが、当社では春と秋の二回ライトアップを行っております。

当社は京都の西の端に在り、なかなか夜に人が集まってくれない。その為に色々と企画を考えるのですが。

宣揚課は企画も担当しており、去年の暮れ今年の春の企画を何にしようかと頭を悩ましておりました。

そんな折、友人と行ったスナックでバイトをしていた子が、大学のクラブでストリートダンスをやっている子だったのです。

話を聞いていると面白そうだったので、一度神社で君達のダンスを奉納してみないかと話をしてみました。

最初は路上で踊っているものを神社で奉納するのはと断われたのですが、神社と芸能の係わりを説明し納得してもらいまし。

一週間程してその子が神社まで訪ねて来て、これを読んで下さいと私の前に分厚い書類を差し出しました。

そこには私が酔って彼女に喋った話が理論整然とした文章で書かれてあり、自分達が神社にダンスを奉納する事になった経緯が書かれてあったのです。

それも、パフォーマンスの人達のネット上で発表された文章だったのです。

そして、その後数十名のパフォーマンスの人達の意見や感想が書かれてあったのですが、彼女達が神社で奉納出来る事を素直に喜んで、自分達も出来れば参加したいと云う思いが書かれていたのです。

それを読んでいるうちに、何とかこの若い人達の想いを叶えてあげられないかと、急遽

「人々が神々に捧げる夢の競演・奉納パフォーマンス大会」として、一日掛かりのイベントとして行うことにしました。

最終的には近畿・中部・関東から二十四組、約九十名の人達が集まりましたが、半分は関東方面からの参加者でした。

演目もダンスや芝居・音楽・アートペインティングにジャグリング、展示等様々なジャンルを越えた若者達が集まりました。

当日は朝七時から準備が始まり、リハーサルを行い午後三時から八時半迄の延々五時間にも及ぶ奉納パフォーマンス大会となりました。

私が参加者の若者達に言ったのは、「あくまでも神様に見てもらうのだから、音響効果や照明効果等の技巧は考えるな。上手くやろうと思うな。奉納は上手い下手の問題では無い。

真剣に真心をもつてやる事を神様は一番喜ばれるのだから。」この事だけでした。

そして彼らがその通りにやってくれた事は、全てが終わって帰る際の彼等の清々しく、晴れ晴れとした顔が如実に物語っていました。

理論理屈で何かを教えようとする中々難しい事でも、彼らに何か感じてもらえる場を提供してあげる事によって、彼ら自らが感じてくれる事も有る。

私は終わりの挨拶のむすびを「今日のこの大会を春の日の一夜の夢とするのでは無く、又再びこの場所で皆様と相見えん事を祈念しつつこの会を終わりたいと思います。」という言葉で締め括りました。

彼らの真剣な演技を見ている内に、来春も必ずこの会を開催したいと思っている自分の気持ち、その様な言葉となったのでした。

(京都府 松尾大社 権禰宜)

例大祭のあとで

山 根 俊 彦

本日は氏神様の例大祭に・・・の皆様多数ご参拝をいただきまして誠にありがとうございます。この日を迎えるにあたり、氏子総代の方々はじめ氏子の皆様、前々日來の境内清掃から飾り付け及び祭典準備に至るまで、ご奉仕をいただきましてありがとうございます。また御神酒をはじめ沢山のお供え物をいただき、氏神様もさぞお喜びになられたことと思います。重ね重ね心から御礼申し上げます。

さて、当神社はこの地に鎮座されて千三百有余年になりますが、この地の守護神・氏神様としてまつられ、此の郷に住む人々の生活が子々孫々に繁榮して行くことを願い、毎年延々とこのようなお祭りが執り行われて来たのであります。

今から思いますのに、この郷の生業は、ご案内のように山また山に囲まれた狭い耕地、山田での水稻耕作や畑作、また炭焼きを営む貧しい生活であったと思われる。そんな中私達の先祖は、家族労働を中心に此の地で生きる郷人同士の協調は勿論、協力しながら田

畑を耕作し、収穫するなど厳しい自然のなかで苦勞に苦勞を重ね、また努力の積み重ねがあつて、その働いた成果があつたことは勿論ですが、日照りや降雨、気温、洪水や嵐、あるいは病氣など、それ以外の条件にも大きく左右されることを認識し、学んできたのであります。それは自然環境のなかで、自分たちを取りまく自然の事物や現象の中に、自分たちと同じ生命が存在しているのだと信じ、また靈的なものも感じてきたのであります。そこには、自分たち人間の力では到底解決の出来ない、とてつもない大きな力が働いており、多大の恩恵と共に、生活に不都合な出来事等が繰り返されながら過ぎてきた経験のなかで、これを神の力と感じ、信じてきたのであります。

でありますから、不都合な事等の現象に際しては、自分たちのあり方はどうであつたか？何時も反省し、神を祀り、神に祈り、感謝しながら何時も心身共に「浄く・明るく・正しく・直く」の生活態度を持ち続け、「自分さえ良ければ良い」という觀念でなく、氏神様を中心に郷人みんなと共に地縁共同体として、自然を破壊するといふのではなく、自然と共に、つまり神々と共に生活してきたのであります。

このような経緯のなかに自分たちは、自分たちを取りまく自然の事物によつて「生かされている」「護られている」といふ思いが自然發生的に生じてくるのであります。そう思

うところから神の姿が生まれ、「祈り」と「感謝」の祭りが生まれ、神社も生まれてきたのであります。

こうして自然の神々を感じる感性とともに、自分たちの祖先への思いに対する敬いの気持ちなどが混ざり合う敬神崇祖の念が、「祭り」として表れ、氏神様に喜んでいただけるように本日のように最高の礼をもつてご挨拶をしてきたのであります。このように氏神様を敬うことによつて御神徳をいただき、お陰を受けて無病息災の生活を送ることができるのであります。

どうぞ今後とも祭りを通して、氏神様のご守護・ご加護をいただき、郷人の皆さん、氏子の皆さんが元気で、それぞれの生業に精励できますようお祈り申し上げまして、宮司の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

（滋賀県 與志漏神社 宮司）

感謝の心

岩崎 均

皆様、ようこそご参拝下さいました。

今日は日曜日ということもあって、小さなお子様を連れてお参りの方が大勢いらっしやいます。有難いことです。是非、機会あるごとに、こうして神社に親子で一緒にお参りに来て下さい。神社やお寺、ご先祖様のお墓参りなどに、小さいときからお家の方に連れてきてもらって一緒にお参りをする。今の子供たちにとって、とても大切なことだと思います。

毎日のように傷ましい事件やあさましい不祥事が起こっております。あつてはならないことばかりが続いて何とも不安の多い世の中になってしまいました。信仰心というものが、日本人全体に薄れてしまった、失われてしまった結果、こんな世の中になってしまったのではないかと思っています。神様が見ていらっしやる、お天道様が見ていらっしやる、という気持ちさえ無くなってしまうのか、人として、してはならないことが平気でできてしま

う人間があまりにもたくさんでてきているんじゃないか、と思います。

先代の宮司さんはいつも「信仰とは感謝の連続です」と仰っておりました。今の世の中、いただいている命に感謝して、神仏・ご先祖様に手を合わせて感謝するという最も大切なことが疎かになっているんじゃないかと思います。一人でも多くの方が、私たちの親が、ご先祖様が大事に守り、伝えて下さった日本人の当たり前の信仰心というか、感謝の心というものを、取り戻していただいたら、世の中はもっともっと良い方向へと向かっていくんではないかと思います。

今、子供たちの置かれている環境は非常に不安の多いものとなってきました。いつ、事件に巻き込まれるかもしれないし、加害者になってしまう心配までしなければならない時代です。

以前、愛知県の或るお寺が新しく観音堂を建てることになり、その棟上げのお祭を奉仕させていただきました。その際に、ご住職とお話をさせていただく機会がありました。長年、高校の教師をされていた方ですが、その方が「どんな子供でも問題は起こします。ご両親にお祖父さん、お祖母さん、三世代皆が一緒に暮らしている大家族の子供も、お父さんが一人で、お母さんが一人で育ててらっしゃる家庭の子供も、どんな環境で育っている

子供でも、問題は起こすんです。ただ、本当にしてはならないことを、ある一線を越えて犯してしまうのは、家庭に信仰のない、ご先祖様を祀っていない家庭で育った子供です、これは長年の経験から自信を持って言えることです。」と仰っていました。

都会へいきますと、ご先祖様のお墓参りに連れて行ってもらったことがない子供がたくさんいるんだそうです。ご先祖様、近いところではお祖父さんやお祖母さんのお墓がどこにあるのかも知らない子供がいるんです。

一昔前ですと、どこの家庭にも神棚があり、仏壇があり、お家の方が毎日手を合わせているのを見て、子供たちは育っていった訳です。今は、神棚も仏壇もない家庭がどんどん増えてまいりました。生まれた時から、神棚も仏壇もない家庭で育った方が、親となって子供を育てている。こういうところにも今の世の中が乱れてきた原因の一つがあるのではないのでしょうか。

心の教育ということが叫ばれており、いじめや自殺の問題で生命の尊さが訴えられています。しかし、校長先生や大臣までもが自殺をしてしまう世の中です。ここ数年、毎年三万人以上の方が自ら命を絶っている、そんな状況で、子供たちにだけ生命を大事にしないと言っても、少しも説得力がありません。私たちの生命（いのち）がどこからきてい

るのか、一番肝心の宗教心・信仰心が置き去りにされているように思います。政教分離ということで、学校、特に公立の学校ではなかなか宗教について、神さまや仏様のことにについては教えられない。家庭の信仰については家庭でしか教えられない訳ですが、家庭にも信仰が無くなって来ました。

今は、小学生や中学生が、夜はコンビニでお弁当を買って九時、十時まで塾で勉強をしている時代です。小学校や幼稚園に入るのにも受験といつて合格祈願にお参りに来る方も最近増えてきました。その一方、小学校の一年生が授業中にじっと座っておることができずに、ぶらぶら歩き回っているということも耳にします。小さいときから勉強しておくことも大事だとは思いますが、どこかでひずみがでてきてもおかしくない状況です。

ご飯を食べるときにいただきます、ごちそうさまでしたと手を合わせるといった、そういう当たり前のことを教えてもらわずに育っている若い人も実際にたくさんいる訳です。

一番大切なのは、小さいときに身に着けておかなければならないことを、家庭でお家の方が教えてあげることではないでしょうか。

信仰心というものは、なかなか教えることは難しいと思いますが、家庭でもしっかりと

神仏・ご先祖様をお祀りいただいて、一日の始まりには家族のみんなが手を合わせてお互いの無事を祈る、そして一日の終わりには手を合わせて家族全員の無事を感謝する。こういった環境で育つ子供、お家の方が常々神仏・ご先祖様に感謝を捧げて手を合わせている、そういう姿を毎日見て育っていく子供は、自然と信仰心が身につき、生命を大切に、お父さんお母さんを大事にしてくれるのではないかと思います。

どうぞ、神仏・ご先祖様のお導きとご加護を信じ、それに応えるべく毎日を明るく、感謝の心をもってお暮らしいただき、益々にご繁栄されますようお祈り申し上げます。

(三重県 椿大神社 権禰宣)

枚岡神社はどうして「元春日」と呼ばれるのか

山 根 眞 人

河内国一の宮である枚岡神社は、明治四年、明治政府が全国の神社に社格を定めるに伴い、我が国で三十社足らずの内の一社として官幣大社に列格された全国的にも古社の一つに数えられる神社です。遠方からの参拝者は一の宮枚岡神社、中臣氏・藤原氏の祖神天児屋根命様をお祀りする神社ということで参拝されますが、地元氏子の皆様は枚岡神社の由緒を、氏子ではない方に説明する時に、

「枚岡神社は格の高い神社やで、なんせ元春日（もとかすが）やからね」と誇らしく、そして多少の親しみも込めて語られるのをよく耳にします。

さて、この「元春日」というのはどういふことでしょうか。日本史の授業のようになってしましますが、難しくならないように解説してみましよう。日本人は元祖何々、元何々とそのものの古さ、由緒の正しさを伝える為に、「元」とか「元祖」または「小」等を付けて呼び習わしたがります。元伊勢、小京都、更には元祖なんとか餅なんかもいっしょでし

ようか。枚岡神社は皇紀前三年、今から二千六百七十年前に生駒山の一嶺、神津嶽において御祭神の御子孫天種子命が天児屋根命様・比売御神様をお祀し、国土安定の祭祀を執り行つたのが創祀であると伝わっています。その後奈良の都の鎮守として春日神社が鎮座すると、神護景雲二年西暦の七六八年枚岡神社の御祭神天児屋根命様・比売御神様が春日神社の第三殿・第四殿に御分祀せられました。そのことにより「元春日」と呼び習わされるようになったのです。因みにそれから十年後の宝亀九年西暦七七八年に春日神社より第一殿・第二殿の武甕槌命様・経津主命様をお迎えして枚岡神社の第三殿・第四殿にお祀して現在の形となりました。

現在春日大社の御例祭でありしかも勅祭でもある春日祭斎行後、春日大社より祭儀が滞りなく終了されたことの御報告に、社釀酒を奉納戴き、参拝が毎年続けられています。遠い古代の由緒、大切な歴史がこのように今に伝えられています。

枚岡神社は近鉄奈良線枚岡駅の東側すぐに鎮座しますが、その駅前には高さ三メートル余りの石標が立っています。その西面には「當國一ノ宮元春日平岡大社 左なら」と刻され、裏には「嘉永六年建立」とある。西暦一八五三年、ペリーが浦賀に來航した年に建てられたことが判ります。更に北面には「右大坂」と見え、当時の本街道の一つでもあった

奈良街道への道標ともなっていたようです。

平岡大社つまりこのヒラの漢字は、『三代實録』、『延喜式』の記載、また中世、近世にはタイラとマイという両方の漢字を当てていますが、境内の燈籠等にはタイラのオカ、平岡神社、平岡大社と刻されている場合が圧倒的に多いです。明治四年の官幣社列格後はマイの字の枚岡神社に統一されています。

近鉄の前身大軌鉄道が大阪奈良間に開通したのが大正三年です。この時神社の参道が二分されたのですが、この神社の由緒を伝える石標は駅のまんに移設され参拝の皆様を迎えています。南面にはその石標を奉納した氏子二十数名の名前が残されていますが、その方々は針金屋等の屋号や、車谷等の川筋の土地を苗字にされています。大正、昭和期に地場産業として我が国のシェアを独占することになる伸線工業の萌芽期の人々です。その当時は生駒山から流れ落ちる水流を利用した水車の動力で鉄線や銅線を引き伸ばしていました。神社のみならずこの地域の産業の歴史を物語る重要な史跡ともなっています。

枚岡神社は春日神社の元ですから「元春日」と呼ばれ、春日大社から全国に御分祀された神社も春日神社という名前です。ここで一つ疑問に思うことがあります、奉職してからいつも考えていたことですが、枚岡神社から直接御分祀された神社はいったい何と呼ばれ

ているのであろうか、やはり同じように春日神社と呼ばれているのだろうか。

十年ほど前でした。兵庫県の播州地方の神社の総代さんが来社され、

「自分の神社は遠い昔、河内の枚岡から来られた神様だという言い伝えがありますが、ここにはそんな資料はありませんか。」

と聞かれました。残念ながらそのような資料は残っていませんが、その神社名は「河内神社（こうちじんじや）」と同じ用件で五、六年程前にみえた方の神社は「河内御魂神社（かわちみたまじんじや）」、数年前東北地方から来られた方の神社は正にそのまま「枚岡神社」でした。拙速に断定出来るようなことはありませんが、春日大社より古い歴史を持つ、元春日である枚岡神社から勧請された由緒を大切に誇りにされていることがうかがえると
思います。

江戸時代以前の資料が極端に少ないこともありますが、「元春日」の由緒を大切にす
意味も含めて、調査、研究していくことも我々奉仕する者の務めであり、御神徳の発揚に
つながるのではないかと考えています。

（大阪府 枚岡神社 櫛宜）

てつて

佐藤 勇穂

先日、家族でスーパーに買い物へ出掛けた際、「もみじのようになってっただねー」と同じく
買い物に来ていた貴婦人（おばさんともいう）が私の末娘の「てつて」をにぎにぎされま
した。我が家の家族構成ですが、残念ながら妻一人、先日の初めての運動会でビリだった
六歳の長女、「だっこ」「てつて」あと「じんじゃ」しか喋らない二歳の長男、それと先ほ
どの「もみじてつて」の次女の五人家族です。住まいは縁があつて神社の裏手に住んでお
ります。そのお蔭で片言の日本語しか喋らない長男ですが、神社参拝だけは出来るよう
になりました。二礼二拍手一礼のその作法を「どうも、どうも、ばんばん、どうも」と教え、
今ではどこの神社にいつても「じんじゃ、じんじゃ」と連呼しながら真つ先に飛んでいき、
拝礼しています。

皆様も神社の前で当然のようにされるこの二礼二拍手一礼の作法ですが、最近女性の参
拝者の中に、拍手を打たない方がいらつしやると伺います。大変困つたこの原因は、ある

テレビ番組の中で、カリスマ占い師であるH氏が「女性が神社へ参拝した際の柏手は音を鳴らさない。柏手をやる者はバカ」とまで、しかもそれを年末特別番組で言ったため、私のところにまで問い合わせが来るぐらい反響が大きく驚かされました。

そもそも、柏手を打つという所作には、歴史的にも古くから日本独自の拝礼作法として用いられておりました。三世紀中国で記された『魏志倭人伝』には、倭人の風習として貴人に対し手を打ち、跪いて拝礼をしていたことが記載されております。また、柏手には和合の意味も含まれているといわれております。片方の手では音を鳴らすことは出来ず、手のひらを鳴らすためには、必ず両手が必要です。手と手を合わせて幸せというこの和合の証でもある柏手に日本人の根本精神があり、敬虔な日本人の心を示す作法であるといえるのではないのでしょうか。ですから、誰が何と云おうとも神社では柏手を打つのが歴史的にも儀礼的にも正しい作法であり、それをしない作法こそが神社神道においては誤った作法ではないでしょうか。

柏手を打つ根拠は述べた通りですが、伊勢の神宮では神職の作法に、八開手といって八回音を鳴らすものや、出雲大社では四回鳴らす四拍手による拝礼があり、必ずしも二拍手というものではないのですが、全国的にみてもそれらは一社の故実、いわゆる独特な作法

であり、一般的には二礼二拍手一礼の作法で正しいと思います。

さて、H氏の女性が柏手を打つべきではないとする根拠に「皇后様を始め女性の皇族は柏手を打たないから」といつているようですが、我々の神社祭祀と宮中祭祀を比較すると、かなり異なっている部分があるのは事実です。特に天皇陛下は昼夜を問わず国家の安泰と国民の平和を願い、実に多くの祭祀をお務めいただいております。現在、その宮中祭祀では、柏手がほとんど行われておりません。つまり、「皇族の女性は柏手を打たない」のではなく、「皇族の性別に関係なく、現在の宮中祭祀では柏手を打つ作法がほとんど行われていない」のです。しかし、だからといってそれを理由に女性は柏手を打たないと結論付けるのはあまりにもおかしい話ではないでしょうか。天皇陛下と皇族方の作法が私達一般国民の作法と異なっているのはある意味当然のことと思います。参拝者はその神社が定める作法で参拝する。それが「郷に入っては郷に従え」ということで、お祀りされている神様に対する礼儀ではないでしょうか。

マスコミは神社にとって上手に利用すれば大変有効な広報となりますが、このように間違った情報、困ったものもすぐに広がってしまいます。つい最近では、女性天皇容認論、少し前なら「神の国発言」等ではないでしょうか。今、まさに進んでおります「式年遷宮」

では、マスコミを通した広報を活用するために、まず、マスコミ関係者を教育する（手懐けるともいう）ところからスタートしているそうです。神宮諸祭、ついこの間ではお木曳き行事にご案内して、取材ではなくまずやってみる！と参加を促し理解を深め、よい効果を上げていると伺っております。間違った報道がなされないよう注視していかないとなりません。

神棚に しあわせ願う 小さな手（神社本庁『家庭のまつり』標語最優秀作品）

最近の親が子を殺す、その逆、青少年犯罪の低年齢化、これらの問題の解決は、やはりよい家庭環境からではないでしょうか。家庭祭祀の重要性を認識しつつも、それを解りやすく教化していく方法をもっと学んでいかなければなりません。

現代は進化した便利な世の中になり、我が家の家庭問題、幸せも今はこの携帯電話に全て記録されており、テレビ電話にもなります。あとで皆様にご披露いたしますが、私は、我が家の六つの「てって」を守り、さらに六つから八つの「てって」とするよう努力いたします。

（北海道 士別神社 権禰宜）

よみがえれ！ 日本の心

渡邊 知宣

一、シヨクキングな話

ある学校では食事の開始の合図に、「ピーッ」と笛を吹くそうです。

「いただきます」という感謝の言葉は、給食費を払って食事はすでに自分のものになっているから不要だとか、手を合わせるのは宗教教育であり憲法違反になるとか言うのが理由だそうです。

本来、「いただきます」という言葉は、私たちが生きていくために必要な食べ物を与えてくれた天地自然の神々の恵や、命あるものの生命をいただくことに対して、またそれを作ってくれた人々に対して、心からなる感謝の気持ちを込めて発する言葉です。

それを犬猫の食事の開始でもあるまいに、「ピーッ」と鳴らす笛が合図とは！

また現在の日本列島は、殺人と汚職と中傷合戦が花盛りです。親が子供を殺し、子供が親を、夫が妻を、妻が夫を・・・などなど。

子供を指導すべき先生が悪を為し、悪を取り締まる警察官も悪をなし、その判決を下す裁判官がさらに悪を為す。賄賂で動く政治家やお役人そして責任のなすり合い、欠陥住宅や不法建築をする建設会社。善良な人々をこれでもかと痛め続けるオレオレ詐欺。止まる所の無い性の解放と犯罪。麻薬と暴力団。毎日毎日、新聞やテレビは、これらのニュースでいっぱいです。日本中がおかしくなっています。

最近の世相は、

- ①、自分さえよければの世の中
- ②、経済最優先、お金万能・金金金の世の中
- ③、義務を果たさず、権利ごり押しの世の中
- ④、快楽のみを求め、働かない世の中
- ⑤、敬語の無い世の中

そして、悪いことをする人がいっぱいの世の中になりました。

では、なぜ日本はこのような醜い国になってしまったのでしょうか。

二、失ってしまった日本の心

一言で言えば、私は「目に見えないものを大切にする心」の喪失ではないでしょうか。

お金や物は目に見えます。目に見える物も勿論大切ですが、本当に大切なものは目に見えないものの中にあると私は思っています。

たとえば、神社にお祀りされている神様は目には見えません。しかし私たちの祖先は、大昔から目には見えないこの神様をあたかも目に見えるが如く敬い、大切にしてきました。「和の心」も目には見えません。「和の心」は心ですから、当然目で見えることは出来ません。「和」とは、お互いが寛容の気持ちで助け合い感謝し合って、喧嘩や戦争をせず「仲良くすること」です。

日本の国を建国なされた第一代の神武天皇さまは

「八紘を掩ひて宇とせむこと亦よからずや」

と二千年以上も昔に、世界中が一つの家族のように仲良くすべきだ、という八紘一字の「和の心」を建国の理想とされました。

聖徳太子は「和を以って尊しとなす」と十七条の憲法の第一条に「和の心」の大切さを示されました。

また、我が国の国歌「君が代」にもこの願いが歌われています。

「君が代は千代に八千代にさざれ石の巖となりて苔のむすまで」という国歌には

「小さな石が固まりあつて大きな巖となり苔がむすように、国民は助け合い睦みあつて一致団結して永遠に栄え続けましょう。」との心が込められています。

日本の古名の大和には和という字に大がついてます。大きな和の国です。民族の最高の願いを集約した言葉でしょう。

さらに、教育勅語に述べられている「父母に孝に 兄弟に友に 夫婦相和し 朋友相信じ」のような親への孝行の心や、夫婦兄弟友人への愛情や信頼などという心もまた目には見えませんが、ついこの前まで人々が持っていた当然の心でした。

このように「神様を敬う心」「和の心」「教育勅語の心」など「目に見えないもの」が日本では大切にされ続け、全ての日本人がこの心を身につけていました。「目に見えないものを大切にする心」こそが「日本の心」であつたと言えましょう。

そして、この心は歴代の天皇陛下の大御心そのものでもありました。

大正末期から昭和初期に駐日大使であつたフランスの詩人ポール・クロードルという人は

「日本は貧しい。しかし高貴である。地上で決して滅んで欲しくない民族をただ一つ上げるとすれば、それは日本人だ」と述べています。

このような、目には見えない「高貴な心」を、私たちの祖先は何百年何千年も無意識のうちに持ち続けてきました。しかし、残念ながら戦後わずか六十年で失ってしまいました。三、失ってしまった原因

ではどうしてこの素晴らしい日本の心を無くしてしまったのでしょうか。

第一の原因は、先の戦争の戦勝国である欧米の「個人主義」の考え方が普及したことにあると思います。「個人主義」は行き過ぎた自己主張、権利主張の風潮をもたらしました。

第二の原因は、経済最重要視の世の中になったがためです。人の命を始め、すべての物の価値が目に見えるお金換算になってしまいました。

第三の原因は、科学技術の進歩です。殆どの現象が科学的に解明される方向にあり、目に見えないものや科学的でないことは軽視されるようになりました。

時間の都合で詳しくは申し上げられませんが、大きくはこの三つの原因、即ち

一、個人主義が行き過ぎたこと

二、経済を最重要視するようになったこと

三、科学技術が倫理道徳を無視して進歩していること

というような事が「目に見えないものを大切にする心」を喪失させてしまっているように

思います。

一例を挙げれば、古来よりついこの前までは当然であつた田植えの時の共同作業は、機械化により個人で出来るようになり助け合う風習も全く無くなつてしまいました。大きなプラスの面がありますが、心の面で失つたものにも大きな面がありました。

個人主義・経済最優先・技術の進歩という事は、時代の流れで不可抗力の面もあり、これからこれらの流れは続くことでしょう。

しかし私はこの不可抗力の時代の流れの中に、「目に見えないものを大切にする心」という日本伝来の精神的秘薬を注ぎ込むことが、どうにもならない現在の日本を救う唯一の解決策であると思っています。

『星の王子さま』という本が、最近多くの人々に読まれています。この本の中でも「大切なものは目には見えないんだよ」という教訓が書かれています。

大問題である地球の環境問題も、この心を世界中の人々が持つようになることが解決の糸口になるものと信じています。

四、よみがえれ日本の心

神話の中に、イザナギノ命が黄泉国という死の国から帰られた時に、褌をされることに

より三貴神が誕生する物語があります。禊により苦しみが喜びに変わっていくお話です。この事は、よみがえるという言葉の起源ともなっています。

また、天照大御神が天岩戸にお隠れになった高天原は暗黒の世界となってしまうですが、再び御出現の後は素晴らしい秩序と平和が訪れます。

このように私たちは、どん底から立ち直った神話を持った民族です。

命をかけて明治維新を導かれた幕末の思想家、吉田松陰先生は、「天壤無窮の神勅」を固く信じて

「皇神の誓いおきたる国なれば

正しき道のいかで絶ゆべき」

と言う言葉を遺されました。

私たちも「天壤無窮の神勅」を信じて、悠久の昔から「日本人の心」であった「目に見えないものを大切にする心」を取り戻すための禊という努力を、必死で続けなければならぬと思います。

そしてこの日本の国を、今一度「世界一高貴な人々の住む国」によみがえらせたいものです。

現在、奇しくも数字が重なっていますが、今上陛下は第百二十五代目の天皇さまですし、伊勢の神宮は百二十五のお社から成り立っています。

私も「よみがえれ！日本の心」を目指して、百二十五歳まで頑張らねば、と思っています。そういう気持で、みんなで頑張りますよう。

（熊本県 正野神社 宮司）

丹生川上神社について

中村 徹

皆さん今日は。本日は丹生川上神社について簡単に御説明申し上げます。先ず当社は天武天皇四年、西暦で申しますと六七五年、今日の言葉で申しますと「人の声の聞こえない山深い吉野の丹生川上に私を敬って祀るならば天下のために甘い雨をふらせ又長雨を止めよう」との神様の教えによつて御創建になったと『二十二社註式』と言う書物に書かれております。以後朝廷の御崇敬は厚く『延喜式』では名神の大社、時代が下りますれば日本を代表する「二十二社」の一つにも数えられておりました。

又、雨乞い、雨止めの奉幣祈願が奈良時代より応仁の乱迄、国史に九十六度記載されております。

戦国時代に入り、恐れ多いことですが朝廷の御威光も限りなく衰え、大嘗祭はおろか即位の礼すら満足に出来ず御所も荒廃という世にあつて、当社も衰退を余儀なくされました。何故衰退したかといいますと難しいことですが保田與重郎氏に言わせますと究極には「神

意」だということです。更に天正十五年には兵火に係り、社殿、宝物も炎上したと言われています。徳川時代に入ると神仏習合により神宮寺がおかれ「大乘院」と名乗っていたようです。

更に寛政年間には既に当社は何故か「蟻通神社」と称されていました。神宮寺の本山である高野山に倣ったともかつて当地に吉野離宮があり蟻のように群れを成して通った「蟻通い」からきているとも言われますがはっきりしたことは判りません。又、当時は大阪泉佐野の「蟻通神社」の分社であるとも考えられていたようです。

一方、江戸時代に林羅山の記しました『本朝神社考』には「丹生社は所在不明」となっておりますが、白井宗因の『神社啓蒙』には「丹生社は下市山中丹生村にあり」と書かれこれ以後この説が有力と成りました。そして丹生村、現在の奈良県吉野郡下市町ですが、その丹生大明神が丹生の信仰を集めることとはなりました。

孝明天皇様の攘夷祈願の綸旨もこの丹生村の神社に出でいますし、幕末の義挙であります天誅組にもこの神社の祀職が二名馳せ参じております。

明治維新を迎え、社格制度が整えられると全国有力神社に高い社格が与えられました。丹生川上神社は何処だとなったとき矢張り「丹生大明神」として信仰を集め地名も「丹生」

でありましたので明治四年、官幣大社丹生川上神社と定められました。ところがそちらに赴任した少宮司、当時は大少宮司制でした、が平安時代の書類に記載の地名とまったく合わないのでは無いかという疑念を抱きました。おそらく後世に移ってきたのだろうということに成り元は何処だと探しました。「丹生がだめなら川上だ」と随分いい加減な話なのですが川上村に「タカオカミ神社」という神社がありました。氏子もわずかに二か大字であったのを急遽二十三か大字に拡張。「丹生川上神社奥宮」と定められました。ところがそうなりますと何やら川上村が丹生村の下に置かれたような感じになって気に入らないと独立運動が起りました。その結果明治二十九年に奥宮をも官幣大社に昇格させ「丹生川上神社上社」これまでの神社を「丹生川上神社下社」と定めここにおいて本来一社の筈の神社が二社になってしまいました。

扱、「蟻通神社」は郷社という社格にとどまていましたが、こここそが「丹生川上神社」だと信ずる氏子らは悔し涙にくれたといいますが、如何することもできず時だけが過ぎていったといえます。

大正年間になりまして当村出身の森口奈良吉氏が異常な執念と熱意をもつて昇格運動に邁進。すなわち地名の一致、弘長四年「丹生社」と彫られた石灯籠の存在、慶安三年丹生

宮と書かれた棟札等ありました。

政治がらみでいろいろ有ったのですが、最終的に内務省の考証官も森口説を認めました。ここで一言断っておきたいのですが、今日では神社も宗教法人ですので役員会の議決で社名の変更も可能でしょうが、国家管理時代は内務省管轄下でありましたので並大抵のことではなかったようです。

大正十一年十月十二日内務省告示をもって当社は官幣大社に昇格、さりとてこれまでに「上社、下社」がありますので苦肉の策で「丹生川上神社中社」とし、本来一社のものが三社になってしまいました。それ以後は中社を中心とし宮司、禰宜以下主典を七名ほど置きうち一名を上社に二名を下社に常駐させ、祭典ごとに宮司以下がこちらから出向していったと聞いております。又、官社時代には著名人の参拝もあり一例を申しますと、勅使として梨本宮殿下がおいでになったとのことです。その他は一条公爵、皇道派の重鎮荒木貞夫大将も参拝しています。一方の雄、石原莞爾中将も参拝しています。

大東亜戦争敗戦後は占領軍の指令により、神社と国家が分離され神社も宗教法人となざるを得ないというとき、三社は夫々別々の法人格を得まして今日では独立した神社となっています。当社は宗教法人「丹生川上神社」と登記され、こここそが本社であると主張

しています。

当社御祭神は罔象女神で水一切を司る神様です。これまでわが国は水のよい国とされてきました。しかし某大臣が「今時水道水を飲むものはいない」などと発言するように、ペットボトルの水を買うことも当たり前のようになってきました。

前世紀は石油を巡っての戦が幾度と無く起こりましたが今後、水をめぐって争いが起こるとの極論さえあります。

又、近代生活を送る上で必要不可欠な電気も水なくしては成り立ちませんので今後益々水の重要性が叫ばれております。

本日ご参拝の皆様には水の神様に対するご信仰を益々深めていただき水に感謝し、自然と共に生きる生き方をしていただきたいと考えます。

(氏子や出氏子の場合) 氏子の皆様にはこのように由緒、歴史のある神社の氏子である誇りを持ち更にご信仰をふかめていただければよろしいかと存じます。

本日はようこそ御参りでした。

(奈良県 丹生川上神社 権禰宜)

境内発く心駆着

山 元 義 清

平成九年に発生した神戸の連続児童殺傷事件を受けて、「幼児期からの心の教育のありかた」を検討していた文部大臣（現在は文部科学大臣）の諮問機関である中央教育審議会が、平成十年六月三十日に町村信孝文相に家庭の役割を強調した答申を提出し、それに沿って地域および家庭ならびに学校・園・所の教育が始められました。そしてあれからほぼ十年後の今年五月に厚生労働省は、「平成十七年国民健康・栄養調査」を実施した結果として、小学生が子どもだけで朝食を摂っている者が四割に達するとまとめました。さらに、昨年八月に国立女性教育会館の実施した「家庭教育に関する国際比較調査」では、日本の子どもが父親と過ごす時間は一日平均三、一時間でタイやスエーデン、フランスなどと比べて半分程度であるという実態が報告されています。この十年間において社会現象は大きく変化し、青少年を取り巻く環境が殺伐として、健全育成とはほど遠い状況にあるなかで、私たち神社に関わる者は、すばらしい環境の境内を有しています。境内から文化を発信させ、

そこで育った多くの若者が成人として大人になって我が子や地域の子ども達を連れ立って訪れ、常識や正しい文化、即ち心を脈々と伝承してくれる場が境内であると確信して取り組んでいるところです。

さて、中教審は、心の教育は家庭を見直し大人社会の利害得失を優先させるのではなく、父親の力を借りてモラルを高めよと提言したものです。その手法として子どもに父親の活躍ぶりを見せ、地域で子育てする環境を作ることにあるというものです。同時に小学生が自分たちだけで食事をする生活に警鐘を鳴らしたにもかかわらず、十四年前に実施された調査と比べて子どもだけで食事している率が十三、五ポイントも増加しています。食事時間も遅くなっており、健康を害する要素も徐々に加わっていることがこの調査でも分かります。子どもと過ごす時間が外国より低いということは、日本の親がしつけに接することが希薄となっているという現われでもあります。国際比較調査では、他国と比べて日本は子どもの育児は育児書に頼っている親が多く、あいさつや食事、清潔にするということに欠けていると報告されているもので、今日の児童虐待で半数以上を占めるネグレクト、（養育放棄）あるいは子どもの遺棄事件につながっており、熊本県の赤ちゃんポストへの子育てに困った三件のケースへと進展しています。こうして安全で安心した社会生活が営まれな

い背景として、幼い頃からの体験不足にあると考えます。

昭和三十年頃の社会は、子どもの背には弟や妹を背負っている姿が見られ、乳母車や舂もっこに入っただ子どもが大人の労働ぶりや地域での活躍ぶりを見て育ってきたものです。数年前に兵庫県や大阪府でこのような調査が行われました。それは、我が子を育てる前に兄弟姉妹や近所の子らの世話をして抱っこしたりオムツを替えた経験があるかというものであります。斯様な経験があるという者が実に全体の一八%という結果を見ると、思春期までの体験の重要性を感じずにはおられません。思春期は多感な時期でありますが生きては、愛や恋とは、死とはなど、すぐに結論の出ないことをあれこれと考え悩むもので、そういうことに対して多種多様の体験を積んでこなかった親が適切に助言を与えられないことから、さらにイライラ感を助長する淋しい人生をおくっていると言わざるを得ません。

こうした世相の中にあつて、私は幸いにして緑に包まれ自然が満喫でき、花鳥風月四季折々の変化に富んだ、そのうえ心身ともに清浄心を培える境内という財を有しています。

これを存分に活用していく仕組みと企画が必要と考え取り組んでいます。

茅の輪くぐり、ジャンボ七夕飾り、十月の秋季草木大祭の親子の集い、国選択無形民俗文化財や滋賀県無形民俗文化財での伝統行事に子どもの活用をしていくとともに、それら

に対する意義を分かりやすく説明する場の設定などいろいろな工夫ができます。いよいよ近づく七夕にあたっては拝殿に一五m近い青竹を切り、親子で製作した短冊や飾りをつるし安全祈願祭の後境内に立て成長や家族の安泰を祈ります。広報の媒体は新聞各社のお知らせ版への掲載依頼であり、その結果が報道であります。参加した親にとっては、子どもが一喜一憂し、自身や地域の仲間との深いつながりと広まりを身につけてくれます。また、地域連帯や協働体験することで生きていてよかった、家族の一員であってよかったという思想を自然にうえつけてくれる機会となれば大変喜ばしい事であると感じています。

こうして育った子どもたちが、また老齡期を迎えて神社の境内の茅の輪をくぐって「半年の穢れを祓ってもらったよ」、「拝殿で長い竹に願いを書いた短冊をつるして遊んだよ」と、自分の子や孫に伝えてくれれば、心豊かな人づくりになるでしょう。人づくりに境内が一役を担うとともに、精神文化の伝承、即ち心を育てるプラットホームであると考えます。私は、こうして境内の澄みわたった水溜りに小さな一石を投じる企画者であり、その輪が波紋となって地域に広がる滴水であれと訴えます。

水くみて淨く清しき御社のつどい広まる杜と人らと

磨ぎな忘れそ

村瀬佳子

今年の六月七日、新聞各紙が一斉に掲載しましたが、警察庁のまとめによると、全国の自殺者のうち「学生・生徒」が八百八十六人となり、統計を取り始めた昭和五十三年から過去最多を記録したそうです。

この自ら死を選ぶという事は、日本で一番古い本である『古事記』にすでに書かれています。第十一代垂仁天皇は四人の姉妹を妻にしようと呼び寄せるのですが、その中の二人を醜いからと親元に帰します。そこで帰された姫の中で円野比売の命は、同じ親から生まれた姉妹なのに慚しいと言って樹の枝に首を懸けて死のうとします。普通であれば隠しておきたい様な自殺の話が『古事記』では包み隠さず書かれています。人は辛い目にあった時、自ら死を選ぶ事がある。これは、そこまで辛い目に遭わないように、また遭わせないようにという教えだと思っています。

人は、それが全てとは言いませんが、多く、心の問題から死を選びます。本来学校は、

家庭も勿論そうですが、厳しい社会に立ち向かえるだけの強い心、そして健全な心を培う場です。しかし今、それが難しいのです。というよりも、心の磨き方が分からない。また、教えの礎となるものが無いのです。

心、心と考えてみますと、日本人には古くから大和心という言葉・考え方があります。

心を磨くにはどうしたら良いのか。実際に活動して居られる方がいます。株式会社イエローハットの創業者、鍵山秀三郎さんが作られた『日本を美しくする会』というものがあります。この会は、トイレを素手で掃除します。活動の賛同者と共に、公共の場所や、学校などに呼ばれて掃除の仕方を教え、一緒に掃除されます。なぜトイレ掃除なのか、この会のホームページによると「①謙虚な人になれる。②気づく人になれる。③感謝の心を育む。④感謝の心が芽生える。⑤心を磨く。」この五つを目指して居られます。

私はこの目標を見た時、大和心を磨くのと同じだと深く感動しました。

神社に参ると、お宮の人はいつも掃除をして居られます。いつお参りしても清々しい心になると思います。神様に向かい手を合わせると自然にありがたいという感謝の気持ちが生れます。これを皆さんのご家庭においては神棚さんでなさると良いのです。昔はどんな家でも神棚さんをお祀りしていました。部屋の片隅で神も上げず、お水も取り替えず埃

をかぶっていませんか。また、新居を構えた人、親元を離れて一人暮らしの人、実家にあるから必要ないと思つていませんか？神棚は全ての家にあるものなのです。

また、大和心というのは多くの人が和歌に詠んで来ました。その中の明治天皇の御製に身にはよしはかずなるとも劔太刀 磨ぎな忘れそ大和心と

という歌があります。

刀は、手入れをしないと、錆びてしまいます。錆びると、どんな素晴らしい劔であつても、その役割を果たせません。人も心を磨かないと、本来持っている力を發揮する事が出来ません。

ここに面白い話があります。昭和十三年に発行された千葉胤明氏の『明治天皇御製謹話』という本を紐解いてみますと、明治天皇の許で、ある御前試合が行われました。試合に立ったのは鉄舟翁と渡辺昇子の二人で、両方とも大変な劔術の腕前であつたと言います。渡辺昇子は体格大きく、竹刀も太長で、これをいきなり大上段に振りかぶります。一方鉄舟翁は無刀流だけに竹刀は短かつたそうなのです。この上段の構えというのは、胴はすきだらけ、その代わり必ず打ち取るという相手を見縊つた態度だそうで、しばらく睨み合いが続きます。立会いは、先に仕掛けた方が負け、つまり先に手を出した方が負けなのですが、

渡辺昇子はいかに耐えられなくなつて上段にとつた剣を打ち下ろしたのです。そこを鉄舟翁はすつとかわして渡辺昇子に迫り、面を軽くコツコツと撫でるように叩いて「ご無礼」と言つたそうです。どんなに優れた腕を持つている人でも驕らず、常に心を磨き研鑽せよという事だと思ひます。

大和心とは何か、それは謙虚な心・素直な心・美しいものは美しいと感じることが出来る感性・困難にぶつかつても対処する事が出来る柔軟な心ではないでしょうか。ただし、何もしないでいると大和心は身につきません。

大和心を磨く事こそ日本人として生きる道標ではないでしょうか。心が弱つている人も、自信に満ち溢れている人も

磨ぎな忘れそ 大和心を

(広島県 長束神社 権禰宣)

御遷宮への念い

木下久榮

テレビをみておりましたところ、お木曳きを取材していた記者に感想を聞かれた中年の男性は、「今までこんなことがあることを知りませんでした、こういう体験はいいですね。とてもすばらしいものでした。」と感動した様子で取材に答えていました。

私も主人共々昨年、天草の奉仕団の一員としてお木曳きに参加いたしました。その日、伊勢はあいにくの雨でしたので、ビニールのレインコートに身を包み、一日神領民として太い白い綱をひきました。日本各地から集まった奉仕団の先頭には、高々と幟が立ち並び、雨などものもしないというような意気込みで、しとしとと降る雨の中を、木遣り歌に合わせながら御用材を曳く長い行列が延々と続きました。老いも若きもただひたすらに綱を曳くさまは、言葉には表せないような感動に満ち、胸の奥からこみあげてくる熱いものを感しました。

日本書紀によりますと、伊勢の神宮は第十代垂仁天皇の御代に伊勢に御鎮座になったと

いわれ、三世紀末から四世紀の初めという説を立てられる研究者がいらっしゃいます。

式年遷宮の制度は、今から千三百年の昔、第四十代天武天皇の思召しにより定められ、天武天皇のお后であった第四十一代の持統天皇の朱雀四年に第一回の御遷宮が斎行されてより六十一回目を数え、平成二十五年には第六十二回の御遷宮が斎行されますので、今その準備が着々となされており、お木曳きも一連の行事として行われております。

式年遷宮の式年とは、定められた年ということであり、遷宮とは宮移し、神様のおひっこしということになります。

ところで、遷宮以前の御社殿はどんな建物であったかははっきりしないようですが、殆ど今と同じような様式の建物ではないかというのが研究者の意見です。そして、傷んだところを修理しながらお社をお守りしていたようですが、きっと長い年月を経て傷みもひどかったのではないかと推測されます。

天武天皇は、伊勢神宮に対する崇敬の念が厚く、吉野から美濃に向われる時、途中伊勢神宮にお参りをされたそうですが、その時の神宮の御様子はどんなだったのでしょうか。そして、天武天皇の御心に去来したものはなんだったのでしょうか。

当時日本は多くの事を大陸に学び、中央集権的な国家体制が整っていましたが、いろん

な面で大陸文化の影響を受け、日本人の精神面、思想的な面に至るまで大陸的なものを取り入れようとする風潮があり、日本古来の文化や伝統・歴史をないがしろにする動きがあらって、日本的なものが失われ、忘れられたりする危険性をはらんでいたようです。

天武天皇は、そのような風潮に危機感を持たれたのではないでしようか。

神宮の御祭神である天照大御神様のお姿を日本書紀は、「此子光華明彩照^{こうかめいさい}」徹^{りくごう}於六合之内」（此子光華明彩六合之内に照り徹る）この子はひかりうるわしくして、六合（宇宙全体）の内即ち天下に照り徹るものであると表現しているそうです。天照大御神様は光り輝き給う尊い大なる神様で、皇室の御先祖様としておまつりされています。

また、「天照大御神様は御光によってすべてを照らし給い、御光によってすべてのものを生かし給い、活動させ給う。花が咲き植物が稔り、人間も生きて活動することができ、すべての命のすべての働きを支える基本の力がこの御光である。そして、私達はその御光の恵みをいただいている」とある学者は説明しておられます。

伊勢神宮では、皇室の弥栄、国家の安泰、国民の平安や繁栄、世界の平和、五穀豊穡が祈り続けられているそうです。

天武天皇は、そういう大切なお社を永久に清らかであり、尊厳を保たせるために、また

そこにお鎮まりになつていらつしやる神様が輝いておられるように、そしていつまでも祭りを続けていくことができるための連続性、永遠性というものを深く考えられたにちがいありません。かといつて宮殿建築や寺院建築のような建物にはなさいませんでした。

天武天皇の御代には、すでに法隆寺のような立派な木造建築があり、日本人はすばらしい建築技術を持っていたそうですから、ただ単に神宮の建物を永久的に後世に残していくということであれば、近代的建築法による立派で壮大な御社殿を建築することができた筈なのに、棟持柱を残し、天空に突き出た千木や鰹木を用いた茅葺き屋根、掘立式の柱という素朴で古来のまゝの「唯一神明造」の建物の様式を守り、日本古来の文化や伝統・歴史のよさをとりもどそうとされたときいております。

ただそのような建物は傷みがくるので建て替えが必要になります。そこで二十年に一度の御遷宮をお定めになったものと思われれます。

二十年を一区切りとしたのは、木造建築の耐用年数を考えて、御社殿の尊厳を保つため、伝統や技術の継承に適当な年数、人間の世代交代を三十年とした場合、一代に一回づつ行われるのは、自然の営みに叶っているという説など諸説がありますが、式年遷宮の意義は、なんといつても「とこわか」であり、「よみがえり」であるといわれれます。

「とこわか」というのは、神様が常に若々しいお力をもって輝いて、尊厳性を保っておられるということ、「よみがえり」は生まれかわり、お社も調度品なども再生することによって新しい生命力が生まれるということであり、神様が新しいパワーを持たれるということです。同時に神祭りと祈りが古代からずっと続けられているのです。くり返しによって連続性、永遠性が保持される、永遠に物事が伝わっていく大きな知恵だと思います。

神様がいよく新しい御殿にお遷りいただく頃、杵築祭というお祭りがあるそうですが、「かくしつつ 仕えまつらん よろづよまでに」「宮ぞさかゆる 国ぞさかゆる よろづよまでに」と、よろづよまでに」という言葉がくり返し使われており、大御神様の御光が永遠に輝き給うように、更に神宮も国も国民も奉仕も永遠であれという祈りが式年遷宮にはこめられており、更には神様の輝かしいお力を私達もいただいて幸せになりたいという人々の願いもまた遷宮にはこめられています。

かつて栄えたパルテノン神殿は廃墟であり遺跡であり、過去のものでしかありません。でも伊勢の神宮には、古代からの日本人のいのちが今も脈々と息づいています。それはくり返し行われている御遷宮によるものであり、御遷宮は、日本のいのちが永遠に受継がれていく姿だと思います。

しかし、中世の戦国乱世のため、式年遷宮が途絶えた時期がありました。神宮のためにと立ち上がり、全国を勧進して廻り、橋のかけかえに力をかされた勧進聖とよばれる僧尼の方々の力が大きく、特に慶光院三代目清順上人は全国を行脚して勧進し、外宮の正遷宮を復活させた功績は大で、内宮の正遷宮については四代目の周養がその意志をつぎ、信長の寄附もあって内宮の正遷宮が復活いたしました。私達もその方々の心を受けついでいきたいと思っています。

天武天皇は、莫大な費用と多くの労力を必要とすることを承知で、くり返しによる連続性、永遠なるものを願って、式年遷宮の制度を勇氣をもって定められました。その他神祭りに心をくだかれ、大陸文化に埋没しないように、日本の文化・伝統・歴史をしっかりと守り、伝えようとされた方だと考えますが、それだからといって決して仏教を排斥するような事はなさらなかったそうです。

神宮は日本人の心のふるさとであり、日本の総氏神様です。多くの人々の念いや努力によつて今日まで続いてきた御遷宮が、永遠であるように祈りながら、多くの方の御奉賛のもとに、第六十二回の御遷宮が恙なくとどこおりなく斎行されますようにとひたすら願っております。

(熊本県 大江八幡宮 欄宜)

石上神宮のにわとり

湊 久昌

神社は、「目に見えるもの」より「目に見えないもの」を何よりも大切にしています。石上神宮は全国の神社のなかでももつとも古い神社であり、人々の心と身体をつかさどり、「いのち」を守護して下さる神様として、広く信仰されてきました。境内は鬱蒼とした常緑樹に覆われて、凜とした靈氣に包まれ、神さびた自然の姿を今に残しています。

全国各地より多くの方が参拝に來られますが、そのなかには石上大神様は畏ろしいほど厳しい神様だと体感される方もあり、少しでも気分を和らげていただければと思い、三十年程前よりチャボを飼い始めました。

またその頃より、境内を通る東海自然歩道の一端である「山の辺の道」を散策される人々も年々多くなり、鶏は参拝者やハイカーの人気者となりました。

今では石上神宮といえばニワトリ〓ご神鶏というイメージが定着し、この鳥たちのいない境内など考えられなくなりました。

天然記念物の「東天紅」も奉納されて鶏舎で飼育していますと、何時の頃からか「捨て猫」ならぬ「捨てニワトリ」が増加し、一時は四十数羽を数えるまでになりました。参道で日光浴をしている姿や、社務所前の松の枝にとまったり、あたりをキョロキョロと見回している姿は、何とも微笑ましく、今では当神宮になくてはならない存在になりました。

そのニワトリに、降って湧いたような災難が襲い掛かりました。先般より報道の絶えなかった「鳥インフルエンザ」騒動です。私共職員もその対応に明け暮れました。やむを得ず捕獲して小屋に入れようとしますが、野生化してすばやく走り廻り、飛ぶことさえできるようになった元気なニワトリたちは、そうやすやすと捕まりません。

神代の昔から「時を告げる鳥」として大切にされてきたというのに、こんな災難に遭うとは・・・。

今はこの騒動も終焉しつつあり、またもとのように放し飼いにしました。境内で楽しく遊んでおります。

現在境内には三十羽ばかりのさまざまな種類の鶏がいます。これらの鶏は一般家庭で飼われていましたが、やむを得ぬ諸般の事情があったとはいえ、結局は自分の目の届かないところに追いやってしまえばよいという、人間の身勝手さにより捨てられたものが大半で

す。

本来の野生を取り戻して野鶏となり、午前三時頃よりの雄叫びに始まり、夕闇の木登り就寝まで、自由勝手気ままな日々を送っています。しかし、境内にはさまざまな動物が棲み、非情なる弱肉強食の世界で、木に登れない鶏はタヌキ・テンなどの餌食になってしまします。

喧嘩早い鶏、気弱な鶏、また逆に気の強い鶏、要領のよい鶏、仲間に解け込めない鶏などさまざまで、なんだか私ども人間社会の縮図のように思えてなりません。弱きも強きも日々精一杯生きようとしている姿を見ると、力強い生命力が湧いてくるような気がします。現在のこのすさんだ世の中で、私たちは常に様々なストレスにさらされています。

ストレスが溜まったと思われたときには、ぜひ石上神宮を訪ねてみてください。この緑豊かな境内に静かにたたずみ、自由奔放に飛び回る鶏をゆっくり眺めていただければ、きつと病んだ心も癒され、私たちが忘れかけている「生きとし生けるもの」の「いのちの尊さ」を、再認識できるのではないかと思います。

きつとそのことが、大神様が私たちに与えて下さるお力なのではないでしょうか。

(奈良県 石上神宮 権禰宜)

日本の心

鈴木 明子

私達日本人は、諸外国の民族に比べて自分達は日本人だ、日本民族なのだ、という意識をあまり持っていない、というかあまり考えたことが無いように思います。それは単一民族で構成されている島国ということの影響大というところだと思いますが、それ故に私達日本人が持っている素晴らしい特性、素晴らしい心について良く知っていないと思います。それは、日本人ほど自然を愛し、感謝し、目に見えないものに畏敬の念を持つ、繊細で豊かな感性を持っている民族は無いということです。

古代縄文時代を背景にした小説に「月神の統べる森で」というのが有ります。たつみや章という方の作品ですが、そこには、ありとあらゆるものに神を見、命を見、感謝して生活している縄文人の姿が生き生きと描きだされています。

例えば、玄関に入るときは玄関を守っていてくれる神に感謝の言葉を述べ、部屋へ入れば家を守っていてくれる神に感謝をして座る。川で漁をするときは、まず川の神に魚を獲

らせてほしいと頼み、獲った後は必ず木で作った木の花を捧げて感謝する、といった具合です。作者によれば縄文時代の生活を念入りに調べて書いたとのこと。古代の日本人はこんなにも敬虔に生きていたのかと驚くばかりです。（北陸の方では現在もそういう風習が残っている所があるそうです。）

又、万葉集を紐解いてみますと、天智天皇が春と秋とどちらの季節が良いか、とお問いになったとき、額田王は次のように答えています。

冬ごもり 春さりくれば

鳴かざりし 鳥も来鳴きぬ

咲かざりし 花も咲けれど

山をしみ 入りてもとらず

草深み 取りても見ず

秋山の 木の葉を見ては

黄葉をば 取りてそしのふ

青きをば 置きてそ嘆く

そこし恨めし 秋山そ我は

山山を愛し、木を愛した万葉人の心の息づかいが偲ばれます。

さらにこの日本の心、日本人の感性は平安時代には、極致に達します。幽玄の世界（微かな世界）に神経を研ぎ澄まさせていきます。

新古今和歌集の式子内親王のお歌に

山深み春もしらぬ松の戸にたえだえかかる雪の玉水

というのがあります。雪に包まれた静寂な世界、耳をすませば微かに雪解けの雫の音がする、というのですが、その神経の鋭さ、繊細さ、日本の心だなあと感じます。

そんな日本の豊かな心、目に見えないものへの敬虔な思いが、戦後、科学的であることこそ大事、という考えのもと一蹴されてしまっています。

教壇に立っていた頃、中学生に「お正月前に大掃除をするのは、歳神様が新しい玉を持つて来て下さるから、家をきれいにしてお迎えするためだ」と言いますと「そんなバカなこと、非科学的、証明もできないのにおかしい」というのです。（ほとんどの生徒は、そうかと素直に聞いています。）

そこで私は、「目に見えないから存在しないというのは、誰にだって言える。目に見えないけど存在するかもしれない、と考えられる日本人の心って、素晴らしいと思わない？」

と言いますと、反対していた生徒も参ったという顔をします。そんな時、私はやはり皆日本の本の心をもっているなと嬉しくなつたものでした。

さて、日本の心としてもう一つ挙げたいものがあります。それは、言葉に対する鋭くも豊かな感性ということです。

日本には古来より言霊、音霊という言葉があります。言の葉、音そのものに靈性が宿っている、というものです。授業中に生徒が騒いだとき、「やかましい！」とか「うるさい！」と言つても静かになりません。「シッ」と言いますと、見事に静かになります。

そんな言霊を感じられたからこそ、平安時代の古今和歌集選者の一人、紀貫之は、その仮名序の中で、

やまとうたは 人の心を種として万の言の葉とぞなれる
と論じたのでしよう。

伊勢物語のなかで歌が次々に詠まれています。それは道祖神に手向けるためという意味もあつたということです。

言霊の力を借りて自分の思いや目に見えない存在に感謝の気持ちを歌にして詠む、なんと優雅で美しい心映えでしょうか。

今若者達は、殺伐とした言葉、激しい言葉を平気で使っていますが、古代縄文時代から日本民族が持っている言葉への想い、目に見えない存在への畏敬の念、自然を愛することなどの豊かな日本の心を取り戻してほしいと思います。

(滋賀県 立木神社 権禰宜)

名馬壽号追悼祭

松 吉 宣 和

島根県隠岐郡海士町崎の「崎郷土史研究会」から、五月二十七日に執り行われる壽号まつりの案内に、神事の後、ロシア・日本国際交流会、島根県文化国際交流課、ロシア人コトリヤロワ・クセニア(女性)氏らが出席し、「ロシアから見た日露戦争とその後」の講演、続いて直会と記されていた。

乃木神社の関係者は、「壽号」の世話をしていた牧夫、佐伯角藏氏の孫、渡辺俊子御夫妻、崇敬者十一名が出席。平成十三年に壽号のお墓に参拝した時、「壽号」の御霊祭りの依頼があり、平成十四年より毎年御霊祭を奉仕している。ロシアの人の参拝は初めてで、崎郷土史会会員と「壽号まつり」を斎行、玉串の後、参列者と「水師営の会見」の歌を合唱した。

明治三十八年一月五日、水師営の会見で、旅順要塞司令官ステッセル將軍が、乃木將軍に贈ったアラビア産サラブレッド八歳牡の愛馬は、ステッセルの「す」をとって「壽号」

と名付けられた。体高は四尺九寸（一四八センチ）、乃木將軍が書かれた『壽号略伝』に「性質極めて順調、戦場に於ける爆音喚声に驚かず、飛越も躊躇する状なし」と記載されている。

乃木將軍は日露戦争後、軍から払い下げを受けて、東京赤坂の自邸で飼っていた。

戦時中、日本の軍馬はロシアの馬に比べて貧弱だったので、「日本の馬の改良に役立てたい」と明治三十九年十二月、軍馬補充部本部長大藏平三中尉を通じて、鳥取県赤崎町の佐伯友文氏の牧場へ「種馬」として贈った。

「壽号」が種付けした仔馬は八十頭、牧場で十年間過ごし、大正四年五月、隠岐の島とうぜん前の中の島（海士町）島司村上寿夫氏より、最南端にある崎の獣医渡辺淳三氏に預けられ、十頭の仔馬をもうけた。大正八年三月十日の陸軍記念日に病にかかり、五月二十七日の海軍記念日に二十三歳で天寿を全うした。

「名馬壽号まつり」の幟青空に祝うが如くはためきている——短歌会会員 岩崎玉枝

クセニア氏は、「壽号がロシアの大地から日本に来て、『名馬壽号之墓』と記された自然石（高さ一メートル）の墓石が台座におさまり、地元の人達に見守られ、お祭りされていることは、大変にすばらしい」と感動された。しかし、「日露戦争はロシアが勝利していた

のに、なぜ降伏したのかとても疑問に思う。ステッセル將軍はロシア政府の指示に従わずに自ら降伏したことで、裁判で死刑の判決を受けた。約七割のロシア人の若者は、日本に対して反日感情をもっており、三割の若者は、日本の武士道精神は人の生きる道しるべである。「ウラジオストツクの日本街」がその良い例である」と述べ、日露戦争のことを知らない若い女性の話は、崎郷土史会と地元の反感を受けた。

これに対し崎郷土史会会員が次のように述べた。

乃木將軍は「水師營」で会見したとき、各国の記者から写真を撮らせて下さいとの申し入れがあり、乃木將軍は一枚だけ許可した。互いに剣をさげての写真を撮り、共に多くの死者を出したことを世界に発表することは、「日本の武士道精神に反する」と言われた。この乃木將軍の態度に感動したステッセル將軍は、自分の乗っていたサラブレッドの愛馬（八歳牡）を乃木將軍に進呈したが、將軍は「軍規に従って」とその場で受け取らず、後に明治天皇より承諾を得て、大切に育てることを約束して日本に連れて帰った。また、ステッセル將軍に死刑判決が出て、すぐに乃木將軍はロシア政府に対して、死刑減免の嘆願書を送り、ロシア政府の恩情で十年の刑で出所している。

このことに関しては、クセニヤ氏は認識しておらず困惑していた。

広く国民の間で歌われた文部省唱歌「水師營の会見」に、旅順要塞司令官のステッセル將軍が乃木希典將軍に、自分の愛馬を贈った一節がある。「水師營の会見」の七番に「兩將^{ひるげ}昼食共にして、なおも尽きせぬ物語、我に愛する良馬あり、今日の記念に献ずべし」。八番は、「厚意謝するに余りあり、軍のおきてにしたがいて、他日我が手に受領せば、ながくいたわり養わん」。

この歌は、明治三十八年旅順水師營会見で、ロシアのステッセル將軍が乃木將軍の恩情に感激して、アラビア産のサラブレッド、八歳牡の愛馬を贈られた情景が歌われている。

乃木さんの名馬^{すこう}壽号の終焉の地と里人はいまでも護りて—短歌会会員 岩本洋子

(山口県 乃木神社 宮司)

子育ては親育てから

石塚 智康

何のために子育てをするのか

一 子どもは誰のものか

子どもは「祖先のもの、祖先からの授かりもの、日本の社会のもの」

二 何のために子どもを育てるのか

子育ては、文化を伝承する日本の民族、日本の国を維持し守るため

三 どんな大人になってほしいのか

心やさしく、法を守り、広く世界中の人々と手をつなぎ、日本の国を守ってくれる人になってほしい

この三つが考えられると思います。

ただ漠然と子育てをしていれば、育った子どもは「自分は何のために生きているのか、どんな大人になったら良いのか」など大事な人生目標を見出せなくなる。そうならないた

めには、親が自分の人生観を形づくって、子どもに夢を託す努力が大切ではないでしょうか。

これから自分が保育現場にいて感じていたことを元にお話をします。

○親としての役不足

例えば自分の子どもの「おむつ」の始末が出来ない親がいます。

朝、子どもを連れて来ても玄関でちよいと渡して慌てて出てしまう。それも何も言わないで。「出物がしていますけど、今時間が無いので」と一言断れば良いものを、これでは親として少しお粗末過ぎやしないかと思っています。

○次に睡眠を充分に摂らせてほしいと思っています。

子どもたちの「夜更かし」は世界的に見ても異常だと言われています。この状況を親はもつと真剣に考えて欲しい。「夜更かし」は学力や気力の低下、肥満の原因にもなる事をよく解かって欲しいと思います。小児科のお医者さんの話では、一〜二歳児は一〇時間の睡眠時間が必要で、小学生になれば八時間は寝させて欲しいと指導を受けています。

私も時々夜間にスーパールに行きますが、園児とか小中学生を連れて買い物をしている光景をまま見かけます。これでは早く寝ることは無理です。という事はお父さんお母さんの

就寝時間が遅く、子どもの睡眠時間も短くなってしまいます。

親たちの生活が夜型になるに連れて、子どもたちの「夜更かし」が増えています。これは親が子どもを早く寝かせる嫌をつけていないからです。早く寝かせるようにと指導すると、「うちの子は夜型で寝ないのです」と答えが返ってきます。それは家庭で寝られる環境を作ってやらないからです。少なくとも寝る半時間前にはカーテンを引いて、テレビを切って電灯を暗くして寝られる環境設定をしてやることです。

そうすれば昼間の体を動かした分、心地よい睡眠に入ります。たっぷり寝た分、朝は自然に目が覚めます。そういう体内時計を持ち合わせています。夜更かしは睡眠不足と慢性的な時差ボケ状態を作り出し、生活リズムを狂わせる。このことは集中力の低下、昼間の運動不足、肥満の原因になります。子どもの睡眠に大切なのは、生活上の昼と夜のメリハリをつける事です。

寝不足のままで、保育園・学校に来てもぼーとしている子どもがいます。それは大人の職場や勤務先でも気が入らない、ミスが発生し易いことと同じです。

○早寝早起きをする五カ条

一 朝起きたら太陽の光をたっぷり浴びること、睡眠と関係のあるホルモンは光に左右

され目覚めるからです

二 昼間は太陽の下で体を動かす

三 夜は明る過ぎる所へは行かない

四 夜食はとらない

五 朝は必ず食べる

○次に朝食について

夜が遅いから従って朝が起きられない。でも親は勤めに遅れるから何とか起きる。しかし朝は忙しい。朝ごはんを作るのが面倒。なるべく簡単に済まそうとする。ここで子どもが犠牲になる。中には朝抜きで連れて来られる子どももいます。「握り飯」を一つ二つでも良いから持たせてくださいと言ったこともありました。

母親は化粧をしつかりと美しく良い香りで飾っておられます。職場での顔が必要でしょうから。朝忙しく家族皆揃って一緒に朝食に座る事は無理だと解かります。では少しでも軽減する方法として、夫婦協力準備して、例えばお父さんは味噌汁を作るとか、お茶碗にご飯をよそうとか、或いは祖父母さんに手伝ってもらうとか、工夫して朝食をしつかりと腹いっぱい食べて、保育園・学校や職場に出かけて欲しい。朝食は一日の始まりです。こ

の朝食が抜けると、今に言うところの「キレル」もとです。それは食べていないから、体力精神力の持続時間が持たない。イライラする。非行の因子になる。

婦人警察官の話ですと、青少年補導した約七割近くが朝抜きであるとの結果にびつくりしました。この事から如何に朝食が一日の活力を生み出す源であるかと言う事が解かります。朝食は腹いっぱいとして一日が始まります。

○その次に大事なことは「あいさつ」が出来ることです。

最低限、朝の「おはようございます」、「こんにちば」、「こんばんは」、「おやすみなさい」のあいさつは言い合える事が必要です。親が急に子どもに言え言えと強制しても子どもは中々言えません。親が家庭で皆であいさつする癖を付けなければいけません。初めは恥かしいかもしれないが慣れれば当たり前です。因みに私の家では、息子と九十歳過ぎた母の三人です。朝食事の用意をしていると「おはよう」と言つて息子が出て来ます。用意が出来たら母が出て来ます。「おはようございます、ありがとうございます、今日もよろしく頼みます」とあいさつをします。皆揃つて食前感謝のことは「天地の神と祖先のご恩とに感謝していただきます」と唱え、一拝一拍手して食べます。終われば「満ち足りてまた新しき力を得ましたごちそうさま」と唱え、一拝一拍手して終わります。ここから一日が始ま

ります。夜は食事が終われば、母は「今日もお世話になりました、ありがとうございますございました」と礼を言つて部屋に入ります。息子とは時々晩酌をしながら話し合つたりします。洗物が終わればお互いに「おやすみ」とあいさつして部屋に引き上げます。これは息子が生まれるずっと前から夫婦で挨拶をしていましたから、息子も自然にそんなものと思つて習慣になつていきます。多くの家庭で子どもが小さいときから挨拶をする習慣を身に付けて欲しいものです。それには先ず親が率先してあいさつする姿を家庭内で実践して見せて欲しいものです。

挨拶を交わす事で親兄弟、周囲の多くの人々に対する感謝の心を表す事が出来ます。そこで「ありがとう」という感謝の言葉が素直に言える家庭を、育てる努力をする必要がありますと思います。

子どもは年齢が大きくなるに連れて、ややもすると自分が一人で大きくなったような錯覚になつて、とんでもない事をしでかすことがあります。それは自分は社会の大勢の人々の中で生かされているのだという觀念が無いからです。挨拶をして人と言葉を交わす事で感謝の心が生まれるのだと思います。その意味からして親には教育者としての役割があると思います。

私たちがずっと培ってきた日本の心は、石ころ一つに、草木の一本にも神が宿るという大いなるものへの感謝の心です。

今の時代、自然の中でおおらかに子どもを遊ばせ、「自然の神秘や命の尊厳、生かさせてもらっている有り難さ」を経験させることは難しくなっています。尚更に親の賢さ明るさ、社会の中での自覚が大切になっています。

人生の最大の素晴らしい大事業は子育てです。

いかなる経験にもまして親となることは人間を成長させます。我が子のおかげで一切の報いを求めない無償の「愛」を注ぐことが子育てで体験できるからです。親は大いなる生命を授かり育てさせていただくという謙虚な気持ちで、赤ちゃんに愛情いっぱい語りかけと微笑みをかける。母親の乳首に吸いつきお乳を飲む。そしてしっかりと抱くことが大切です。それが赤ちゃんにとって心と体の最高の栄養だからです。よく抱き癖がつくと言われますが、むしろ小さい時の「母子一体感」を育むには抱き癖が必要だと思います。

今日は「親としての役割」「睡眠時間を充分とること」「朝食を腹いっぱい食べること」「あいさつを交わして感謝の心を養うこと」等をお話しました。

子育てに対する親の力が希薄になってきた現在、子育てとは 親になることとはどうい

うことなのかを問い直し自覚して、気構えをしつかり持って、子育てに喜び勤しんで欲しいと思います。

そういう親を育てること、手助けすること、私たち神職の努めの一つにあるような気がしています。ありがとうございます。

(鳥取県 山根神社 宮司)

万歳

原 茂 子

皆さんは、「万歳」という二文字にどんなことを思い出されますか。

子どもの頃は、運動会で一等になった時や、スポーツの試合で優勝した時に「万歳 万歳」と大喜びしたでしょう。選挙で当選した人やその支援者の人達が万歳をする映像を思い出された方もいらっしゃるでしょう。私は「万歳」と声高らかに唱和する場に居合わせたときには、いつも、六十年前の出来事を昨日のことにように思い出します。

私は昭和十四年の生まれで、戦争が終わった翌年の春に小学校に入学いたしました。食べ物や着る物も充分でない時代でしたので、若い人には信じられないと思いますが、ランドセルは、ボール紙で作られたものでしたし、下駄履きで通学、上履きはわら草履でした。それでも田舎のことで幼稚園が無かったこともあり、初めての集団生活はとても楽しい日々でした。二年生になった初夏のある日、母が「今日は学校へこれ着て行きや」と、白いまっさらのセーラー衿の洋服を出してくれました。（今日は、お盆でもお正月でもない

のに・・・)でも心はうきうきしていました。全校生徒が二キロメートル程離れた大阪市と和歌山市を結ぶ当時の国道二十六号線まで歩きました。広い広い道路でした。歩道に腰を下ろして永い永い時間待ちました。それはそれは退屈で、今でも(随分待ったなあ・・・)と思い出します。なぜここに居るのかも解らずにじっと待ちました。

急にあたりがざわめいて「もうすぐだ」との声がして、車の列がゆつくりと、私の前を通り過ぎようとしたその時、突然「天皇陛下万歳　ばんざーい　万歳」と声高らかに叫んだのです。私はびっくりして振り返って後ろに並んでいた大人たちの様子を見ている間に、車は通り過ぎてしまいました。お通りになられたのは昭和天皇さまだったのです。家に帰って、一番大事な時に後ろを向いていたことを告げた私に、母が「そう残念やったね。日本で一番偉い天皇さまが、皆に(頑張れよ・頑張ってくれよ)と励ますためにおいでくださった。」と教えてくれました。あんなに熱い思いを込めた万歳の声は、小学生の私の心に強く焼きついて離れません。その思いは、あの場に集まった皆も同じだったと思います。

「いつの日か、天皇さまの前で、今度はしっかりと万歳をしたい」と思い続けておりましたが、丁度二十五年後の昭和四十七年に皇居清掃奉仕団の一員として白い割烹着とズボンで参加させていただき、昭和天皇さまからお言葉をいただきました。今日ではテレビなど

で天皇陛下・皇后陛下のお声をお聴きすることが度々ありますが当時はまだまだ、特に皇后さまのお声を拝することはありませんでした。鈴を転がしたような、清々しい透きとおったお声で「身体を大切に……世の中のためにお役に立つよう励まれますよう……」とにこやかに仰せになられました。私たちの健康を先ず気遣い、世のために尽くすようにとのお心に、奉仕団一同涙して「天皇陛下 皇后陛下 万歳 万歳 万歳」と唱和したことが二度目の心に残る万歳でございます。

私達は今日、平和で豊かな国・日本で安心して生活させていただけるのは、日本国民の親として昭和天皇さまが、我が身はいかになろうとも……の真心で、国民を救ってくださった貴い犠牲があつたことを忘れてはなりません。

平成十九年を迎えて、昭和天皇さまをお偲びする四月二十九日は、初めて『昭和の日』となり、記念式典が行われました。新聞紙上に

昭和の日の宣言では【昭和天皇をお忍びするとともに、民族の悲境をみごとに乗り越えた『昭和』への思いを、次代に正しく受け継いでいくことを誓う】ことを採択し聖寿の万歳がおこなわれた。

と記されてありました。

昭和天皇がお隠れになられ、『平成』と元号が改められ、皇太子さまが天皇としてご即位なさる日を、私達はどのようにお祝いすれば良いのだろう。「昭和天皇さまの折には、提灯行列をして祝った」とお年寄が話してくれましたが、何か出来ないかと心を痛めました。

幸いにも、岸和田は秋祭りにだんぢりを曳いて氏神さまに宮入りいたしますので、その四十余日後の十一月二十三日の大嘗祭にも、地元の三つの町だけでも奉祝のだんぢり曳行を・・・と宮司がお願いしましたら、十一町の氏子地域の全ての賛同をいただき、警察署も快くだんぢりの通行許可をだしてくれました。当日まで、不穏な動きがあるとのこと、宮司の夫と禰宜の息子は宵と明け方の交代で夜警の日が続きましたが、何事も無く晴れ上がった秋空のもと、前には二本の日の丸を掲げ、後ろには、「天皇さまのお祭り大嘗祭」と大きく書いた幟を二本立てた秋祭りの飾りつけと違っただんぢりの宮入りです。特別なおまつりだから、一人のけが人も出してはいけなとの気遣いから、やりまわし等の勇壮な曳行は自粛し、ゆっくりとした、老いも若きも心一つにした天皇さまのおまつりを斎行できました。日本人の心を・日本人の誇りをどこかに置き忘れてしまったのでは・・・との思いが杞憂になりました。小さな灯を点せば大きな赤い真心が燃え上がると

そのとき感動いたしました。

あの日の写真を一枚持って参りました。だんぢりの前でにこにこ笑っておられるおばあちゃまは、十代から九十代まで全国津々浦々へ神様のお話をして巡られた、今は亡き佐古幸嬰先生です。大嘗祭の前日からお越しくださり、氏子の皆様に「こんなにすばらしいお祝いをする氏子さまを神様がご覧になられ、さぞおよろこびでございましょう」と労ってくださいました。毎年十二月のお宮での講演に必ず御皇室のお話もしてくださいました。そして最後はいつもこの様に話を結ばれます。私が佐古先生のおことばを真似るのはおこがましいことですが、この写真の先生の笑顔と、今日の演題に免じてお許しください。

「幸いにも、ここに主催者のご配慮で国旗を掲げて下さっております。今日ここにお集まり下さり、私とご縁を結んでいただきました皆様とご一緒に、白地に赤き日の丸を透して、はるか遠く東京の地の天皇陛下に届けよと皆様お一人お一人が十人分の真心を捧げて御一緒に、国歌君が代をご唱和下さい」

君が代は 千代に八千代に さざれ石の

巖となりて 苔のむすまで

神さまの音楽

山下 裕嗣

私は石川県神社庁の雅楽講師をさせて頂いておりますが、今回「神さまの音楽」という事について少しお話させて頂こうと思います。

神社の祭典には雅楽が演奏されます。雅楽と言われるものは、遠く紀元前にペルシャやインドで発祥し、唐や高句麗より伝えられた音楽や舞が我が国で定着し、神事などと共に今も変わる事無く伝承されているわが国最古の音楽で、舞を伴う舞楽、そして演奏だけの管弦があります。伊勢の神宮や熱田神宮、厳島神社や春日大社などでは、御祭神の御霊和めの神事として、また神賑いの行事として、舞楽神事が執り行われております。他にも多くの神社で雅楽会が組織されて、神社の祭典には無くてはならない神さまの音楽となっておりま^{くにふりのうたまい}す。またこの舞楽や管弦の外にも日本古来の歌や舞に由来する国風歌舞や、奈良・平安の貴族が和漢の詩に節を付けた催馬^{さいば}楽や朗詠も雅楽に含まれます。今に伝えられます雅楽は、大陸伝来のものや我が国古来からの音楽が、未来永劫に変わることの無い神様の

信仰と共に、一四〇〇年前から続いている世界最古の音楽です。

少しお話はそれますが、身近に雅楽に由来する言葉がたくさんありますのでご紹介したいと思います。先ほどもお話しましたが、演奏のみの雅楽は管弦と言います。明治時代にオーケストラがこの日本に入ってきた時、これを訳する言葉として雅楽の管弦が当てられ管弦楽と言うようになりました。他にも色々な言葉が雅楽に由来しております。それでは雅楽の言葉で一つの事がまとまって行くという様子をお話しにしましょう。

先ず「音頭を取る」何か物事を始めようとした時には誰かが先頭に立って進めていかなければなりません。この事を音頭を取ると言います。雅楽の演奏を始める際に、笛の奏者のうち一人だけが先立って独奏をします。この奏者を音頭といい、その事から物事の初めに先導して導く事を音頭を取ると言います。では、音頭が取られていよいよ事が始まりますと「打合せ」をする事になります。物事がうまく運ぶように事前に相談することを打合せると言います。これは雅楽の合奏の時、打楽器を打ってテンポ決めながら、他の楽器とうまく合わせる事を打ち合わせると言っていたことから生まれた言葉です。打合せが進みますと、いい「あんばい」にそれぞれが「調子を合わせて」行かなければなりません。中にはお酒の席もあって「呂律が回らなく」なったり、「やほ」な事を言う人も出てきたり、

前に失敗した過ちを繰り返して「二の舞を踏んだ」りとなかなかまとまらないものです。そこで音頭を取った人が、そろそろ「打ち止め」にしようと言をまとめて事が収まります。今のお話の中の「あんばい」「調子を合わせる」「呂律が回らない」「やほ」「二の舞を踏む」「打ち止め」これらは全て雅楽に由来する言葉です。今日は時間の都合で一々ご紹介は出来ませんが、この外にも多くの言葉が雅楽に由来しております。

さて、お話を神さまの音楽に戻して進めて参りたいと思います。雅楽のような全国的な統一された音楽ではなくても、各地の神社には神楽が奉納されていると思います。石見神楽や備中神楽のように多くの人数で大規模なものから、笛と太鼓あるいは太鼓だけのものもあるようです。またこれらには舞いが舞われる事も多いようです。各地には色々な形態での神楽が奉納されているようですが、神楽の起源は神話にまで遡ります。『古事記』『日本書紀』にアマテラスオオミカミの岩戸がくれや、それに続く天の岩戸開きの神話がありますが、その中に神楽の起源を見る事ができます。

アマテラスオオミカミの弟神スサノオノミコトは田畑を荒らし、建物を壊し、挙句の果てにははた織りの娘を死なせてしまいます。この事に姉のアマテラスオオミカミは天の岩戸に閉じ籠ってしまい、日の大神さまが岩戸に籠もられた事で、世の中が暗闇になり悪い

事が次々と起こるようになります。残された神さま達は天の安河原で会議をし、アマテラスオオミカミが岩戸から出て来られるよう祭を行うことになります。それは、天の岩戸の前でニワトリを鳴かせ、アマノフトダマノミコトが鏡の付いた櫛を捧げ持ち、アメノコヤネノミコトが祝詞を奏上し、アメノウズメノミコトが神がかりして楽しく舞い踊るというものです。衣もはだけて舞い踊る姿に、集まった八百万の神々たちは共々に大笑いします。すると、岩戸に籠もったアマテラスオオミカミが、外の様子を見ようと岩戸をすかし、アメノウズメノミコトの導きとアメノタジカラオノミコトの力によってアマテラスオオミカミが再び姿を現し、世の中に明るさが戻った。という神話の中でのアメノウズメノミコトの舞い踊りが神楽の起源と言われます。

神さまの音楽の起源は神さまに喜んで頂いて、世の中が明るくなるよう祈願を籠められたものです。その心は今も変わることは無いはずです。笛にせよ太鼓にせよ歌にせよ神楽にせよ雅楽にせよ、心を籠めて奉納することがご神意に叶うものであると思います。神さまの音楽は神さまへの音楽であり、演奏する者、演じる者が心を籠めてご奉仕をすることにより神様の御心が鎮まり、ご神意が発揚されるものです。昔も今の時代も後の時代も変わる事無く伝え、新たな音楽が加わっても、古来からの音楽と共にその心を受け継ぎ伝え、

神社に神事に神賑わいに音楽を奏でて行きたいものです。

(石川県 白山神社 榎宜)

神宮式年遷宮・・・何で俺たちが

田代壽興

式年遷宮と申しますと、二〇年も前の話で恐縮ですが、昭和六二年一月イタリアのミラノの大聖堂を訪れた時、日本と西欧の文化の違いを強烈に印象づけられたことを今でも思い起こします。

ミラノの大聖堂はご承知の通り、ゴシック建築の最高傑作といわれているもので、壮大・華麗な建物です。内部の奥行き一五八メートル、幅九三メートル、柱は太いもので直径約二・五メートル、四万人も収容可能といわれています。外観は一三五の尖塔（尖った塔）が林立し、その尖塔の天辺には一つ一つに聖人が立っていて、「一歩でも天に近づく」というゴシック建築の理想を表しているそうです。高さは一〇八、五メートル、彫像の数三五〇〇体。

この聖堂は、一三八六年に最初の石が置かれ、約五〇〇年後の一八一三年に多くの芸術家によって完成されたといわれています。その壮大さ、華麗さに感動いたしました。これ

が西欧人の神さまに対する心の表し方なのだと思います。まさに石の文化です。

ところがしばらくして案内の人が、それでは屋根に上がりましょうというのです。ついに行くとい細い石段をかなり登り、屋上に出ました。彫像と尖塔の林立、周りを見渡すと石造りの大きな建物、ドウオーモの広大な広場、全て石造りで自然は見えません。その壮大さに圧倒されましたが、屋根の下には神聖な祭壇があり、その上に今我々はいる、しかも土足で、と考えると、日本では考えられない光景に、神宮の式年遷宮のことがすぐに思い浮かびました。全く違った文化が日本にはある、西欧を石の文化とすれば、日本のそれは木の文化だ、と直感したのです。

このような話を生徒にしましたところ、式年遷宮とは何ですか、と質問をされました。式年とは、定められた年という意味で、伊勢神宮では二〇年に一度と決められている。

遷宮とは、宮が移ること、またはお宮を移すこと。お宮には神様がおられるので、神様のお引越しと言ってもよいでしょうと答えておりました。二〇年に一度神様に新しい神殿に移っていただく、また御装束や神宝も新しいものを身につけていただくというのが式年遷宮なのだと説明をいたしました。

さて、昔話はこれくらいにしまして、この制度を定められたのは、天武天皇で、第一回

目の遷宮が行われたのが持統天皇の御代、六九〇年頃だそうです。飛鳥時代、六〇七年には法隆寺が建立されました。六八〇年には、薬師寺の建立が発願されていました。現在までその姿をとどめる建物を作る技術がその当時あったのに、何故二〇年に一度の作り替えを天武天皇は選ばれたのでしょうか。大きな謎です。之が日本の文化の核心ではないかとも思います。

ところが之に対する答えは何にも記録されていないそうです。

平安時代初期に書き記された文献の『皇大神宮儀式帳』及び『延喜式』によると五つほどの理由が記されています。

①檜の素木造り茅葺き屋根の御社殿を常に清々しく保つための耐久限度による尊厳保持説。

②宮大工、工匠などの次世代への伝統継承の最も適当な区切りである世代技術伝承説。

③古来我が国では二〇が満数で整数と見なされ、再び始めに復するとする満数整数説。

④旧暦の二〇年に一度重なる「朔旦冬至」思想による暦法に基づいた原点^{はじ}回帰説。

⑤式年遷宮費用としての神税と国税との貯蔵年限を根拠とする糲^{ほし}飯（乾飯）有効期限説。

が挙げられているようですが、要は二〇年に一度新しくすることは、常に若々しくあれ、

という「常若」の理想に繋がってゆくものと思います。御神殿を始め、御装束御神宝に至るまで全てを新しく造り替えて、大御神様にお移りいただき、神様ご自身もまた若返り、新たな御光を我々にお与えくださるよう、と祈る心がこの遷宮を一三〇〇年も続けさせてきたのだと思います。

一三〇〇年前の先祖の心、六一回も遷宮を続けてこられた親親達の心、世界に例のない遷宮の心を、私たちも受け継ぎ、また次の世代に引き継いでゆきたいものだと思います。

ギリシャのパルテノン神殿も、エジプトのスフィンクスも今は形だけの遺跡となつてしまいました。

しかし私たちの伊勢神宮は、今も一三〇〇年前と全く同じような神殿があり、同じような祭祀が厳修されていることを誇りにして良いと思います。自然と調和した伊勢神宮は永遠に日本の心を現しているのです。常に若々しくありたい、神様も人も元気でありたい。神殿を造り替え続けてゆくことで「悠久」を目指したのだと思います。

このため「皇家第一の重事、神宮無双の大宮」として、時の政府、時には幕府であり、時には朝廷であり、近代政府でありましたが、国を挙げてこれを実現して参りました。

しかし、戦後は国家を離れ、我々国民の総奉賛によって、これを実現させて参りました。

今回はその第六二回目、一三〇〇年の歴史の灯を我々の世代で消してはならないと思います。

(熊本県 牛深八幡宮 宮司)

みたまをいだきて

佐々木 美津子

戦にやぶれしあとの いまもなお 民のよりきて ここに草とる

昭和天皇様四十五歳、昭和二十年、終戦を迎えた年におつくりになられました大御歌です。

昭和十六年十二月、日本陸軍のマレーシア半島上陸、日本海軍のハワイ空襲ではじまった大東亜戦争。諸戦は勝ち進んだ日本は戦線の拡大に伴い、物量に勝る米軍に苦戦、昭和十九年サイパン島が、そして二十年激戦の末沖縄が陥落、八月には広島、長崎に原爆が投下され、ポツダム宣言を受けいれ降伏した日本は、昭和二十年八月十五日終戦を迎えたのです。

この日から六十余年の歳月が流れました。

岩手県は、このたび神社庁六十周年記念事業の一環として、去る平成十八年十月、沖縄慰霊の旅を行いました。沖縄県糸満市の沖縄戦跡国定公園摩文仁の丘「岩手の塔」には、

三万四千百六十柱の県内出身戦没者が祀られております。岩手の塔の前に祭場を鋪設し、岩手県神社庁西館庁長を斎主に、南の島、太陽の輝く青空のもとで厳かに斎行されました。伶人の奏でる龍笛の音が、遠く彼方でねむる人々の声のようでもあり、又こちらから響け、届けと言わんばかりの声にも聞え、激戦地サイパン島で散ったまだ見ぬ父の顔、そして海に沈んだであろう父の姿が目に見え、涙が止まることなく流れ落ちました。昇魂の時には、岩手の塔の上を飛行機が飛び、更にその想いが強く祭儀の終りには、あの輝く青空が急に曇り、ポツリ／＼と雨が降り、戦いで亡くなられた人々の涙にも思え、参列者一同涙の慰霊祭。父の好きだったタバコ、そして地もとの日本酒「すいせん」を御神前におそなえし、全国からそして岩手県から故郷や家族、同胞に思いをよせ、祖国を愛しながら戦争でなくなられた英霊に慰霊の誠を捧げることが出来ました。

バスガイドさんのひめゆり隊をはじめとする激戦地沖縄の悲劇の話に涙し、丘の上、木陰に建立されている慰霊塔を目のあたりにし、戦火に逃げまどう島の人々、米兵と戦う日本兵の姿が目に見え、消えまた浮び、戦後六十余年の歳月を経て、今なお残る戦争の傷跡、戦争の悲劇、平和の大切さ、戦争でなくなられた多くの人々を、私達は決してわすれてはいけません。そして、今日の日本があることも……。

今年も又、八月十五日終戦記念日が近づいてまいりました。この日が近づくと、テレビ局や新聞社が「靖国神社」をめぐるニュースをとりあげます。首相の参拝がどうの、閣僚の参拝の是非がどうのと、又その参拝に対して中国、韓国の反応までを。

故郷を離れ、老いた母、愛する妻や子を残し、志なかばにして戦地におもむいた戦没者の多くは、自分の母や妻、家族に、自分が戦死した時には、靖国神社に逢いに来てほしいと言ひ残し、戦友には、靖国神社で逢おうと再会を約束して亡くなられています。

現在靖国神社の御祭神は、二百四十六万六千五百三十二柱が祀られ、その中にまだ見ぬ私の父、おじも含まれております。どうか多くの諸問題が残されているとは思いますが、戦没者慰霊の中心である靖国神社へ、安倍首相はじめ政府関係者の皆様が毅然とした態度で参拝なさいますことを心からお願い申し上げる次第です。

私は、毎年五月三日に行われる岩手護国神社慰霊大祭に奉仕しております。子供に手をひかれ参列される戦没者の妻に逢うことがなくなりました。参列している多くの人は遺児となり、その遺児の方々も白髪の新老となり、孫の代になりつつあります。

五月の岩手護国神社は、桜が美しく咲きます。

貴様とおれとは 同期の桜 同じこずえの枝に咲く・・・

とうたいながら異国の地で散ったであろう多くの英霊に安らかに鎮まり給えと、沖縄の海の向こうの亡き父の魂をいただき生きている一人の遺児として、静かに手をあわせる私です。

もう一つ願いがあります。それは、南の島をはじめ異国の地に散ったまま、まだ帰らぬ人々の御遺骨を、美しく生まれ変わった日本の国へ連れて来たいのです。きっとその願いがかなうまで……。

出撃の 父は帰らず ふるさとに 植えしリンゴは 今年も実り

(岩手県 天照御祖神社 宮司)

神慮の有難さ

川 崎 太久美

神社にやって来る子どもたちの中で、ときどき口にする言葉があります。それは、「神様は本当にいるの？ いるのだったら見せて」という問いかけであります。

今の子どもたちは、科学万能主義の旗印のもとで教育を受けながら育っております。そのため、実際に証明できなければ納得しないという実証主義者であります。また、それと同時に、一方においては個人主義の名のもとに人間万能主義の教育を受けておりますので、この世の中はすべて人間関係の中の個人が支配権を持っているという考え方に立っております。を見ております。プライバシーの云々という言い方はその考え方にもとづいた表現なのです。したがって、自分の目や耳で直接見たり、聞いたりすることができないものは、この世の中には存在しない。例え存在したとしても自分にとっては価値のないものとして判断を下してしまうのです。

そういうことが基本にあつて、神社にやって来た子どもが「本当に神様はいるのか。い

たら見せて」という言葉を投げかけてくるのだろうと思います。

私は以前にこんな話を聞いたことがあります。それは、「神様は本当にいますか。いたら見せて欲しい」という問いかけに、「そうか、それでは見せてあげよう。その代わりあなたが今まで生きて来た過去の時間や出来事を手のひらの上に載せて私に見せなさい。そしていつでも神様をお見せしよう」という話でした。

そこで私は、神様は本当にいらつしやいます。神様はすべてをよく見ていらつしやるし、よく聞いていらつしやる。神様のお蔭で——という話を、私の体験談として二つほどお話ししたいと存じます。

その一つは、ちょうど今から三年ほど前のことですが、御神殿の中の神様がお座りなさっている内陣が、どうにも感心できない状態であったがために、大祭のたびごとに御祭神様には大変申し訳ない気がしておりました。何とか早く改築して、立派な納得のいく内陣に造り直したいと思い、総代会に諮ったところ、了解を得ましたので、早速工事に取っかかり、春の例大祭には遷座祭も済ませて完成をいたしました。するとどうでしょう。それまで一度たりとも入って来たことがなかった雀が、内陣が完成したその翌日から、毎日毎日拝殿の奥に掛けている掛稲の粃を食べにやって来るではありませんか。そして粃殻や羽

根毛を散らして帰って行くのです。粃殻を散らすのは掃けば済むことですが、困ったことには、帰り際に賽銭箱の上に止まって雀特有の白い糞をして行くのです。大正時代の木製の賽銭箱ですから雀の糞を拭き取るのは大変です。そこで、私は掛稲を社務所に持って行きました。ところが、今まで全然来なかった雀が、神殿の改造と同時に毎日粃を食べにやって来るのはどう考えてもおかしい。もしかしたら神様が内陣の完成祝いに雀を呼び寄せていらつしやるのかも知れないという気がして来たので、掛稲を元の所に戻しました。するとまた前と同じように雀は毎日やって来るのです。

四ヶ月ぐらい経った八月半ばの月次祭の掃除のときに賽銭箱の上を拭きながら、「神様、お祝のお気持は良く判りますが、賽銭箱の上の雀の糞は浸み込んでなかなか取れません。どうか、この辺りで雀をお呼びなさるのはご勘弁いただけませんか」と独り言を言ったのです。するとどうです。不思議としか言いようがないほど、翌日からびたと雀は姿を見せなくなり、その後は一切やって来ません。

このことからもお判りいただけると思いますが、神様は些細なことでもよく聞いていらつしやいます。皆様が御神前で願いごとを唱え、心の中に思っていることは、ちゃんと聞いていらつしやるし、お見通しなさっていらつしやいます。私が奏上する祝詞の中の一つ

一つもちゃんとお聞きなさっているのです。

二つ目は今年の四月七日のことになります。その日は社務所建設の地鎮祭を済ませて、昼食に間にあうように急いで帰り仕度をしておりますと、前の総代会長さんが、「孫娘がよく神社にお世話になっているので、私の娘が社務所建築の寄附金をことづけました」といつて持つて見えました。早速御神前に奉ったあと、寄附金の入ったのし袋を外回廊の賽銭箱の横に置いたまま、先を急ぐのあまり、うっかり忘れて帰っていたのです。夕方近くになって、神様から「お前は寄附金を賽銭箱の横に忘れたままにしているぞ」というお達しがあったのです。「えっ」と思って、装束の入った風呂敷包の中や白衣の袖を探しても見つかりません。「やつぱりそうか」と思って、にわかに車に乗り込み神社へ向いました。途中の車の中で中身の金額まで告げられましたが、はたしてそこにあるだろうかと気が気でありません。やつとの思いで神社に着き、一目散に拝殿へ駆け寄りました。すると、ちゃんとそこに元のままあったのです。こんなに嬉しいことは今までかつてありません。間髪を入れず御神前に進み、額ずきながら、感涙にむせんで、「神様ありがとうございます。神様のお蔭で無事でございました。神様本当によくぞお守り下さいました」と何度も何度もお礼の言葉を申しのべました。寄附の中身も神様のご指示通りでした。

神様はいらっしゃいます。そしてちゃんと聞いていらっしゃるし、ちゃんと見ていらっしゃいます。また、いつもお恵みくださっているし、いつもお守りくださっていらっしゃいます。本当に有難いことです。神様本当に有難うございます。

(佐賀県 福富神社 宮司)

身はいかになろうとも

木下 鉄二

平成十九年も半ば過ぎようとしています。半年後は平成二十年、奉祝大会も種々企画されると思いますが、反面「昭和は遠くなりにつけり」の声も聴えてきそうで、何だか寂しい思いも致します。

人類史上、昭和史ほど「激動」の時代が他にあったでしょうか。全く稀有の事といえなくもありません。

日本人の天皇さまに対する尊崇の念は、二千余年の我国の歴史の中で培われ、国土全域に水脈が互いに結び付いています。それが互いにある時は沸騰することはあっても、常に田畠を潤すように、日本人の命の源となっているのです。

その百二十五代の歴代天皇の内で「昭和の日」が制定された意義は大きいものがあります。四月二十九日には、全国の軒毎に国旗がひるがえらると思うと大きな喜びと感動が沸き上がって来ます。

さて、昭和天皇の御幼少頃をしのびつつ、陛下の偉大な御功績一、二について述べさせて頂きます。

明治三十四年御誕生、みちのみやひろひと 迪宮裕仁親王と申し上げます。

裕仁親王は、一口でいえばあまり御器用ではなかったそうです。口にするのはばかられますが、工作・習字・作文等の成績はあまりよくなかったそうです。なんとなく昭和天皇さまはそうだったでしょうと、頷きたくなります。しかし特筆すべき特技をお持ちでした。何かの本で読み記憶しているのみで、出典を明らかに出来ぬところはお許し下さい。その特技は何だと思われますか？

それは、ナント「浮き身」の技なのです。

水泳の指導教官が驚嘆のあまり「ウーン」と云ったきり声が出なかったというのです。手を取り足を持って浮き身を指導したわけでないのに見事に完全な浮き身をマスター出来たのです。

運動神経もすぐれていらつしやらない、どちらかといえば、不器用だそうです。

しかし全ての事に懸命に取り組み練習なさるお姿には、東宮にお仕えする多くの人々が認めるところです。

しかし、皇太子時代の浮き身を見た人は、その水面にきれいに顔から足先まで二分され、体の一部だけが沈んだり、浮き出ているところはないわけです。

何故そのように、見事に出来るのか、——無我の境地なのか、精神統一の結果なのか、武道の達人とは絶対違う。では何故？

昭和天皇の御生涯の中で、陛下でなければ下せない決断の時、絶対絶命の窮地に立ち、陛下御一人に日本国の行く末を託したその時、きれいに水面に浮かんで動じない、それは陛下の自己規制の極地と相通じるのではないか。

徹底的に自我を削ぎ落して行くと、犠牲の精神が光を放って一段と輝くのでしょうか。

こゝで江戸末期の随一の剣客と称えられた千葉周作の話を見せて頂きます。

幕末のころ、土佐の土方ひじかたなにがしというお茶坊主がいたそうです。彼は茶道の奥義に達し、殿様は彼のお手前のお茶でないと飲まない程だったのです。参勤交代で江戸へ行くとき、どうしても連れて行きたいが、茶坊主の身分ではそうもいかないのです。一計を案じ、彼を士分に取り立て連れて行つた。ただこの「お茶坊主武士」は、剣の達人が見れば一目で「偽者」と分かる。第一歩き方が違うし、身のこなしも全く違う。ところが、ある日、

江戸城の近くで、見知らぬ武士に「真劍勝負」を挑まれたのです。

驚いたのは茶坊主です。そもそも刀など抜いたこともない。しかし茶道の奥を極めた人物です。「主命を奉じて使用する途中、されば主命を果した後、勝負しよう。一刻の猶豫を願ひ度い」と静かに答えて、その場を離れた。

そしてどうしたか、その足で劍聖といわれた北辰一刀流の開祖、千葉周作の道場へ向つたのです。

無理に面会を申し入れ、事情を話し、次の様な願いを言上したのです。

「さてお恥ずかしきなれども、われいまだ劍法を知らず。とにもかくにも討たれて死すべき覚悟はしつれど、未練なる死に様にして恥を残し、主名を汚すを恐る。ゆえに來たりて先生に見え、見苦しからぬ死をなす方法を問わんとす。願わくば、先生これを教えたまえ」

驚いたのは千葉周作である。

人に勝つ方法は教えてきたが、如何に死すべきかを教えたことはない。

こゝで周作は、茶を一服所望する。土方は悠々と茶を点^たてる。それは到底、目前に死を覚悟した人間とは思えない。

そこで周作は、はじめて口を開き、「よし、御身のために話をしよう。御身心して良く聞けよ。彼の武士と相對して互いに一刀を抜くや否や、御身は直ちに右足を踏み出して力を込め、大上段に振りかぶりて両眼を閉ずべし。いかなる事ありとも、その眼を開くこと有るべからず。ややありて、腕か頭か冷やりと感ずるであらう。これ切られたるなり。その刹那、御身、力の限り切りおろすべし。敵も必ず傷つき、あるいは相打ちになるやも知れず。この事、決して背いてはならぬ」

土方は厚く礼を述べ、果し合いにのぞむ。落ち着き払って、一刀を抜き、大上段に振りかぶって両眼を閉じ石像の如く立っている。

劍豪は驚いた。相手は満身隙だらけだが、踏み込めない。踏み込めば頭上に刀が振り下ろされる。

時はたつ。何事も起こらない。多くの見物人が集まっていたが、劍豪は「恐れ入った」と叫ぶと飛び下がりが平伏している。「恐れ入ったお手のうち、われ遠く及ばない。わが一身を如何ようにも処分して下さい」と云う。

土方はまだ不動の姿勢。市民はドッと笑った。

捨て身で、死を覚悟した人間は何物にも動じないものだ。

終戦直後、昭和天皇とマッカーサーとの会見で、その捨て身の陛下にマッカーサーは頭をたれたのです。

陛下の願いに「Please command me 何でもおっしゃって下さい。お役に立ちたいと思います」。何というマッカーサーの変化であろうか。

爆撃にたふれゆく民の上をおもひいくさとめけり身はいかならんとも

陛下の大御心こそ、マッカーサーの心を全て氷解させてしまったのです。

陛下は自己規制の偉大な帝王学を身につけ、我が国を滅亡より救って下さったことを、国民は今一度思い起こすべき秋であろう。

(熊本県 大江八幡宮 宮司)

祓について

芦原高穂

おおとりの前座を務めさせていただきます。

本日は総代会御出席誠にありがとうございます。本日は若干「祓い」についてお話ししたいと思います。

私共の暮らしの中で、一番神様との関わりを感じさせる或いは関わりの深いものに、「お祓い」ということがあると思います。

生身の軀を持つ人間のみならずその不完全なる人間の作った機械であっても、常に祓と共に見直し聞き直しという心配りが必要であることは今更言うまでもないことと思うわけがあります。

この人の生活に密接に関わっている祓と言うことはご承知の通りわが国の一番古い古典であります『古事記』『日本書紀』にも記されているように、共にイザナギイザナミ二柱神の神による国生みの果てに伊邪那岐大神火之神迦具土神を御生みになるにいたりてお隠れ

になるという事態を迎えるにいたりました。

夫伊邪那岐の大神は追慕の念絶ちがたく、自ら黄泉の国へ赴き、今一度連れ戻そうとされますが、既に黄泉の国の人となられた伊邪那美の大神のあまりに醜く変わり果てた姿にあわてて逃げ帰ろうとします、見られた伊邪那美の大神「見たな！」とばかりに伊邪那岐の大神を追って参ります。

こうした中で、やっとの思いで中津国に戻られた伊邪那岐の神は筑紫の日向の橘の小門の阿波岐原に褌ぎされまして、左の目より天照大神を右の目より月読命を鼻より武速須佐之男命が生まれますが、伊邪那岐の大神はこれらの神々にそれぞれの治めるべき国を示すわけですが、困ったことに末っ子の武速須佐之男命は母君に会いたいといって治めるべき海へ赴こうとしないわけです。どこでも末っ子は必ず一度はもめ事を起こすことの源かなと言つては須佐之男の大神に失礼かも知れませんが、神話における国生みから国を治める統治の理念に進む過程で、祓という行為が一つの変換点になっているのではないかと思うんです。

そうしてみますと、神話の中で祓が取り上げられているのは他でもあります。祓によつてお生まれになった天照大神が、兄弟でもあります須佐之男命の参内に武装して迎える

など兄弟にあつても厳しい姿勢を見せつつ須佐之男の命の乱行に天の岩戸隠れから八百万の神々による祭りによつて岩戸開きを実現するなど、そこには統治という人を束ねることの厳しさをしつかりと示しているわけであります。

伊邪那美の大神崩御という悲しみを乗り越える上での祓は、二度とまみえることのできない最愛の人への未練とも言ふべき恋々とした心の葛藤を解きほぐ過程であり、正に命の活力を取り戻す作法とも言ふべきものかも知れません。

しかもこれは単に夫婦二神の神様だけの出来事ではなく、正に国生みあるいは八百万の神々を次々にお生みになる過程でのことであり、そうした中で国の骨格とも言ふべき衣食住に始まり大地自然の姿が整えられていく訳ですから、そうした中で祓の持つ意味は、前進していく上での階段といえるわけあります。

平素私たちの暮らしの中で、祓というものを見ますと、新年を迎えるに神棚に新しいお札を受ける時や、家や車の新調に神事を行いますが、これらも「お祓いする」といつております。

また葬儀などに参列したときには、帰宅後直ちにお清めをするということをしきたりとしてきました。

水で口を濯ぎ、清め塩を舐に振りかけて潔斎をするわけですが、水で口を濯ぐのは禊ぎばらいで、塩を振るのはあらゆる命を生み出した海の霊力によって、失われた生命力を回復することを意味しております。

だからといって、「そうか最近内の旦那元気がないから少し塩でも振ってみようかしら」なんていって塩をまいたらいけませんよ。

死の穢れについても最近では穢れではないという意見がありますが、生命力活力のつまり「氣」が失せ失われた状態つまり「氣枯れ」た状態を穢れとし、最も深い悲しみの場において、死者を尊い存在として清め謹んでお別れをすることを、民族的な伝統として伝承し、それは命の尊さを知る一瞬でもありました。少なくともご遺体は命失せたケガレた存在であることは皆さんもご理解いただけるのではないでしょうか。

悲しみの時或いはその場所を共にした後、日常に復帰する意味でもこの清め塩は重要な役割を果たしてきたのです。

こうして祓は悲しみや落ち込んだ状態から回復する作法として受け入れられてきましたが、最初に申しましたとおり、一年に一度の祭りなども地域のこうした心を洗う行事として、氏子住民がこぞって鎮守のお祭りを奉仕することで魂の甦りを計って参りました。

また、ご家庭での神棚をはらい清め、天照皇大神宮と産土様のお札を年に一度お取替することもお祓いであります。

よくよく人間社会というものは、常に見直し聞き直して参らなければ、活力が失われていくものであることは皆様も実感されていることと存じます。

そうした暮らし、人生の歩みの上で、その時々に応じた「祓い」という事を意識してきた事の意味を思い出しただきたい。

より豊かでより充実した将来が開かれる事を、しっかりと心に刻み込んでいただきたいと思います。

ご静聴誠にありがとうございました。

(北海道 旭川神社 宮司)

五寸釘の寅吉

佐 古 一 洌

遠く北海道の網走刑務所には、レンガ造りの正門前に竹箒を持って掃除をしている等身大の男性の銅像があります。

実はこの人物、己が人生七十有余年のうち六十年に及ぶ監獄生活の中で、脱獄六回の記録保持者であります。

本名を西川寅吉と言い、三重県多気郡御糸村の農家の次男として生まれ、幼い頃から身体は小柄だが頑健で敏捷、腕力が強く、八歳の頃より誰と喧嘩をしても負けることがなかったと言います。

彼十四歳の時、自分を親よりも可愛がってくれた叔父が、ヤクザのリンチに会って殺されてしまいます。叔父の悲惨な死を聞き、仇討ちを決意して、夜半日本刀の抜き身でヤクザ一家に忍び入り、親分に重傷を負わせ、逃げる折更に放火をして捕らえられてしまいました。

年少と言うことで、死罪は免れましたが、無期懲役となって、三重の牢獄につながれます。そして服役中、仇を討とうとした親分はその後傷が癒え、生きていると噂で聞き、何としても再び仇討ちしたいと考え、第一回目の脱獄をしました。

爾来六回の脱獄を繰り返し、その三回目の折、逃げる途中路上の板付き五寸釘を踏み抜いて、そのまま三里・十二キロも逃亡し、力尽いて捕らえられたところから、彼は「五寸釘の寅吉」と呼ばれるようになりました。

最後に、当時重罪犯ばかりを収容して、悪の吹き溜まりと言われた網走監獄へぶち込まれます。ところが、明治三十三年以来すっかり改心して一度の反則も起こさず真面目に勤め、やがて模範囚となり冒頭申し上げましたように、刑務所の門前を監視なしで掃除を許されるまでにもなったのであります。

かくて大正十三年九月三日、長い長い気の遠くなるような獄窓生活から解放され、高齢のゆえをもって刑の執行を停止、釈放されました。

出所後彼は、ある芝居興行一座に入り、自分の体験談を話して回る生活をし、昭和のはじめ故郷の御糸村に帰り、町の有力者となっていた息子に引き取られ、何一つ不自由のない平穏な暮らしを送り、畳の上で安らかな大往生を遂げたのであります。

○
或る人いわく、「人間は性善でもなければ性悪でもない。その人の環境に流されていくこともあり、それは人間の意志に反して流れていく場合もある」と。

人間悪に染まればなかなか抜けられないのが、世の常であります。これは例えば、悪とは言えないかもしれませんが、私がお酒を止められないことと非常によく通じるものがあります。

一昨年六月、期することがあり、酒と女は二ゴウまでを目安に、「自分は一日二合だ」と、高らかに宣言をしました。しかし、しかしです。まず周りが許してくれません。多くの氏子さんが、職員が相変わらずどんどん注ぎにきます。それも善意・好意で注いでくれるなら良いのですが、中には悪意・敵意更に殺意をもつて注ぐ輩もあり、油断も隙もあります。

一方私の身体が許してくれません。なにしろ六十六年の生涯、二十歳から数えて四十五年間飲みっぱなし。二合ではとても足りません。そこで少し宗旨を替えて二合 + α (アルファ) にしました。しかしこの α が曲者でして、だんだん飲んでいきますとこの記号の頭と尻尾が寝そべってひつついて ∞ (無限大) になってしまいます。と言うことで、昨今は一

日二合、三日で一升のペース。計算の合わないのは酒飲みのしからしむるところです。

○

刑務所とは、昔の軍隊のように、一般社会とは完全に隔離された社会だけに、悪くなる場合には極端に悪くなり、又逆に、箸にも棒にも掛からないようなワルが教育されることによって、人が変わったような立派な人間になることもままあるのであります。

遅きに逸したけれども、五寸釘の寅吉は、まさにその後者でありました。それは刑務所看守氏家孝太郎さんとの出会いによるものでした。氏家さんは、看守と囚人という厚い壁を取り除き、互いの心の融合に努め、只管寅吉を一人の男・人間として待遇した為であります。

私は縁あって、京都刑務所の教誨師を勤めております。その教誨の仕事は、コンクリートの道路に植物の種を播くようなものと言われております。ほとんど育たない、効果がないいと言っても過言ではありません。しかし、万が一にもコンクリートのひび割れに芽吹き、花咲く草木もあるのであります。そのわずかな望みを託して、根気強く続けて行かねばならないのであります。

脱獄六回をもしおさせた、敏捷な行動と忍耐力を持つ五寸釘の寅吉は、もし戦国の世に

生まれていたら、一国一城の主となっていたであろうと思われますし、今の時代でも大變頭の良い男でしたから、まっとうな道を歩んでいれば、多くの人の上に立って尊敬される偉い人物になっていたかもしれません。

かく考えますと、人の一生というものは誠に興味深く、そして計り知れないものがあるようであります。

(京都府 松尾大社 宮司)

命

村田和之

私達が常日頃何げなく使っている漢字には、古代人等が深い願いや意味を含み作られ成り立っています。

演題の「命」^{いのち}も、時として「メイ」とも「ミヨウ」とも「ミコト」とも読み分け一般的には「イノチ」と読み、読み方によりその意味も大きく変化してくるのであります。

もともと人に言い付ける意を表したり、天の支配するところの考えから、世のなりゆき、人の「いのち」の意味として用いるために作られた字ですが、意味としては「いいつける」、「つげる」、「さだめ」、「のり」、「おしえる」、「いましめる」、「賜う」^{たま}、「あたえる」、「なづける」、「指定する」、「天の定め」、「人間としての務め」の意味を持ち、「いのち」としては「生れつきを王朝の永続性」「運命」、「みこと」としては神の名に添える敬称として用いられ、神の名の下に添えて使うことが多く見受けられ、後世を「オコト」と云い、現在・・・殿・・・様に当たるともいえます。

日本の古典古事記の中には神の名の下に「命」を書き、日本書紀には「尊」の字を使い「ミコト」と読み分けていますが、「尊」の場合は、尊貴なる人を称える時、「命」は天皇の詔みことり命なるが故と受け賜わっております。

神社人が人生の最後に使う、諡名おくりなの中にも、称名たたえなとして、その人の徳を称え「命」として名前の下に名付けているのであります。

今日は、そうした意味の中で「イノチ」として読む大きな意義を今一度考えてみたいと思います。

人々が笑みを湛たたへて見送りし

こうのとり今空に羽ばたく

飛びたちて大空にまふこうのとり

仰ぎてをれば笑み栄えくる

平成十八年の歌会始、お題は「笑み」と題した中でお読みになられた秋篠宮殿下と妃殿下のお歌であります。次いで二月ご懐妊のニュース。皇位継承をめぐる注目を集める中、九月六日午前八時二十八分「親王殿下」ご誕生のニュースが世界をかけめぐり、国内外から喜びの声があがりました。

「ゆったりとした気持で長く久しく人生を歩んでいくこと」を願ってつけられた悠仁親王殿下、「大きくまっすぐ育ってほしい」と「高野槇」のお印も決められました。

歌会始めのお歌の中に「こうのと」と読み込まれた殿下と妃殿下の歌に願いと共に、何かしる夢が叶えられるのではとの思いを国民にあたえられ、正にその通りのご誕生となり、この上ない喜びを感じる一人でございます。

扱て一面、日本の国内の有様は如何でしょうか。目を覆う程の状況、連日起る凶悪な事件、「命」の尊厳などカケラも無い世相に悲しむ人は私一人ではあるまい。

平成十八年、日本漢字能力検定協会が全国に公募、選ばれた「命」という漢字が清水寺の貫主の揮毫により映し出されたテレビの姿は今も記憶に新しい。平成十七年度は「災」と記され、毎年暗色の一年のスタートを切っている日本人。

世界のリーダー的存在で国の品格を誇っていた日本民族の姿は、何時の間にか昔し話のできごととして忘れ去られてしまった。

無防備な家庭に入ってくるテレビ、夢中で一身に手を動かすゲーム機、携帯電話。家庭のできない子供の「しつけ」を先生に押し付け責任を追及する保護者等。

いじめ、集団自殺、低年齢化する幼児殺人事件、親子で殺し合う悲惨な事件、人は死ん

でも遠足に行った如く、すぐ生き返ってくると思つていたのであるうか。動物でさえも親子の絆は強く結ばれ、命をかけて子を守る感動的なシーンはテレビでよく見る光景であります。

しかるに人間は、日本人は、老若男女を問わず最悪の道を一直線に進んでいるのであります。

昨年暮の全国教育問題協議会が日本の高校生のアンケート調査を発表いたしました。若い時は将来のことを思い悩むよりその時を大いに楽しむべきだとの現在指向青年は日本で五〇・七%、米国三九・七%、中国一九・五%。将来指向は日本四八・六%、米国五五・二%、中国七九・八%。親に反抗する高校生、日本は八四・七%、米国十六・一%、中国十四・七%。先生に反抗する人、日本七九%、米国十五・八%、中国十八・八%。性交渉の経験がある日本の高校生男子三五・八%、女子四七・三%、セックス大国日本といわれる所以であります。

日本の子供等のキレる原因にテレビ、インターネットが叫ばれて久しい。プツンになる子供達、脳の中の前頭葉やセロトニンの分泌が止まり発達が止まり自分で考えることができない人間となるのであります。

親は子供のしつけがわずらわしく、できないとの理由で、子供部屋で、テレビやゲームに夢中になっていても何の注意もしない姿、最悪の結果を生み、あわてふためいても手遅れ、親が子に、子が親に手を下す、殺しに至るのは、親のしつけ家庭教育の無さにあり、親の蒔いた原因にすぎないと思うのであります。

今、私は地域で青少年健全育成を主眼とした奉仕活動をしています。パトロール中に学校に立寄りますと、校庭に寝ころんでいる中学生、訪ねてみると朝食を家で食べていないので給食を目当に時間をつぶしているとの返事、文部科学省も食事の乱れは心の乱、キレる原因に食事ありと調査指導、毎日朝食を食べさせる家庭は約八十%、しかし家族ぐるみの食事は五十%未満とか、家庭のしつけ、食事を通して親子のきずなを深める重要な教育の場が作られていないのであります。

五十億分の一の割で人間はこの世に誕生すると聞きますが、神のお計いにより得た尊い命の重要性をもう少し真剣に考えたいものであります。誰れ一人自分で望み生まれ出ている人間はいません。しかし一度しか無いこの世の人生、力一杯生きぬき悔の無い人生を送りたいものであります。

神様は見てござる、神より生れ出た命、人間の生る様は神と同じ様な歩み方をせよと教

え「神道」と名も付けられました。

赤ちゃんポストに五月十日、第一号の三々四才位と見られる男の子が預けられました。

せつかく授かった子どもを捨てたり。神の恵みで生れた若人等が仲間をつのり自から自殺する数も日増しに増えると発表されました。日本人は命の基であるイネ（息の根）の米を食べ生きて行けよと教えています。神世に続く、その尊い命を受け継いでいる自分、命を磨くのは神代よりい出し自分自身が神を信じ神の心に生きることなのであります。

昨年選ばれた「命」という漢字は「生まれた命」「絶たれた命」「奪われた命」「膨らむ命の不安」からと時世の直面する命が理由だと聞きますが、江戸時代の朱子学者、林羅山らざんの説く祖先の魂は子孫に伝わるといわれる如く、私達の命はその源である祖先から今日迄永遠の生命でつながっており、肉体だけでなく祖先の魂、心も受けついでいることを忘れてはならない「命」なのであります。

（広島県 長束神社 宮司）

絆

河 本 文 夫

今日は、代満神楽。機械化が進んだとはいえ、ひと段落でございます。まずはご安心のことでございますよう。

日本中津々浦々、水田に早苗が植えられ、初夏の風に揺れております。美しい日本の風景であります。自然の恵みの中で、苗がすくすくと育つわけです。自然はまさに自然のなすがままその命を委ね、いずれ実を結ぶことでしょう。自然のいろいろな恵みとの繋がりが、一つ欠けても、秋の穂を十分に結ぶことはできません。すべて、深い関係があり、自然の絆ともいってよいでしょう。

さて、人間の世界はいかがでしょうか。昨今思いますのは、人間社会この絆が薄れてきているのではないかなと思うことしきりでございます。と申しますか、その太い絆で結ばれた関係にある――太い絆といえ、親子、夫婦。その太い絆が突然ばつさり、切られてしまう事件が多くあります。

そういえば、「絆」という映画がありました。一九九八年リリースされたものなのですが、役所広司と渡辺謙が主演の映画です。

国際的なヴァイオリニストに成長した妹を守るため、役所広司が大胆な賭けに出るのですが、妹を思う絆、友情の絆、断ち切れぬ男女の絆と、中々考えさせられる映画でございましたが。何となく役所広司の気持ちはわかります。

この映画のように、兄弟の絆ゆえ、妹を守るために犯罪を犯すのですが、昨今見られるのはその憎しみが外部に発散されるのではなく。内部、兄が妹を殺害と。どうしたことでしょう。もともと絆の強い親子、その親と子の事件。はたまた、兄弟間の事件などまだ記憶に新しいのではないのでしょうか。どうしたことでしょう。絆が強くその関係を守るため、あらぬことが起きた、起こした。まだ理解できます。しかし、そうではない、絆の強いもの同士が事件が起きます。何がそうさせたのか、理解に苦しむところでございます。

人間という動物は、お互いのかかわりが必要でありながら、そのかかわりが疎ましく感じるのも人間であります。そんなにかかわらなくとも、ことがすむ時代になったのも事実でございます。

その昔は、助け合わなくては生きていけなかった。兄弟が多く、兄がまだよちよち歩き

の妹を見る。これが当たり前であつた時代があつたようです。が、今はそんな助け合う絆は生まれもないのかもしれない。

村八分という言葉があります。この言葉は、放送禁止用語のようですが、実に的を得た言葉で、仲間はずれにすることを意味します。のけ者にするという意味でしょう。江戸時代以降、村のおきてに違反したものに対して、お付き合いをしないことを意味します。八分ですから二分があるでしょう。

私が、企業に勤めていた若いころです。一日が終わると、事あるごとに会社の上のレストランで、仲間と、いっぱい飲みながら、雑談。そのとき村八分の話になり、部長が、われわれスタッフに村八分の二分は何かわかるか？と、聞かれまして、そりゃ、火事と葬式ですよと私が答えると、さすが河本君だ、神主の子だね、と、やけに褒められました。仕事では褒められることは余りありませんが、仕事外では褒められましたね。

すなわち、火事と葬式は、お手伝いするが、他のお手伝い、付き合いは一切しないと云う事であります。

他の付き合いとは、冠・婚・建築・病氣・水害・旅行・出産・年忌の八つであり、昔は今ほど分業化ができていなかったからでもあります。したがってお隣り近所の協力なしで

は生活が成り立たなかったことを意味します。

ま、早く言えば現在は、大変自分勝手に事がすむ、周辺に気兼ねをしなくても、事がすむ大変よい時代になったのかもしれない。

ふとしたことから、ふとした出会いから、少しの親切から、忘れることのできない絆が生まれていることがあります。ところが、一方は思い、一方はまったく忘れてしまっている。こんな絆も素晴らしいなと思います。

そんな話をひとつ。

私、故郷に帰ってきました、七年になります。

故郷の小中学校の同窓生で、近隣に住むものが年に一度、忘年会を開催します。その忘年会に誘われ、参加するのですが、その忘年会で、お酒が入ると、同窓生の一人が必ずあることを話します。その同窓生は「賢ちゃん」といい、私もよく一緒に遊んだのですが、その「賢ちゃん」が、あるお嬢さんといっても今はただのおばさんですが、その同級生に、必ずこのようなことを話します。その方は「えっちゃん」といいますが、「えっちゃん！僕はあるのに、小学五年のとき、助けられたんだよ。ほんとに嬉しかった」このことをお酒が入ると必ず、その「えっちゃん」に話すのでございます。多分、いたずらがきにでもい

じめられた事があつたんでしよう。そのとき男勝りであつた彼女が、「賢ちゃんいじめちゃいけないじゃないの！」といったのかそれはわかりません。

ところが当の「えっちゃん」は、「賢ちゃんは酔うと、毎回この話をするの、私は覚えちゃおらん」といつて、このように返事するのですが、「賢ちゃん」には、一生忘れることのできない、嬉しかった出来事であつたのでしょうか。少しの親切が、その追い詰められた状況にあつた、その本人にとっては、それはそれは、忘れることのできない出来事であつたということが。

「賢ちゃん」は、このことを話すためにこの毎年の忘年会に出席しているような気がします。

よい絆が生まれれば、またこの社会は、より良いものになるのではないでしようか。

さて、もう一つ、ある青年の作文を紹介しましょう。

兄と弟の話でございます。

○

オレの家は超貧乏で、小学校四年の時の小遣いは月三二〇円だった。三二〇円というのは、当時のてんとう虫コミックの単行本の価格で、漫画が好きだったオレと母親との交渉

で決定した金額だった。そのようなわけで、毎月一冊漫画を買うのがオレのささやかな楽しみだったのである。

冬のこと。

体育の授業になわとびが加わった。オレはこの縄跳びの授業が大嫌いだった。苦手だったからではない。クラスメイトがビニール製のスケルトン調の縄を使ってるのに対し、貧乏な我が家では、オヤジがどこからか拾ってきた麻のヒモで作った縄で縄跳びをやっていたのである。クラスメイトは気をつかってか、そのことには一言も触れなかったが、オレにはわかるんだよ、偏見の目が。

そしてある日決心した。今度の小遣いは漫画を買わず、みんなと同じかき氷シロップ色の綺麗な縄跳びを買おうと。

買いました。買いましたよ。ブルーハワイ色のビニールなわとび。体育の授業はもちろん、休み時間もみんなに混じって縄跳び縄跳び。縄跳びがこんなに楽しいなんて。

その数日後、午後の授業中に席が窓際のオレは、ふと運動場に目をやった。午前に授業が終わった一年生グループがなわとびをやっている。その中にはオレの弟がいた。泣いているようだ。どうやら友達に麻ロープの縄をバカにされているらしい。顔を真っ赤にし、

涙が頬をつたわっているのがここからでも確認できる。家に帰ると弟が部屋で漫画を読んでいた。オレが毎月買ってる漫画だ。

一年生の弟は、まだ小遣いをもらってなくて、オレの買った漫画で喜びを満たしてる身分だ。

オレは決心した。そして彼に言った。明日授業が終わったら、オレの授業が終わるまで待つてろと。「兄ちゃん、何ー!」「何でもいいから待つてろ」と命令した。

授業後、下駄箱で待つてた弟を連れて縄跳びを買いに行った。

好きな色を選べと言ったら、「兄ちゃんが青だから、この緑のやつにする」と言った。メロンソーダの色だ。

翌日から、校庭で友達と元気に縄跳びをやっている弟をたびたび目撃した。ああ、よかったなあと思い、歳をとるにつれてそんな昔の出来事は自分の記憶から一切消えた。

そして十数年後の現在。

できの悪いオレは高校卒業後、夢も希望もなくフリーターになり、職を転々とし、現在小さな会社に勤めている。弟はオレと違って出来がよく、世間では一流とされる大学を出て、東証一部の会社に入り、ひと昔前のトレンドドラマに出てくるようなマンションに

住み、何ひとつ不便のない生活をしていた。自分とは正反対の人生を歩む弟を何となくうつつうしく思い、オレは遠ざかっていたし、会うのも避けていた。そんな弟が突然会社を辞め、大学院に進学したいと言い出したのだ。かつては都心のカッコイイ部屋に住んでいたヤツも現在では大学院近くの六畳一間だ。奨学金を得る書類等、種々の書類に保証人の印鑑がいるということで、オレを呼び出したのだった。

パソコン、プリンタ、分厚い資料の山、いかにも研究者の部屋といった感じた。ダンボールの中に電化製品のACアダプターコード等がからまり入っている。その中に一本の古い緑のなわとびが見えた。小学生とかが使うあのなわとびである。きちんと結わえてまめてあった。勉強の合間の気分転換に縄跳びでもするのかなと、そのときは思った。「好きにすればいいじゃん」と言い、名前を書き印鑑を押し、「元気で頑張れよ」部屋を出た。

その時は何も気がつかなかった。帰る電車の車窓から小学校の校庭が目に入った。子供たちが遊んでいる。突然、昔の記憶がよみがえった。

そうだ、あの縄跳びは、オレが小学校のとき、買ってやった縄跳びではないか。そうだあの色あの模様。まさにそれだ。弟がああの時の縄跳びを今も大事にしていたのが驚きだった。よほど嬉しかったのだろう。今も持っているなんて。

正反對な人生を歩んでいたとはいえ、今もこうしてダメ兄貴を頼っているのかと思うと、嬉しくなり、電車の中とはいえ頬に熱い涙が伝ってきた。

(山口県 宮尾八幡宮 宮司)

日本人のしきたり

西村純子

皆さん、ご存知ですか？只今全国図書館において総合ベストセラー第一位になっている『日本人のしきたり』という本で、テレビ、新聞でも大評判で、日本の四季を重んじ、人生の節目、節目を大切に、いまに残しておきたい伝統の原点をさぐる本で、青春出版社より発行されました、飯倉晴武先生の本です。

また手軽な本で、この本が良く売れているということは大変良い傾向だと私は思います。特に若い方々が知らないということは年と共にわかってくる点もありますが、現在の核家族化により、大切な家庭教育において、昔のようにお父さん、お母さんが忙しい時、留守の時に、おじいちゃん、おばあちゃんの指導があり、自然のうちに教えられ、おぼえさせられるという事が少なくなりました。

日本人が長い歴史のなかで培ってきた生活の知恵、豊かな人生観の表れでもあった現在のしきたり、伝統行事の多くが忘れられつつありますが、いまだに今日の生活に息づいて

いるものもあります。

昔のことは何でも古いとか、通じないとか耳にすることがありますが、また聞く耳をもたない人も多くいるようです。先輩の言うことには、必ず聞く耳を持つことが先ず大切でしょう。祖先の生き様を道となせば、間違いないのでございます。

それでは『日本のしきたり』の内容を紹介させて頂きます。

先ず「日本人の自然観と信仰」として「旧暦」を取り上げたり、「八百万の神」で自然万物のあらゆるものに神を見いだし、太陽、月、星、風、雷といった神もいれば、土地の神、田の神、山の神、川の神、石の神など、また家の台所、かまど、便所などにも神があり、さらには動物、植物にも神が宿するというように、多くの神々「八百万の神」があまねく存在する点に特色があることを取り上げています。これに対してキリスト教、イスラム教は一神教です。

日本最古の歴史書である『古事記』のなかに「天照大神が、弟のスサノオノミコトのあまりの乱暴さに腹を立てて天の岩戸に隠れられた。困った神々（八百万の神）が、天の安の河原に神集いて・・・」という記述があります。太古の原始信仰から、卑弥呼に代表される巫女が生まれ、やがて農耕社会の安住生活から、自分たちが生まれた土地を守ってく

れる「産土神」を祀る社を造るようになってきました。さらに古来の祖先信仰も合わさって、日本ならではの神々への信仰が根づいて、全国に八万とも十万ともいわれる神社があります。そしてその中心であり、私たちの総氏神さまである「伊勢神宮」では、二十一年に一度の、平成二十五年に斎行される第六十二回神宮式年遷宮に向けて、お木曳行事など着々と準備しておられます。

また日本人の神観念の表れとして、十月は全国の神々が出雲大社に集まることから「神無月」、出雲地方では「神有月」と呼ばれていることがあげられます。

次に「神と仏」についてですが、現在日本では神道と仏教が共存していて、もともと神道が太古から日本固有の神への信仰に由来するのに対して、仏教は大陸から伝来した宗教ですが、奈良時代以降「神仏習合」時代があり、明治政府の「神仏分離令」で神仏混淆の思想は禁止されました。

次は「氏神と鎮守」で、困った時の神頼み、苦しい時の神頼みと言いますが、人は一番身近にいる土地の神様に願いを託しました。それが氏神であり、鎮守の神でした。

現在でも行われている子供の初宮詣は本来氏神にお参りして、その土地の一員、氏子になる儀式だったのです。

やがて平安時代以降、武家社会から氏族社会が崩壊して、氏神信仰も薄らぎ、貴族や社寺の私的な領地である荘園制度が確立されて、新たに荘園領主たちは、荘園を鎮護してもらう目的で、その土地の守護神を祀るようになり、これが鎮守と呼ばれるもので、それまでの氏神を「鎮守の神」として祀るようになりました。その後、江戸時代にふたたび氏神信仰がさかんになりました。

次は「正月行事のしきたり」で、一年の計は元旦にあり、というように、一年の節目として日本人はこのほか大切にしてきました。多くの伝統的な習慣が忘れられていくなかで、初詣や雑煮を食べる習慣など、正月行事は多くの日本人が大切に守り続けております。また、「年中行事のしきたり」から「結婚のしきたり」、続いて「懐妊、出産のしきたり」「祝い事のしきたり」「贈答のしきたり」「手紙のしきたり」「葬式のしきたり」「縁起のしきたり」など、それぞれのしきたりに関することを細かく分析しています。

その中の「縁起のしきたり」についてお話し致します。日本人は縁起にこだわります。縁起を担ぐ・縁起が悪いなど、信仰に関連するものから伝説に端を発したもの、過去に起きた出来事に関連させたものなど実に多様です。

古くから伝わる縁起は庶民の経験や生活の知恵から生まれたもので、あながち迷信、俗

信とは言い切れないものも少なくありません。

次は「おみくじ」。神社にお参りしたあと、おみくじを引いて吉か凶かを占うようになってのは江戸時代からですが、鎌倉時代には農村で用水を田んぼに引く順番を決めるときや、漁村で漁場の割り当てを決めるときなどに、話し合いがつかない際に、村人たちがそれぞれ名前を紙片に書き、神主がお祓いをしてから紙片を引いて決めたそうです。昔から「神仏の配慮は公平」と信じられてきました。

室町時代には、足利幕府六代の將軍を決めるときに、守護大名たちの意見が割れて一致しなかったため、石清水八幡宮の神前でおみくじによつて決めたという記録が残っているそうです。

次は「厄年」ですが、厄年というのは、災難や不幸に出合うことが多いとされる年齢で、一般的には男子が二十五歳・四十二歳・六十一歳、女子が十九歳・三十三歳・三十七歳で、とくに男の四十二歳は「死に」、女の三十三歳は「散々」に通じるということで、一生のなかでも大厄とされ、前厄、厄、後厄として前後三年間続くとされているのは一般の皆さんもご存知で、厄年に対する信仰は強く、神社で厄払いや厄除けの祈願をしておられます。

次は「お百度参り」ですが、古くからの願掛け作法で、昔から日本人は神仏に願ひ事を

かなえてもらうために、寒中に滝に打たれたり、井戸水を頭からかぶる水垢離などの荒行をして、罪や汚れを祓い、身を清めます。当「石上神宮」は鎮魂の宮として有名で、禊研修もその一つです。

願掛けのなかには「お百度参り」もあります。自分の家から神社まで百往復するとか、境内の中に百度石があり、境内で百回行ったり来たりしながら祈願して、願いがかなった時は、お礼に金品などを奉納したり、「願果たし」や「願ほどき」などを行なったようです。現在ではあまり見られなくなりましたが、たまにあります。

最後に「少子高齢化」の今日、数多い、いろいろの「しきたり」を各家庭において、機会あるごとに、集まりがあるごとに、皆さんで「昔はこうだった、今は」と、互いに教え合い、話し合う必要が大いにあると思います。

今日の皆様は知識人ですから、何もかも良くわかっておられると思いますが、一般の方々、氏子の方々、特に若い方々に申し上げます。一般常識としての「知恵と心」、日本の良き「しきたり」を、子供には子供なりに聞かせて実行していれば、必ずその後ろ姿を見て、歴史ある伝統を継承してくれるものと思われれます。

いのちのよみがえり

——御遷宮は、世界の宝——

大野 康 孝

『第六十二回伊勢神宮式年遷宮奉賛会』支部発会式の儀が、このように厳肅盛大裡に催行され、来る平成二十五年秋斎行の「ご遷御の大みまつり」に向けて、愈々その奉賛活動がここにスタートしました。まことに、おめでとうございます。

総代世話人の皆さん神職各位、一丸となって前回を上回る好成績を以てこの奉賛事業の完遂に赤誠を結集し捧げ奉ろうではありませんか。

それでは、『御遷宮は、世界の宝』と語られた、恩師石井寿夫先生のお言葉を仰ぎつつご遷宮の大いなる意義を、その心と形を、皆様と共に学んでいきたいと想います。

神都伊勢・江戸時代の五大都市とは

さて、江戸時代後期の我が国総人口は凡そ三千万人程だったそうですが、その当時の我が国の五大都市の名を即座に解答出来る方は、案外少ないかと存じます。

その時代名からして將軍居住の地である江戸の地は皆知りますが、私たちは神社人、やはり一等最初には、天皇様のおわします京都をあげるべきかと存じます。次に江戸。そうして上方、今の大阪ですね。それから尾張名古屋ときて、そして最後は、それこそ別格。何と、伊勢神宮のご鎮座まします『神都伊勢』の地なのであります。

それでは、伊勢の神宮と式年遷宮の御事をこれからお話しするに当たり、その入口の扉を江戸時代の後期、幕末の伊勢の地より開いてみたいと思います。

おかげ参り・ぬけ参り：近世庶民の伊勢参宮

では、わかりやすく興味深い歴史の事例からご紹介する事とします。

遠くは平安鎌倉の時代、西行法師が伊勢神宮に詣で「何ごとのおはしますかは知らねども　かたじけなさに涙こぼるる」と心ひそかに述懐し、近くは、「伊勢に行きたい伊勢路が見たい、せめて一生に一度でも」と伊勢音頭にも唄われた近世庶民の信仰、伊勢詣でのことであります。：弥次さん喜多さんの時代を想像してください。

江戸時代の初期より始まって、およそ六十年ごとに爆発的に行われたこのおかげ参り、ぬけ参りとも呼ばれる庶民の伊勢詣では、妻や子・使用人らが、それぞれ勝手に夫や親・主人の許可もなく「ぬけ参り」をしたそうですが、特に、宝永二年（一七〇五）閏四月九

日より五月二十九日迄の五十日間に何と三百六十二万人、最も多い日は一日に二十三万人程であったと、伊勢松坂の国学者・本居宣長先生はその著書『玉勝間』に詳しくこの時の参宮者数を記しているそうです。

また、度会弘乗の著した『伊勢太神宮統神異記』には、これらの人々に、道中沿道の富裕の人々が米・銭・着物・菅笠などを与え、山田では施行のための仮小屋を建て赤飯粥や茶さらに銭をふるまい、御師の邸だけでは収まらない人々のために、商家その他の家々まで宿泊させたとあり、それらぬけ参りの人々は、柄杓一本かついで伊勢路を往来し、故郷の家や奉公先に帰っても、主人らに何ら咎められる事がなかったそうです。

平然と昨日の事のように日常に帰り、また働き過ぎたとも記してあります。

当時の国境いには陸海路ともに要所に関所がおかれ、伊勢詣とはいえ、その往来への詮議と詳しい出入りの記録がなされていたことは、想像に難くありません。

いのちがけの辛くとも心和む、一生に一度の徒歩往来の大旅行だったのでしょうか。

今よりも遥かに不便で生活も苦しかったその当時の人々にとつての伊勢参宮と、神都伊勢の地へのあこがれと信仰とを想えば、満ち足り過ぎて心の荒廃が強く叫ばれる現代日本のたましいの恢復が切に願われてやみません。ちなみに昨年の神宮参詣者の総数は、国民

人口一億二千万人を超す現下、六百六十万人余であったかと漏れ聴きます。

日本の源郷「心の故郷＝聖地」とはまさに伊勢の神宮こそであったのです

世界遺産・永遠を目指した過去栄光の名残り

いま世間ではさかんに世界遺産とその登録の事を大きく報じ、自然との共生や歴史的建造物、その時代時代の人々の営みや代表的文化遺産の保護をうったえています。

その代表的な事物の例えば、オリンピック発祥の地ギリシャのパルテノン神殿や古代ローマの競技場コロシウム、エジプト王侯の墓所ピラミッドやスフィンクス、東洋では隣国支那の萬里の長城、カンボジアのアンコールワット仏教遺跡、さらには南米インカ帝国の巨石建造群等と、ざっと思いつくまに見渡しても、みな永遠を目指したその時代最高の心技の粋を尽した堅固な石造建築です。大いなる世界に誇る遺跡であり、それぞれが歴史に残る文化遺産。世界の聖地、観光地であります。

ですがしかし、すでにお気付きかと思いますが、それらの世界遺産とは大方ほとんどが本来の役目を果たして今は静かにたたずむ、過ぎ去った日々その歴史の名残りであり、言わば生命終えた過去栄光の遺物なのです。

石井先生は、二十年前に「だが、それらは死んでいる！」と喝破しておられます。

式年遷宮・初発のころを今に伝える

ところで御鎮座二千年の歴史を誇る我が国の伊勢の神宮。そうして、今から約千三百年前に第四十代天武天皇がお定めになり、次の持統天皇の四年（六九〇）に始まった神宮式年遷宮の制度は、一体何を目指し何のために二十年に一度これを繰り返し、今に至り来ったのでしょうか。その長い歴史には一時の中断（戦国時代）はありましたが、来る平成二十五年秋には第六十二回遷宮のクライマックス、両宮のご遷御の儀が行われます。

ご遷宮とは新しい神殿を造って大御神にお遷りを願うことで、式年とは定められた年のことを意味します。そして今でも、天皇陛下の御聴許を得た上で進められます。

神宮には内宮・外宮ともにそれぞれ東と西に同じ広さの御敷地があり、二十年ごとに最初のままに、寸分違わぬ全く同じ形の至高の社殿を交互に造り替えるのです。

同時にまた、神様の御装束神宝もすべてが古式のままに全く同様に新しく調製され、神殿内に献納されるのです。その数は何と、約八百種千六百点にも至ります。

では、なぜ二十年毎なのでしょう。その理由はいろいろと推定されます。

まず二十年というのは人生の一区切り、伝統技術の継承には最も合理的な年数です。さらには、最高最貴の造形ではありながらも掘立柱に萱の屋根という素木造りの神宮の御社

殿の尊厳さを保つための耐久限度からも、最もふさわしい年限とされています。

その他にも支那の暦学等から伝わり来たった諸説など色々あるのです。

生きている神宮・ゆき巡る永遠のいのち

しかし、神宮の式年遷宮は建造物の朽損が理由ではありません。この制度が定められた時には、もうすでに現存する世界最古の木造建築である奈良の法隆寺は建立されていました。当時のわが国の技術で立派に永久的な社殿は出来たはずなのです。

神宮の神殿「唯一神明造」は、いつでも新しく何時までも変わらぬ姿を求めて、二十一年ごとに清く浄らに造り替えることによって永遠をめざしたのです。

世界中には永遠を目指した堅固なる石造りの古代神殿がいくつもあります。先ほども申しましたが、その大方は世界遺産に指定されています。しかし、多くの世界の一流の建築家や文化学者達は「伊勢の神宮は世界の建築の王座だ」と絶賛します。

それは、最初のスタイルが式年遷宮を通じて、どこまでもいつの時代にも存在して、今も昔も変わらぬままに毎日お祭りがなされ、祈りが捧げられているからなのです。

神宮は、世界遺産には指定されていないのです。それは神宮が生きているからです。千三百年間、六十一回もの式年遷宮を営々と重ね続け、寸分変わらず全く変わらぬ初発の心

と姿とを今に伝え、天地自然の息吹と共に常に若々しく生き続けて来たのです。

世界の聖地・伊勢の神宮

その祈りと営みは、悠久の時空の彼方へと今からも永久に継承されてゆきます。

千代の流れも清き五十鈴川、川面に架かる宇治橋を渡れば神宮の森。そこは風の音も遠き神代さながら……。千古の命を伝える緑豊かな巨木が、訪れる人皆の心魂を洗い清めてくれます。そこには古代人の理想、悠久の生命の榮えという永遠のテーマが自ずからゆき巡る自然の姿と一体となつてむすばれ、麗しく見事に息づいています。

永遠とはなんだろう……。すべてはここから始まりかつ帰結します。自然環境の保護がこれほどまでに叫ばれ、取り返しのつかぬ地球資源の枯渇が大きく問題化される今日、そのテーマは自然との共生。ゆき巡る言わば、森の思想とその理念なのです。

二十年毎に生まれかわるという発想。どの国にも見られぬ式年遷宮の制とその祈り、わが国の伊勢の神宮は生きている世界の聖地なのです。しかも、神宮が新しくなることで、天照大御神のより新しい御光をいただいて日本という国の生命が禊ぎ祓われ、我が国全体があらたまり若返るのです。そこには、常に若々しい生命のよみがえりと輝きを求めて止まない、『常若と中今』の日本の民族性をうかがうことが出来ます。

御遷宮は世界の宝・よみがえる新たないのち

このように神宮の式年遷宮の制度に秘められた大いなる日本の祈りには、世界規模で進んでいる環境破壊への警鐘と、それらへの救済解決の知恵がちりばめられています。

その御用材である木々を伐採しても神宮では数百年の計画をもって山を育て、将来を見越して宮域林には毎年植樹がなされ美しい森をそだてているのです。

御遷宮の広報誌は「この山から流れる清水は参拝者の心を癒し、神宮神田の稲を育て御園の野菜を育てています。そして海にそそいでは豊かな海藻類や魚貝類を育て、御塩として精製されるのです。」と、それらの美しい風景写真をも添え発信しています。

神宮では、天地自然の恩恵に感謝しながら神々への祭りを通して大御神に捧げる衣服をも奉製し、それら年間千数百回にもおよぶ大小全ての祭典の御供物を自給自足しています。自然を大切にありがたく活用し、共生の理念を打ち立てているのです。

「大空に太陽が真輝くかぎり 日の丸が世界の平和と統一を樹ち立てる！」

伊勢にます天照皇大神宮の御遷宮は世界の宝であり、新なる日本の生命のよみがえり、世界文化救済の大いなる曙光であると固く信じ、この啓発と奉賛活動に一丸となって邁進いたしましょう。

(熊本県 本渡諏訪神社 宮司)

神道講演構成法

神道講演の大先達、渡辺武清先生を始め、野村清臣先生、宮地保先生、河本眞澄先生、石井寿夫先生、佐古幸嬰先生など神社界のために一生を捧げられた大先生が神去りまして久しい、先生の教えの万分の一でも恩返しできればと門下生は各地で祈りの庭のひろがりをお願い神明奉仕に励んでいます。講演内容を組立てる構成法を参考迄に佐古先生の「庭のおしえ」より抜粋し、神道講演の手引きにしてみました。

「論」と「証」

一般には序論、本論、結論からなる三分法が主ですが「序」「論」「証」「結」の四分法からなる構成法の必要性を説かれています。

それは、本論をさらに分析して「証」を独立させ「論」の正しさを証明する。

「論」で神道の古典を引用し大綱をしめし、その真実性を証明するために具体的な例話「証」を語る。

内容として

I 何のために語るか（祈願）

1 神命をかしこんで立つ

2 まず祈れ

3 正しい志を

4 まじめな生活を

5 話は生きている

II 何を語るか（内容）

その一 体験を語る

1 体験を語る

2 体験を反省する

3 二つの「門」

① 自然のいのちのなかに神様を見る

② 人間のいのちのなかに神様を見る

その二 講演の内容

1 岩戸を開け、門にとどまるな

2 位に中す

3 講録をつくる

① 話の材料を集める

② 話の材料を選ぶ

③ 話をまとめる

④ 特に切り捨てについて

Ⅲ いかに関るか（表現）

1 わかりやすく語る

① 話はわかりやすく

② 自分の言葉で語る

③ 抽象的な論理よりも具体的な事実を

④ 話には「うねり」を

2 至誠をもって語る

① 主催者にも聴衆にも深い感謝を

② 至誠をもって語る

③ 遺言の覚悟

3 自然に語る

① 講録をはなれて

② 自然に語る

③ 個性ある語りぶりを

以上、紙面の都合で構成法を簡単に記して見ました。詳細については各地で活躍している門下生、又は、事務局迄お尋ね下さい。

第二十三回神道講演全国研修大会・奈良大会の記録

於 石上神宮

神社本庁研修所所長 矢田部正巳

顧問 阿部 信 (神社本庁長老)

々 田中 恆清 (京都府神社庁庁長)

々 寺井 種伯 (大阪府神社庁庁長)

々 藤原 正克 (兵庫県神社庁庁長)

々 伊勢 美登 (奈良県神社庁庁長)

々 中野 幸彦 (滋賀県神社庁庁長)

々 朝日 芳英 (和歌山県神社庁庁長)

々 真弓 常忠 (住吉大社宮司)

々 大野 俊康 (元靖國神社宮司)

顧問

黒岩 龍彦
(宮崎神宮宮司)

々

矢野 憲一
(元神宮禰宜)

大会会長

森 正光
(石上神宮宮司)

実行委員長

村田 和之
(長束神社宮司)

実行副委員長

佐古 一冽
(松尾大社宮司)

実行委員

芦原 高穂
(旭川神社宮司)

々

小串 和夫
(熱田神宮宮司)

々

落合 偉洲
(久能山東照宮宮司)

々

木下 鎭二
(大江八幡宮宮司)

々

蘭田 稔
(秩父神社宮司)

々

谷田 勉
(櫻山八幡宮宮司)

実行委員

長曾我部延昭 (伊豫豆比古命神社宮司)

々 戸内 康雅 (心清水八幡神社宮司)

々 二橋 一彦 (砥鹿神社宮司)

々 波多野 學 (高見神社宮司)

々 塙 東男 (笠間稻荷神社宮司)

々 原 茂子 (夜疑神社権禰宜)

々 宮川 脩 (福井県護国神社宮司)

々 山田 一孝 (靜内神社宮司)

々 山村 稔晴 (高知大神宮宮司)

々 山本 行恭 (椿大神社宮司)

々 渡邊 知宣 (正野神社宮司)

々 和田 年彌 (神宮禰宜)

— 実行委員五十音順 —

事務局 長

事務局 員

々

々

々

生 薦 經 和

(松尾大社権宮司)

畠 田 明 彦

(松尾大社権禰宜)

村 田 和 弘

(長束神社禰宜)

村 瀬 佳 子

(長束神社権禰宜)

湊 久 昌

(石上神宮権禰宜)

神道講演全国協議会 役員名簿

— 幹事五十音順 —

顧 問 阿部 信	神社本庁長老	幹 事 中野 幸彦	多賀大社宮司
顧 問 真弓 常忠	住吉大社宮司	幹 事 二橋 一彦	砥鹿神社宮司
顧 問 大野 俊康	元靖國神社宮司	幹 事 波多野 學	高見神社宮司
顧 問 矢野 憲一	元神宮禰宜	幹 事 塙 東男	笠間稻荷神社宮司
会 長 村田 和之	長束神社宮司	幹 事 原 茂子	夜疑神社權禰宜
副會長 佐古 一洌	松尾大社宮司	幹 事 宮川 脩	福井県護国神社宮司
幹 事 長 木下 鏌二	大江八幡宮宮司	幹 事 山田 一孝	靜内神社宮司
幹 事 生寫 經和	松尾大社權宮司	幹 事 山村 稔晴	高知大神宮宮司
幹 事 小串 和夫	熱田神宮宮司	幹 事 山本 行恭	椿大神社宮司
幹 事 落合 偉洲	久能山東照宮宮司	幹 事 和田 年彌	神宮禰宜
幹 事 藺田 稔	秩父神社宮司	幹 事・監査 荳原 高穗	旭川神社宮司
幹 事 谷田 勉	櫻山八幡宮宮司	幹 事・監査 渡邊 知宣	正野神社宮司
幹 事 長曾我部 延昭	伊豫豆比古命神社宮司	事務局長 畠田 明彦	松尾大社權禰宜
幹 事 戸内 康雅	心清水八幡神社宮司		

平成十九年六月現在

あとがき

本庁主催の研修会の中で禊と講演が一番長く続いていると聞いていますが、今回はその禊を含めた厳しい講演研修会でしたが全て順調に脱落者も出ず全員無事終了した。

石上神宮、森宮司様のご理解と本庁禊研修会場引き受けで手慣れた職員の対応に参加者を代表し紙上を借りて厚く御礼申し上げます。

今回も只十分間の研修発表のために、鹿児島から北海道迄、心ある人達が全国より四十一名馳せ参じ朝六時三十分起床に始まり午后九時迄過密スケジュール、二泊三日間の短い期間ながら貴重な研修を体験されたことと思います。

記念講演は「禊・鎮魂の宮」と題して森正光宮司より拝聴、次で十分、二十分、又、二分間スピーチに分科会にと内容豊かな研修。石井寿夫先生と佐古幸嬰先生の先達により昭和四十六年神社本庁で第一回の全国大会を開催して早や二十三回目の大会、三十七年の歳月。私も第二回目より参加色々教えて頂きましたが、今こそ出番、荒れはてた世相を建て直すのは我々神社人において他に無いものと信じます。今正に誰れかがやらなくてはいけない危機存亡の時なのであります。

元、大阪大学総長、赤堀四郎先生が現在の千葉大学卒業時、中国より留学し学んでいた同級生、張徳周氏より惜別の記念にと色紙に書かれた漢詩と聞きます「雪埋梅花、不能埋香」と示された句の意味は、私達と同じく誠意を持って一生懸命説いているけれどもなかなか認めてもらえない、しかし、雪に埋る梅の花でも降り積もった野にも何時の日にか知る人が出てくるであろう、頑張れとの意味であろうか。

先人達が受け継ぎ雄叫び伝えた日本の心を諸兄には業と磨き教え広めて頂けるものと信じます。

又、何時もながら開催一連の仕事に愚痴一つ言わず縁の下の力持、日陰役として積極的にご協力頂きました事務局一同に厚く厚く御礼を申し上げ挨拶いたします。

平成十九年師走

第二十三回神道講演全国研修大会

奈良県大会実行委員長

村田和之

講話集 布留の鼓動

—第二十三回 神道講演全国研修大会 奈良大会—

発行 平成20年5月1日

編集者
装幀者 神道講演全国協議会事務局

印刷所 呉市広白石一—二—三四
製本所 株式会社 ユニックス

発行所 神道講演全国協議会

〒六六〇〇四 京都市西京区嵐山宮町三 松尾大社社務所内

TEL (〇七五) 八七一—五〇一六 FAX (〇七五) 八七一—三四三四

落丁・乱丁の場合はお取り替えいたします



